むしゃくしゃしたから森の中から成り上がってみた

ナナツボシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
むしゃくしゃしたから森の中から成り上がってみた

【Ｎコード】
Ｎ８８２５Ｙ

【作者名】
ナナツボシ

【あらすじ】
テンプレらしきシチュエーションで死に、目を覚ませばそこは森の中。いわゆる異世界迷い込みらしいが、元来フリーダムな性格な主人公は明るくポジティブに異世界を生きるッ！

（＞◎＜）＜これは前に書いてた「森の中」の改訂版だよう。

（＞◎＜）＜最強、ハーレム、ご都合主義が含まれるよ。

（＞—

<）<地雷が嫌ならお帰りなさいな。

死ぬからの～生きるッ（前書き）

取り敢えず全力でテンプレな導入

死ぬからの～生きるッ

とりあえず自己紹介をしましょうか。まず名前は山崎と言います。下の名前は半太（ハンタ）と言いますが、小さい頃から「ヤマザキパン」と言われ続けたのが嫌ですから、山崎と覚えて欲しいです。そもそも半太と山崎でしたら、山崎の方が格好良いかなと。なんとなくそう思っています。

年は三十路も半ばなので、興味ないでしょう？だから言いません。体型は身長が高いでが、痩せ形ですのでなんかマッチ棒みたいで好きじゃありません。

恋人は適当にいましたが、セックスの楽しいうちはいいのですが、将来だ結婚だと重たい話になると面倒になりまして、３０歳を機に恋人はもたず、風俗を極める事に心血を注ぎました。あはは。

池袋のヘルス「ヌクドナルド」のまどか嬢は、一年通った記念にまさかの本番をプレゼントしてくれたのが、ささやかであるが私の自慢であるでしょう。

今では店構えを見ただけで、その店が当りかハズレかは判るほど風俗の達人となれました。自慢にならないと思いますが、まあ、いいじゃありませんか。道を極める事は無駄になりませんよ。たとえ閨でしか発揮出来ないとしても。

仕事は中堅ゼネコンにいました。一応、一級建築士を持っていますが、独立出来るほど甘くはありません。ほら、世の中不況不況と騒がしいでしょう？独立したってたかが知れているんですよ。

だから適度に刺激的で、それでいて起伏の無い平凡な生活ってものを私は求めているのですよ、私は。

うん、違いますね……

やつでした……と訂正します。

何故かと言いますと、私は死んでしまったのです。それはもうアッサリとゴリンジューって訳です。

まあ説明しましょうか。ってロボットアニメみたいですが、言わなきゃ始まりませんから、お怒りは勘弁して欲しいですね。

そう、私はいつものように目を覚まし、身仕度を経て担当現場であるある官公庁の新庁舎に向いました。うん、よく晴れた爽やかな朝でしたね。

早朝だから渋滞は皆無です。快適な国道を赤茶けた電波塔を背に現場に向かいました。このトウキョーのランドマークは無言でそびえ立っています。何となく敬礼したくなりませんか？

やがて現場につき、朝の申し送りをします。最早ルーティン化した儀式ですけどね。そうして内装を頼んでいた業者の担当者に会いに3階を目指し、私は足場を昇りました。パイプで組まれた櫓みたいな物ですね。

「山崎さん！危ない！」

と、いう叫び声を聞き、思わず上を見上げましたら、ハンマーが私を目がけ落ちてきました……そして暗転。痛いとか一切なしですよ？

どこかで「ごめんなさい、間違えて殺しました。お詫びに別世界で新しい命を手配します。あ、多少身体能力や判断力は上乗せします。では、頑張ってください。　サヨウナラ」という女性の声が聞こえましたが、そのまま意識が飛びました。そもそも何がごめんなさいで、何が頑張ってなのですか？と問い詰めたいですね。あまりに不躾過ぎます。

で、気が付いたら森のなかと言う。

全裸で。

お母さん、寒いです。

いや、お母さんいないませんが……。

なるほどなるほど、頑張る以前に説明が欲しい私でした。フリーダムにさらされた私のお稲荷さんが虚しかったですね。

錯乱からの～人外ッ（前書き）

短くてごめんなさい。

錯乱からの～人外ッ

ほんとにほんとにほんとにライ○ンだぁ

近過ぎちゃってどうしよう！？

可愛くってどうしよう！？

異世界サファリパ～～～クッ！

はぁ……私、ただいま絶賛現実逃避中です。

いやね？とりあえず裸ですし、人もいません。

鳥やなにかの獣の鳴き声はしますが……普通はパニックを起こしませんか？

はい、かくいう私も恥ずかしながら、発狂寸前……いや、発狂しましたよ。

そうですね？三時間は叫んだあたりですか？だんだん私は頭にきましたよ。

だから、そこらの大木に頭を打ち付けたわけです。

それはもう、どこかの汎用人型決戦兵器が暴走したかのようにガンガンと。当たり前かと思いません？

チンチン丸出しで何やってるんでしょうね。

ガンガン……はぁ……

あのですね……向こう側に頭が突き抜けましたよ。わかります？私の頭のカタチの穴が開いたのです。ぶっとい大木にデスヨ。

ポカーンですよ。

んなわけないと、今度は別の大木にアックスボンバーをかましたわけです。アクッスボンバー、つまりホーガンが猪木を失神させたアレです。知りませんか？そんなお子様はお父さんに聞いて下さい。

そしたらバキィィ！！って。あ、グラップラーな最強息子じゃないですよ？

まあ私の戯れに放ったアクッスボンバーで、一抱えで足りない位の大木が倒れました。いや、木っ端微塵です。

はぁ……理解しました。

死に際に聞いた変な女らしき声が言ってた”身体能力や判断力”

ってこれですね。しかしちょっと所のレベルじゃないですって……判断力はよくわかりませんが、取り敢えず私はピクルやオーガみたいな人外らしいです。

まあ、冷静に考えたらここは気温は温暖ですし、身体能力は人外です。狩りでもしたら生きては行けそうですね。とりあえず、色々考えてみますか……

多分この体は滅多な事じゃ死ななそうですね。マラリアとか病気は分からないですが、多分大丈夫じゃないですかねぇ……。

目標はとりあえず人外パワーで木を斬り倒し、建築士の知識で家を建てます。だって裸ですし…寝床はいるでしょう。

後は水場の確保と、食料の確保は欠かせません。

いやあ、私の超ポジティブな性格はサバイバル向きですね。

そこは親に感謝です。ありがとう、父さん母さん！！はっはっは……いや、いませんけどね両親。え？知りませんよ？孤児院育ちですから。だから図太いんです。だって、遠慮してたらオカズ無くなりますし、学校いけば貧乏言われてハブにされますしね？図太くなきゃ生きてはいけませんね。まあいいでしょう、これは。

さぁ、動きますか……

時は金なりと言いますからね。

挑戦からの〜バトルッ

取り敢えず水場から確保しますか。人間生きてくには、必ず水は必要ですからね？食物より先に水は必須ですよ？と、今は鬱蒼とした森な訳ですが、取り敢えず麓（と、思われる）方向を目指して出発です！全裸で！川探すのです！

ぷらーん　ぺち

ぷらーん　ぺち

こちらに来て、若干サイズアップした気がする我が愚息ですが、歩くたびに内股を叩くんです。うふん。この解放感――カ・イ・カ・ンです♪

多分、しばらく本来の目的である交尾には使えない、完全なる小便専用管と化してますね、我が愚息は。

だが、やはり大事にしてやりたいですよ。いつ何時、誰の快楽の泉にフェードインするか分からりませんからね？と言うか我が亀仙人のツルツル頭が、さっきから若干痛いです。

とはいえ、これといって策も無いです。なので、取り敢えずその辺の植物のつるを腰ヒモとし、柔らかな葉っぱを適度に垂らし、原始的なパンツを作成。はじめ人間ギャー……ま、いいです。とにか

く亀仙人は守られたのですから。

亀仙人も嬉しそうですよ。

とか言ってましたら、日もてっぺん辺りから傾いて来たので、水場探しに戻ります。と言うか喉がカラカラなんですよう。腹も減りましたしね。

だいたいですよ？夜になったらどんなヤバイ獣がでるか分からないですもん。あ、これフラグですか？うるさいです。

しかしツイてますね。時折見かける桃のような（色は黄色）果物を見かけ食べました。毒とか怖くないのか？いえ、気が付いたら食ってました。食べた後にあっ毒！？と思いましたけど遅いですよ。まあ結果オーライですか？私は渇いた喉を潤しながら、とにかく歩く、歩く。

そんなこんなで2時間も歩いたでしょうか？木がまばらになり、林くらいの間隔になってきた辺りで、水が流れるような音がッッ！！！！

やりました！男、山崎！とうとう川を発見しま……おおう！？私の人外アンテナが反応しましたよ旦那！

川のほとりには、水を飲む鹿のような動物がいました。

キタキタキタキタぁ！

ワシ、あいつの命(タマ)とっちゃる！！失礼、取り乱しました。

だって肉は食料になるだろうし、皮は服に出来きます。衣食住の衣・食を一気にゲットできますよ？ふっふっふ……

ただ、問題がひとつ。

ぬるい現代日本人である私は、生き物を殺す勇気が正直無いです。

多分、やっつけたら血がドバドバ出たり、変な液体飛び出し首が有り得ない方向に曲がったりするでしょう？

オエッ……想像しただけで、かなりグロいのですけど……

しかもアイツ、体高3メーターくらいありますし、ものっそい角あります。

刺されたら痛そう、ってか死ねるでしょう？いくら身体能力チートだとはいえ、刺されたらヤバイに決まってます……

ん？　こっち見て…ますか？

鹿っぽいのが、首だけこっちむけて、「ん？」みたいに見てますね……あらやだ、超可愛いんですが。

ですが次の瞬間、彼の目が真っ赤になり、突進してきやがりました！！

ヤバイヤバイヤバイ！あれ、なんだ！？いや、そうです。話せばわかりますよ！落ち着け鹿！さぞかし名のある鹿とお見受けしたが、なぜそう荒ぶるのか！違～う！あれ？私は結構余裕ある？いいからＤＡ☆ＭＡ☆ＲＥ私の頭。

鹿タンと私の距離は約１０メートル

うわあああああ！！

心臓が握り潰されるような恐怖のなか、私は手当たり次第その辺の石を投げつけます。目をつぶり、無我夢中で。まるで駄々っ子の攻撃ですね？「うわーん、こっちくるなー」的な？

七つ目くらい投げた辺りで、「ボグゥ！！」と激しい音がして、静かになりました……。

おそるおそる目をあけたら、鹿っぽいのが倒れてました！

近寄ってみるとピクピクと痙攣して、舌がびろーんと出ていて、頭がパーン！ってなってました……。

うわぁ…小石が弾丸並みの威力って……正直ヒきませんか？

ま、取り敢えず……

シカとったどおおお！！！

故郷の父さん母さん

貴方の息子は立派に童貞（殺しの）捨てましたよ！だから親いないけど（しつこい）

はぁ……だがまたも問題発生です……解体作業のがグロいのでは無いでしょうか？

そして私は途方にくれた。

数分ほどですけどね！

罪悪感感じても腹膨れないですもん！

と、ポジティブ全開して、解体作業はじめましょうか。

私は刃物が無いので、河原のデカい石にさらにデカい石をぶつけて叩き割り、刃物っぽいのをいくつか拾い、鹿のそばへ。

ふうっと深呼吸

ズビュ　ヌチュ　ズビビビビ……

〜自主規制中〜

はぁ、返り血で身体中が真っ赤です……

おかげさまで、大量のシカ生肉と、布団一枚くらいの大きさの皮をゲットしました！！

さっきの石でなめして、川で洗って乾かす。ウホッいい革です！！

私の中に充実感が溢れ、取り敢えず人外ライフの入り口には立てたかな？そう感じた昼下りでした。

充実からの～労働ッ

やぁ、山崎です。シカを仕留め有頂天です。取り敢えず食事を確保し、調理の為に乾いた枝を沢山集めました。

それらを組み上げ、焚き火の準備をし、チート身体能力を発揮させ火をつけました。板に枝で摩擦をぐるぐるってね？ああ、数秒とか笑えません？むしろ加減間違うと穴が開くんですよ。これだから人外は……と言う自虐ギャグをかましてみても虚しい。

火がおきた所で木を裂いて作った串に肉をさして焼くわけですが、お腹が空きすぎて生で行きたい衝動に！それやったら私の人間と言う枠が完全に壊れそうで我慢しました。

あ、肉は焚き火がオキ火になってから焼きました。流石に焦げたら美味しくないですから。

お腹一杯になり、川の水をガブガブ飲みましたら、ようやく人心地がつきました。

柔らかい土のうえに寝転び、少し昼寝。緩やかな風がとても気持ちがいいです。

日本じゃなかなかこんな時間は取れませんから、なんか満たされた気持ちがしますね。大自然サイコー！鳥の声が今は心地がいいです。

お腹一杯なりましたら突如ムラムラしてきたので、新宿は歌舞伎町のピンサロ、「花マン開」のみゆきちゃんの、毛の無い綺麗な桜貝を思い出しながらの手淫を一つ……。

なんか、解放感がタマラナイです！。多分この快感は初めてかもしれない。よく裸のオツキアイだけのお姉さんと、野外で盛った事はあります。と言うか所謂アオカンなんて、そんな珍しくないじゃないですか。

だがしかし、こんな大自然で発電する紳士は中々いないでしょう？ヤバいです。癖になります。

……ふぅ。

やぁ、失礼失礼。つい賢者になってしまいました。メンゴメンゴ。

気を取り直し、今度は住居に取り掛かりましょうか。どうも見たところ近隣に集落らしき物はなさそうですし、彷徨っても深みにハマるでしょう？常識的に考えて。だから取り敢えずは拠点って事です。

取り敢えず、川から５０メートルくらいの場所の川から少し高い場所に、半径２５メートル位の広場を作ります。流石に見通し悪い

と怖いですから。

中心には、樹齢５０００年は下らないような、大木と言うには憚れる超巨大なブナの木があります。と言うかこの木は切ったりしたら何か祟りでもありそうな、そんな雰囲気がありますね。

だからその周りの木を次々と切り株ごと引っ込抜き、広場を作ります。もう私の身体はマシンですね。サックサク抜けますもの。と言うか、この能力を自覚してから一回も全力出してないんですよ？怖いですよなんか……。

まあそれはいいとして、次は蔦と固い枝で縄ばしごを作り、ブナの大量に枝分かれしてる場所に据えました。

後は手当たり次第引っ込抜いた木を手刀で乱暴に加工し、ブナにツリーハウスを拵えました。ツリーハウスは男の浪漫ですから。秘密基地的な興奮がたまりませんな。

そんなこんなで完成しました。まあ１０畳ワンルームって感じですかね？中々快適そうです。このブナの木デカいですからね。これでも遠慮したんですよ。ごめんね？カーサン。ん？いやなんか寂しいから、ブナの木に”母さんの木”って名前つけました。だからカーサンなんです。

これで雨露は防げます。まぁ建築士が作ったにしては粗末なもんですが……贅沢は言えません。

後は山火事でも起こしたら泣けるので、河原から人の頭程度の大

きさの石を集め、寸胴三つは置けそうな「コ」の字型の釜戸を作り、河原の泥で釜戸の隙間を埋めた。料理は必ずしますからね。

まあまあ良い出来と自画自賛してみます。道具が無いのに立派でしょう？

うん、虚しいですね。うるさいです。

トイレはあれなんで、大便は川で、小便は縄張り主張の為に広場を囲むように立ちしょんする事にしました。弱い獣なら防げないかなと言う希望的観測ですけどね？

取り敢えずここまで済んだ訳ですが、かなりの労働でしたが、チート身体能力のおかげさまかまったく疲れてないのが気持ち悪いですね。良いことだとは思いますよ。だけど中々馴れませんよ。未だ異世界って半信半疑ですもん。でも、もしかしたら東南アジアのジャングルかもしれませんからね？だからまだ確信は出来ません。

そんなこんなしていたら、完全に夜になったので自慢のツリーハウスで就寝です。

はぁ……健康的な生活ってやつですね。

明日も頑張ろうっと。

ああ、腹が立つくらいに星が綺麗です……。

驚愕からの～拾い物ッ（前書き）

下品あります

驚愕からの〜拾い物ッ

やぁ、山崎だよ。今、窓から差し込む爽やかな朝日で目覚めた所さ。異世界らしき場所に放り出されて一日目が終わった訳さ。

というか、ツリーハウスの下で、何やら叫び声が聞こえます。

「イヤアアアアア！！」って、若い女の声だねえ。ま、私には関係ない話ですわな。と言うか向こうでおやんなさいよ。わざわざ人が寝てるそばでやらなくてもさ？

しかしまぁ、正直煩いなあと窓から下を覗くと、５メートルくらいありそうな巨大な熊に追われた女が、悲鳴を上げながら弓をぺしぺし撃っている。

ってかさ、全く効いてないじゃん……ばかなの？死ぬの？

「あーこりゃやられるな」と思ったが、人の死体は見たくないので仕方なく１０メートル位の高さにある我がツリーハウスから、私は飛び降りた。やだ、格好良くない？

すかさず私は集めておいた投石用の石（野球のボール大）を、二つ三つほど熊に投げるとあっさり即死。舐めるな熊吉がッ！戦闘描写もいりませんな。

だがフードを被った女が、恐怖の表情で私に弓を向けてきた。

まぁ獣に追い詰められ、さらに得体のしれない半裸の見知らぬ男

は、自分が為す術が無かった熊を石っころであっさり殺した訳だ。流石に不気味に感じるかあ……。

だがね？命の恩人に弓向けるのか？　なんかムカつくな。ようしならば戦争だ。恨むなよ？

だからまあ一応、力を加減して石を頭に投げて気絶させた。フェミニストだからね？私は。

そして植物のつるでぐるぐる巻きにしばり、ツリーハウスに連れ帰る。

あ、ちなみにローブは脱がして没収した。戦利品として頂きます。貴重な布製品だもの。文句は受け付けない。

あと弓と矢筒は火にくべた。物騒だからね？リスク管理は大事ですね。はっはっは

ローブの無い縛られた女は、歳はハイティーン程度かな？　やたら可愛い顔だな。身長は私より５？くらい低いから、多分１７５？くらいかな？肌の色は褐色だが、顔のパーツは映画レオンの「マチルダ」を、少し大人っぽくした感じです。コケティッシュな感じでまぁ可愛い。うんうん。

胸はそう、Ｄカップくらいあって、柔らかそう。とても美味しそうだ。

不思議なのは髪の色が真っ白で光沢があり、耳が尖ってるのですな。へんなの。あれだ指輪物語のアラウェン的な……エルフか……ああ、只今ここが異世界と確定しました。泣いても良いですか？

まあそうやって、暫く眺めてたら女が気が付き、縛られた事を理解したらバタバタと暴れた。うふふ、そんなんじゃ融けないですよ？池袋の秘密サロンの女王様であるマキ様直伝の亀甲縛りを舐めないで欲しいなあ。

だが、煩いなあ……

盗人たけだけしい事この上ないな。このエルフ。

煩いからビッシビシと往復ビンタしたらおとなしくなった。

殺す気まんまんな目で睨むから、さらに往復ビンタしてやったらやっと怯えた目になり、震えながら黙った。

最初からそうしなさいや。面倒くさい。こっちの家に不法侵入したのあなたよ？まずは事情聴取しなきゃならないでしょうよ。だから私は反省もしないし、謝りもしない。

さて、取り敢えず尋問だわ。

お前なにもの？どこから来た？ここどこだ？」私は燐とした声で言ってやりました。

だが返事はなにやらアラビア語みたいな変な言語でよくわからん。

ほほう？しらばっくれて訳わからない言葉で誤魔化しますか？なら仕方ありませんな、私も流石にムッとしました。だから――

さわっ…さわさわっ…

「～！？　ムー！　ムー！」

後ろ手に縛られている彼女の脇腹を、フェザータッチでくすぐる。
ホッホッホッ、逃げられはしませんよ？　そもそも藻掻けば藻掻くほどに食い込みますからね？　さあ、まだまだ行きますよお嬢さん？

さわさわっ…さわさわさわっ

「ムー！　ムー！＆∞♂§○↑◆◇◎ッ！」

ホッホッホッ、何を言ってるか分かりませんね？

さわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっさわさわっ……

「ムー！　ムムッん……ムムッ…ん……ムーーー！」

しょわわわ～……

……この女、やってくれましたよ。失禁そして不思議な液体を吹いて失神しました。何ですかこれ。拷問なつもりが、謀らずもサービスしてしまったようです。私の才能が怖いです。

「ナアウ…クテロ……タンスグ…レイ……」

薄ら目を開けて、所謂ア〇顔を晒したおバカさんが何か言ってますね？

あー…もしかして、普通に言葉が通じないのでしょうか？あらら…なら私が悪い……いや、私は彼女にサービスしたのですから反省はいりませんよ！謝罪は断固拒否します。ですが――

まあ、異世界ですしね……

取り敢えず身振り手振りでこちらに敵意は無いと説明し、拘束は解きました。ですがまた暴れたらビッシビシいきますからね？

一応、通じたみたいですね？

だから、取り敢えずこの場所から出てけと伝えてみました。何故ならば私は1人で野人ライフを満喫したいので、他人は邪魔なのですよ。

だが、女は断固拒否する。何なのですか？このお嬢さんは。私はしつこく説得するんですが、涙を流してここに居たいというニュアンスのゼスチャーをしてきます。

こんな綺麗な女がなんなんでしょうね？まぁ、お尋ねモノなんですか？まぁ、やりとりがだるいので、迷惑かけなきゃ居てもいいと伝えました。

理解したらしく、抱きついてきて感謝をしめしてきました。

まぁ、いいでしょう。言葉がわかりませんし……

取り敢えず、同居人（暫定）になっりましたから、お祝い変わりにシカ肉を二人で食べました。

よっぽどお腹が減ってたのでしょうね？多分1？はむさぼり食べましたよ？。このスレンダーな体のどこに入るのでしょうね……

取り敢えず名無しではあれですから、自己紹介しようと私は自分が山崎という名前だと、自分を指差し告げましたら、発音しづらいのか「ザキ」と言ってきました。何か即死しそうな響きですが、まぁそれでいいでしょう。

対して彼女はイルフィというらしいです。まぁエルフっぽい……のですかね？。まあ知りませんが、一応これで最低限の意思の疎通はできますね。

言葉は通じませんから、まぁ取り敢えず名前がわかれば不都合は

ないでしょうね。

食後に昼寝だと横になっりましたら、イルフィも寝転んできました。特にする事は無いですからね。

いま私の前にこちらを向いて横になるイルフィですが、胸が怪しくたゆむのを見て正直興奮してきました。先ほどは彼女の嬌声を聞きましたしね。

そもそも彼女服装がいけません。何やら麻みたいな素材のやたら胸元が開いたワンピースなんですよ。それだけしかないのです。

しかもかなりのミニです。きっと狩り等をするのに楽だからでしょうね？ですが興奮するなってのが無理っしょう。下着もありませんから、実は先ほどから彼女のテラテラ光ったナニかが丸見えなんです。

無意識のうちにエレクトしてたようで、じっと此方を見ていたイルフィがそっと握ってきました。男のこうした外卑た視線はすぐ女性は気が付くと言いますしね。

恩返しのつもりなのでしょうか？ありがとうございます。私に遠慮の二文字はありませんよ？悪しからず。

彼女の半開きの唇に私の舌をねじ込んだら、彼女のスイッチも入ったようですね。二人して貪りあいました。接吻は快楽の入り口ですから、私は手を抜きません。

まさに交尾。言葉が分からないから余計に燃えますね。彼女の鼻息が妙に甘いです。

やっぱりまぐわいはたまりません。

イルフィも貞操観念低そうですし、野人ライフにはもってこいです。

いやぁ、いい拾い物しましたね。

せっかくなのでもう一回しときましょうと思ったのですが……。

えっ？血？

驚愕からの～拾い物ッ（後書き）

改訂なので、毎日こまめに投稿します

理解からの～日常ッ（前書き）

この主人公の喋り方は気持ち悪い。でも今更どうしようもないな。

理解からの～日常ッ

やぁ、山崎ですよ。すいませんね？挨拶がワンパターンで。お堅い宮仕えから解放されて、なんだか気が抜けたのですよ。

だから申し訳ありませんが、行動も自重はいたしませんよ。別に構わないでしょう？まあ、異論はあれど気にせず行だけですけどね。

さて私がこちらの世界に来て多分１０日くらい経ったと思います。早いでしょう？光陰矢のごとしってやつですね。地球にいた頃は１日が長く感じました。５分置きに時計をみては、体感は１時間にも感じていました。

最初はどうなるかと思いましたが、チートな身体能力は優秀です。狩りは楽勝ですし、身体が重機そのものって感じで、特に困難は無いですね。むしろ力を持て余します。

あ、そうそう。　劇的に変わった事がありますね。

あの拾った娘のイルフィなんですが、どうやら本当にエルフという種族らしいです。お耳は長いですしね？美人さんでもあります。まったく眼福と言うやつですね。

人間とは系統が全く違う生物らしく、まず寿命が長く平均は千年～千五百年もあるようです。

因みにイルフィは百歳弱（誕生日を祝う風習がなく、大体この位程度かしら？と言う認識らしいですよ）なので、人間に合わせると

まだ少女と言うことです。成人は三百歳くらいらしく、気の長いことですね。

ん～？なんで判ったかですか？いやエルフは魔法を使うんです。よくわからりませんが、その辺を漂っている精霊と言うものを使役して使うらしいですね。

その魔法のひとつが精神感応魔法と言い、要は通訳魔法って事ですね。だから今は普通にイルフィと普通に話せます。ただ、向こうからはちゃんと日本語に聞こえますが、口は全然違う形に動いてるんです。どうやら精霊さんが通訳してると言う認識が正しいのでしょうね。

なんて都合のいい話でしょう……まぁ私は助かるから構いませんが。

おかげでこの世界の事が朧気ながら理解出来きました。

先に手近なとこから片付けますか。種族からいきましょう。まずエルフは長い寿命と単一民族思想からか、個体数が少ないそうです。三つの部族があり、個体総数は千に充たない。そして魔法を使える唯一の種族であり、その為に人間に奴隷にされたりするらしいですね。まあ、魔法とやらの恩恵に与るためにいたいけなエルフを狩る。ホッホッホッ……こちらの人間も愚劣ですね。ま、当然私は愚劣の権化を自覚してますがね。

イルフィの部族はイル・クルーツという名前で、農耕や魔道具作成をほそぼそとしている穏やかな部族でしたが、奴隷目的のエルフ狩りにあい散り散りになったのだそうです。難儀なことです。

イルフィとは、イル族の姫って意味らしく、王様の何番目かの娘だそうです。つまりイルフィはお姫様と言う事になります。

だから最初逢ったとき、やたら抵抗してたのかと納得しました。この外郎！的な感じですか？いやあ当たってますよ。私は下衆いですからね。

そんな事情であれば人間嫌いで当然でしょうね。だけどイルフィに言わせれば私は例外らしいです。彼女が言うには、私は精霊がわらわらまとわりついていて、要は常に「祝福」状態らしいです。まぁお得な感じですから、少し勉強したら、俺も魔法を使えるみたいですよ。面倒だからしないですけどね、今は。

あとはこの世界を牛耳っているのはやはり人間族で、魔法が使えないし寿命が短いですが、工業が発達しており、広い領地を支配しているようです。まあ地球の人間と野生動物の関係に置き換えたらわかりやすいかもしれませんね。

人間社会で国という単位ならば、四つの大陸に五つの国が存在してるみたいです。まぁどうでもいいですがね、私には。関わらないですし。

因みに現在地から最寄りの街までは、約２０？あるらしいです。近い…んですかね？よく分かりません。

人間族は他種族を迫害しています。やはり人間はどこの世界も同じで、なんか恥ずかしいですね。地球ではそうは思いませんでしたが、私が生きていた文化レベルから遥かに劣るらしいこの世界なら別です。

だって中世レベルと言う感じですから、つまりは私達が通ってきた時代の過程にこの世界はあると言えます。地球の中世レベルでは、奴隷や農奴が当たり前にいましたから。

ならば彼らはいずれ私達と同じようになるでしょう？なんかそれって、「これが貴方の本性なんですよ」と見せられてるみたいで気持ち悪いのですよ。だからと言って私には何も出来ませんがね？まあ、可愛いイルフィが危なくなったなら、間違いなく私は人間を倒しますけどね？

ふふふ、柄じゃ無いですか？まあ私の所有物に汚い手で触らせない。そういう事にしておいて下さいな。

話がそれましたね。後はドワーフ族、小人族、獣人族、竜族がいますが、それぞれ交わらないで生きてるらしいです。

ですが人間以外の種族は割りとうまく折り合いつけているようですね。全体的な比率は、人間７：固有種族３程度で、３の中に色々な種族がひしめいていると言う事ですね。

まぁ構成はこんなもんですかね？

□■□■□■□■□■□■□

～ｓｉｄｅイルフィ～

私は逃げてきた。　あのおぞましい人間共から。我が部族の集落に卑怯にも夜襲をかけてきた。

幾人かは死んだり捕われたりしたが、ほとんどは逃げた。

私はとにかく抵抗しながら、人里離れた深き森を目指した。森は私達エルフの友人。だから必ず守ってくれるはず。

そしてやっとの思いで人を振り切った。そう思って安堵して休んでた。魔法を使いっぱなしで精神力は空っぽだもの。

……そこにヤツがあらわれたんだ。見たこともないような、巨大なグレイベアーだ。私は残り少ない精神力で火の魔法を飛ばしながら、とにかくあてもなく逃げた。

けど身体が言うこと利かなくなり、もうダメ！！ってところで、突然黒い人影が現れて、あろうことか石を投げつけアッサリとグレイベアーを殺してしまったのだ。

ああ精霊達よ……感謝します……と、よく見たら人間ではないか！

私は動かない手で何とか弓を持つが、情けない事に弦をひく力がない……

が、男はいきなり石を私にぶつけた！気が付いたら私はす巻きにされていた。なんたる屈辱……

そして彼は私を拷問してきたんだけど、なんか気持ち良かったのはなんでかしら？理解出来ない。

色々あったが彼は敵意は無いから抵抗するなとゼスチャーで伝えきて、私を警戒しながらも蔦を切り、私を解放した。

なんなんだこいつは。体はたくましく、顔は凛々しい。黒髪は美しいが戦士という感じでもなさそうだ。ただ異常なくらいに精霊様が纏わりついている。人間に精霊様が加護を与えるなんて聞いたことがない。

彼はさらに邪魔だから出ていけと言う。嫌だ！絶対に嫌だ！こんな状態で1人で生きてけないし、私自身、彼に興味が沸いたから。

必死に嫌だと言ってたら、彼は困ったように苦笑いをしたあと、いても良いというゼスチャーをした。

理由はわからないが、とにかく嬉しかった！はしたないが抱きついてしまった……

彼は肉を食べさせてくれた。食後、彼が昼寝をしようというゼスチャーをして、肩肘ついて横になった。

私は気が高ぶってるのか、眠れそうに無いから、形だけは横になり彼を観察していた。

彼は私の体に興味をもったようで、チラチラ見てくる。見たいならちゃんと見たらいいのにね？シャイなのかしら？人間は分からないわ。

そしたら彼の下半身はむくむくと大きくなり、腰ミノからはみ出した。私に発情したようだ。なんか嬉しい。

エルフ族は体を重ねるのは夫婦だけなのだけど、彼のを見ていたら欲しくなっちゃった。何より私の命の恩人だわ。なら夫婦になるのは当然よね。

やり方は知ってる。でもちょっと怖い。初めては痛いらしいから。でも、さっき彼が私をくすぐった時、私は有り得ないくらい気持ち良かった。失禁しちゃったしね……。なら私の初めてを貰ってもらおう。

でも言葉が通じないから、私から勇気を出して彼の分身を手で愛撫したら、一気に抱かれた。彼ったら実は情熱的？

彼も私が気に入ったの？だったら嬉しいな。

彼は荒々しかったけど、身体中に接吻して愛してくれた。なんて細やかなんだろう？気が付いたらおねだりしてた。

強くて夜も逞しい。私は彼を離さない。決めた。彼は私のもの。

～side　out～

□■□■□■□■□■□■□■□

しかしまあイルフィの魔法のお陰で火の心配はなくなりました。いちいち棒回しは面倒ですからね。

後は畑を作りました。と言っても、山歩きした際見つけたハーブ類ですがね。塩がありませんから、今は肉を焼くだけの食事ですが、ハーブがあれば少しはマシでしょう。

後嬉しかったのが、タバコ草が大量に群生してる場所を見付けたのです。イルフィが教えてくれました。エルフはこれを儀式に使うそうです。なのでいずれ吸えるようになるでしょう。嗜好品は心に潤いをくれますからね？

イルフィは働き者で普段は寡黙ですが、夜は甘えん坊で何回も求めてきます。

うん、イルフィを嫁にしましょう。嫌だって言っても気にしませんよ。綺麗でアノ具合もよく、働き者ですよ？こんな優良物件絶対はなしませんよ？ホッホッホッ……。

取り敢えずいまはそんな感じですね。ではまた逢いましょう。

開拓からの～豊作ッ

あれからどれくらい経ったでしょう？多分半年くらいですかね？とにかくこの地に根を下ろしてから随分経ちました。

取り敢えず私とイルフィは働きました。というのもイルフィが山でとれたキノコ等を、人里に降り物々交換で数々の作物の種を手に入れたのですよ。

もちろんエルフとばれたらやっかいなので、変化の魔法で男装し、フードを深くかぶり冒険者に成り済ましてですからね？私はイルフィに危険は犯させませんよ。

山に帰るときも後を付けられないよう細心の注意を忘れずにしてもらってます。風の魔法を使ってもらい、素晴らしい速さで遠回りして貰ってます。今のところは大丈夫みたいです。

イルフィには畑作の知識があり、彼女の指示するままに畑を耕し、気が付けばちょっとした学校のグラウンドくらいの広さの畑が出来ました。流石はエルフの知識です。正直感心しましたし、彼女の献身は堪らなく愛しいです。

山の腐葉土をふんだんに混ぜ、家畜（後述）の糞を堆肥に使いました。

ふと見渡すと、我ながら見事な出来だと自画自賛したくなります。

私が戯れに「イルフィ、立派な畑が出来ました。全て貴方のお陰

ですよ。ありがとう」と柄にもなくお礼を言いますと、イルフィは「気にするな。私も飢えたくは無いだけの事だ」なんて顔を真っ赤にして言います。

なんて可愛い生き物なんでしょうね。

畑は様々な作物を植えました。小麦、芋、野菜各種、ハーブ。大したもんでしょう？はやく収穫したいものです。豊かな食生活は精神衛生に一番です。食生活が荒れますと、心に余裕が無くなりますよ。皆さんもお気をつけて。

後、あまりに暇でしたので、山から粘土を掘ってきて焼き物を作りました。窯もたくさん作りましたからね。

料理の窯、炭焼き窯、燻製窯、そして焼き物の窯です。とにかく暇だけはたくさんありますから、明るいうちは2人それぞれ働き、暗くなったら眠たくなる迄イルフィと愛し合います。星を見ながらのセックスは素晴らしいです。ま、他に娯楽が無いですからね。

余談ですが、イルフィはまだ成人年齢に達してませんから、生理も排卵もありません。だから子供はまだ作れないです。なので今は奔放に彼女は楽しんでます。色んな意味で最高のパートナーですね。

私達はたくさんの器をつくり、イルフィに街の商会に売らせてみたら、意外にもかなりの高評価で、コンスタントに持ってきて欲しいと言われました。

特に絵皿は人気らしく、貴族が飾るために買い付けるようで、一枚銀貨１０枚で買取ってくれます。

因みにこの世界の通貨は紙幣がありません。全て硬貨で、銅貨、銀貨、金貨、白金貨が存在します。

それらは全て百枚で上の硬貨一枚に交換できます。日本円に換算すると、銀貨一枚で千円程度です。平均的な平民家庭で、毎月銀貨５０枚くらいで生活できるらしいですね。

だから私の皿は一枚一万円ってことです。貴族っておバカさんですね。そういう訳で我が家は割りと裕福ですね。買うものはせいぜい調味料くらいで、後は自給自足ですから。

自宅はツリーハウスはやめて、平地に平屋の家を建てました。漸く建築家だった私が本領発揮できましたよ。嬉しいです。

それにイルフィが結界をはれるので、外敵を気にしないでよくなったからと言うのが一番の理由ですね。

森に迷い込んだ人間には我が家は見えません。かなり便利です。

まぁとにかくそうして、とってつけたようなツリーハウスはやめにして、ちゃんと図面をひいて設計したのです。

道具に関しては陶芸で手に入れた資金をもとに、色々手に入れました。まあ私が能力任せにやることは可能ですが、やはり繊細な作

業には道具は必須です。イルフィとの愛の巣ですから、そこはちゃんとやりましたよ。５ＬＤＫの平屋は中々自信作ですよ。

まあ農具も含め必要最低限な道具は手にいれました。お陰で随分と楽になりましたね作業は。

家は気候を考慮して、地中海風にしました。家中の床は自分で焼いたテラコッタを敷き詰め、壁は川沿いの土にキラキラひかる石を砕いて混ぜたものを塗り、土壁としました。

完成したときイルフィは、「こんな素敵な家、見たことないわ！大好きザキ！」と熱い抱擁とキスの嵐をくれました。やはりイルフィは可愛いですね。そもそも現代建築から古代建築まで勉強した私ですから、当然と言えば当然です。でもイルフィがはしゃぐ姿を見れたのは重畳ですね。

その姿に欲情し、いつもの3割増し（当社比）で抱いたのは秘密ですよ？

後は畑を囲むように水路を作りました。川から直接水を引いてます。私が全て掘り、畑を含む我が敷地を取り囲み、堀のようにしました。

幅は3メートルで、内側の防水処理として山の粘土を塗ってあります。

後は橋をつくり、山への道と正面にかけた訳です。

そういえば街でキセルを手に入れたので、タバコ草を加工してようやく吸えるようになりましたが、どうやらただのタバコ草ではなく、軽くトリップする作用のある種類だった。

いわゆるカナビスとか言われる葉っぱですね。なので酩酊状態は仕事に影響されるので、もっぱらイルフィとのラブモード前に、二人でイチャイチャしながら吸うというのが暗黙の了解となってます。必要以上に乱れ、後で冷静になった彼女が赤面するのを見るのはたまりません。

いやぁ、実に快適な生活です。私は幸せですね。イルフィはどうでしょう？きっと幸せなんじゃないかと自惚れてみる私です。

最近は日がだんだんと短くなり秋が来ました。畑は作物がやまほど実り、幸せな季節となりましたね。私たちの苦労は報われました。

私達は手を取り合い喜び、とれた作物でささやかな豊穣祭を2人きりでやりました。

なんかこう……やっと異世界ではありますが、現実感が沸いたと言いますか、「ここは私のホームだ！」とやっと思えました。

うん、もはやココが私の故郷です。だからせいぜい稼ぎますよ。

そうそう、山の獣を狩っていたら、イルフィのやつが、「精霊たちがザワザワしてる」と、不安な顔をするので、街から家畜を買い

ました。獣と言えど、森の一部な訳です。

だから私達は豚を百頭、山羊を二十頭、鳥を二十羽買いました。

山にはブナやナラなど、ドングリがなる木が沢山生えてますから、イルフィに結界を張らせて豚を放し飼いにしました。イベリコ豚の模倣です。

鳥と山羊は家のそばに広い囲いをこしらえ、放し飼いです。そのお陰で、今は毎日山羊の乳を飲み、卵を食べ、時折豚を食べられます。

もっと大量に塩が手に入ったら、生ハムを作ろうと企んでます。ハモンイベリコならぬ、ハモンヤマザキですね。非常に楽しみです。

まあ冬になる前に塩でも探しにいきますかね。岩塩ならどこかにありそうですから。

では今日はここまでです。さようなら。

開拓からの～豊作ッ（後書き）

今日はこれで最後

知識からの～成長ッ（前書き）

未だ説明パート終わらず。

知識からの～成長ッ

やはり塩が欲しいですね。贅沢言えば胡椒的なスパイスもです。食事が味気ないのですよ。村から少しは買ったり出来ますが、如何せん高価過ぎます。これらも異世界ならでは何でしょうが、正直つらいですね。現代人は舌が越えすぎていますから。

イルフィに聞きましたら、塩の価値は一財産築くレベルと言うよりも国家レベルで貿易だ！くらいの高級品であり、当然のように戦時中の戦略物資足りえる物と分かりました。胡椒も冷蔵技術に乏しいこの世界ですから、保存を促進するスパイス類は扱える商人も限られているそうです。

ならばどうしましょうかとイルフィとヒソヒソとお話した訳です。

そこでまず、塩の製法を知識として知っている私は、海水塩をどうにかして精製し確保→それをメインに商売を→資金が潤沢になり、徐々に胡椒の栽培に着手→私とイルフィにんまり左うちわ……なんて素晴らしいのでしょう！

という作戦ですね。ただネックになるのは二人で外に行けないってことなんです。

集落ヤマザキ（仮）を維持するためにはどちらかが残らないといけない。家畜とか畑がありますしね？結界の維持も必要になります。この世界での遠出とは、幾日も泊まり掛けでとなりますからねえ。それは移動手段が馬車か徒歩に限定される為です。

ならば私が魔法覚えて私がここに残ると言う選択もあるんでしょ

うが、イルフィが人間に見つかると困った事になりますからね。

四六時中変化の魔法を維持したら、精神力がガス欠おこすらしですよ。怖いですね？魔法とやらは。

だから必然的に私が行くしかない訳です。イルフィがここにいる分には結界のお陰で絶対に他人に見つかりませんから。なので冬になって畑も作業出来なくなり、家に閉じこもったら習おうとしてた魔法を、前倒しして覚える事になりました。

本当に面倒な事ですね。私は魔法よりも、人外腕力で暴れる方が似合う。そう思いませんか？まあいいでしょう。いずれは必要になる力です。エルフであるイルフィから言わせれば、ここまで強い加護を持った存在は知らないと言う事ですから、利用しない手はありませんからね。これも異世界に飛ばされた恩恵？なのですかね。

とりあえず計画としては塩田作成するために、未開であり海に面した土地を見つけ、塩田を作る為の試行錯誤をしなければなりません。と言うのも私が塩田を知っていると言っても、それはあくまでも某ＮＨＫで見たドキュメンタリーでの知識ですから。私、建築家ですよ？塩田なんか出来る訳ないでしょう？おバカさんですね、そこまで恵まれた能力ではありませんよ。

そして運搬の為の手段の構築と、集落ヤマザキ（仮）規模の拠点を向こうにも作る事ですね。保管する倉庫も必要ですし、滞在する宿舎も必要になりますからね。いずれは海運も考えています。この国がある大陸は、言うなればオーストラリアのような巨大な島らしいですからね。ならば海運に秀でれば濡れ手に泡…そういう事ですね。

と言う事はそれなりに期間は必要であるし、いままでイルフィが使った魔法程度は必須なんですよねえ。え？当たり前でしょう？向こうにも結界が必要なのですから。塩は戦略物資と言いましたよ？この大陸にある国や商人に目を付けられたら困りますからね。騎士団を差し向けられても殺せばいい話ですが、一国の軍を相手には無理でしょう？なので魔法習得は計画を進める以上必須な訳です。

幸い私には加護がありますから、素質はバッチリなのだとイルフィは言います。ただ彼女が私の先生になるにあたって不安が１つあるんです。それは彼女が物凄くノリノリだと言う事です。何ですか？あの悪魔のような笑みは。普段私が彼女を手玉（主に夜）に取っている意趣返しですね、完全に。まあいいでしょう。今夜も失神するまで犯してあげますからね？

「あ、あうっ。で、でも勉強はちゃんとするんだからねっ！」

夜犯されるは否定しないんですね？

「し、知らないっ！」

ね？可愛いでしょう？

さて後の懸念事項は、私がとうとう避けてた「この世界の人間との接触」を覚悟しなければいけないと言う事ですね。

はぁ……ただの野人ライフが良かったのですがね……

まぁ今はイルフィってー嫁がいますし、覚悟してみますかね。ああ、どうやらイルフィも初めて契った段階で、私と一緒に生きてい

く覚悟があったそうです。エルフは一度契った相手と婚姻し、それはどちらかが死ぬ迄続くみたいですよ。ただ婚姻しているからと言って、他の誰かとイたしたりするのは奔放だったりするようです。エルフと言う種族の制度での婚姻、そして長命種である為の処世術。そういう事ですね。なんだか保守的なのかリベラルなのか訳が分かりません。ただ彼女は私だけがいいと嬉しい事を言ってくれます。まあ私はその限りではありませんがね……。

とまあそんなこんなでイルフィ先生に習いましたよ。え？魔法ですよ魔法。展開早いですか？仕方ありませんね。私達の日常は、基本的には畑いじりしかしませんから。だから割愛しますよ。

□■□■□■□■□■□■□

～side　イルフィ～

久しぶりの登場ね。べ…別に出たかった訳じゃ無いんだからね！ザキがどうしてもって言うから、仕方なくよ。ちょっとザキ！　後ろでツンデレ乙とか煩い！私はクーデレよ、クーデレ！コホン……見なかった事にしてちょうだい。殺すわよ？

あのね？勘違いしたらいけないのは、魔法に属性だの長ったらしいスペルとか、
そんなメンドクサイことは無いのよ。

要は自分が起したい現象に必要な数の精霊を、ちゃんと集めら

れたら良いって訳。後は具体的に「こうしたい」って言うイメージを精霊達に伝えられたら、後は勝手にやってくれるわ。それを分かり易くした言霊はあるけどね？

どうかしら？簡単でしょでしょ？

私が出来るのは結界を張る、火を起こす、風をふかせる、体を治癒するかな？まぁ例えば火を起こす場合の精霊数を増やせば、当然火力は上がるわ。

後は精霊に球状で飛んでとか、焼き払えとか、指向性を与えたりとか……

つまり最低限の事象を基本にして言霊で指示し、後は応用を効かせた言霊を考えたらオリジナリティがある魔法が完成って訳ね。ただ、精霊に干渉する段階で精神的に疲れるのよ。だから連発は厳しいわ？後はそうね、顔を変えたりとか持続するタイプのは、一定時間が経過すると帰っちゃうのよ精霊が。飽きっぽいのかしらね？

ザキの場合は呼ばなくてもその土地の精霊が勝手に集まって来てるから、使役の手段さえ判れば多分、ザキの存在そのものが力というか、気分次第で国一つ焼き尽くせると思うわ。だって精霊に干渉する際の精神的な疲れが無いもの。呼ぶ必要が無いのだから。

なんていうか、ムカつき？一応私はお姫様として恥ずかしくないように……って言うレベルまで、爺のスパルタというか、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩされ続け、必死に努力したのよ？

なのに何なのザキって……やってらんないわ。才能とかのレベル越えてるってば。言わば彼自身が精霊の棲家と言えば分かりやすい

かしら？そういえばザキってば気付いてるのかしら？エルフが長命なのって、精霊の加護があるからなのよ。……ザキって死なないんじゃないかしら。加護なんて規模じゃないしね？ふふっ、ならザキといっぱい一緒に居れるし嬉しいわ？

はぁ…説明終わり！

今夜も搾り取ってるからね。覚悟なさい！ふふふふふふ……いや、いつもコテンパンにされてるんだけどね……。

～side　out～

□■□■□■□■□■□■□

……なんか寒気がしますね？またよからぬ事を考えてませんか？イルフィ。

そんなこんなで取り敢えず座学は終わりました。なので後は実際に精霊とコミュニケーションし、実践あるのみ、と言う訳ですね。

イルフィが言うには森のなかに座って瞑想をすると良いらしいです。そうすれば才能あれば感じられるそうです。そして私は加護が既に強いので、問題なく干渉できるとのお墨付きを頂きました。

私はカーサンの木にもたれかかり目を閉じます。

静か…ですね。

日本にいたら、この静寂は感じられないでしょうね。思わず色々な事を考えてしまいます。多忙だった毎日。目的もなく、ただ生きるために生きていた私の人生。本当は建築家としてデザインを売る仕事をしたかったのですが、私程度の甲斐性では無理でした。そんな事をつらつらと考えていましたら、何やら身体に循環しているような違和感をかんじました。ただ嫌な感じはしませんね。これが精霊…ですかね？…Ｚｚｚ

……

……

…くいっくいっ

ん？どうやら寝てしまったようですね……。

……くいっくいっ

なんですか？

何やら体のあちこちが引っ張られる気配がしますね？

目をこらして見てみたら、目の前にワラワラと半透明のブライス人形のような精霊がいました。可愛らしい女の子に見えますが、大きさは5？程しかありませんね。彼女達は口々に何かを言ってますが、私にはキュイキュイとしか聞こえません。何と言ってるのでしょうか？ただ悪意は感じられません。ただ私に興味があると言う感じでしょう。

その中の割りと大きなやつに私は手を伸ばしました。

それは一瞬、笑ったような表情をしました。そして次の瞬間、精霊達が一気に私の体に吸い込まれていきました。と言うより、嬉々として飛び込んだが正しいですね。

すると、体が軽くなるといいますか、力が漲る感じが凄いするんです。素晴らしい高揚感を伴って。

イルフィは精霊を感じたらイメージしながら言霊を唱えろと言ってました。言霊と言っても単純で、【起したい現象＋求める威力＋細かい条件】と言う組み合わせを唱えます。

具体的には「我は求む、大いなる火を。我を阻む敵を包み、焼き尽くせよ」と言う感じです。これはイルフィが考えた言葉なので、アレンジは自由にだそうです。要は頭の中のイメージと結び付けば良いわけですね。

私はとりあえず指先にライターくらいの火をイメージしてみました。

「精霊さん達、私は火種が欲しいのです。さあ出しなさい」

ぽっ……

普通に出ましたね…なんか感動もありません。まあその後色々試してみました。火、風、雷、結界は出来きますね。治癒も出来きますし、さらに肉体強化も出来るようです。私にこれ以上強化しても仕方なさそうですが。

足に精霊を集中させてみたら、私は風になりました。ふむ、イメージ次第でどうにでもなるようですね。

因みにちょっと調子に乗って走り回っていたら、大木にぶつかって額が割れました。ホッホッホ……。

実はそのおかげで治癒魔法が使えるのがわかったのですけどね！とりあえず、一通りできたので満足としましょう。これで近いうちに旅に出れる訳ですから。

むぅ

出発までに出来るだけイルフィと交尾しましょう♪

こうみえて実は寂しがりや何です。言い触らしたら殺しますよ？ホッホッホ……。

冒険からの～んッ？

……山崎ですよ。いります？このくだり。まあいいでしょう。ホッホッホ…今回からは、魔法使い山崎！いえ、華麗なる魔法使い山崎です。私の戦闘力がとうとう53ま…スパーン！！…痛いです。イルフィにハリセンで殴られました……

では気を取り直し…私は魔法とやらを習得しました。ですので塩を求めて旅に出る事にしました。まあ計画してた事ですからね。

ですが旅に出ると言う事は、裏を返せばこの世界の文化や人に私が触れなければならないという事なのです。本当に面倒ですね。何か厄介事の香りがぷんぷんしますよ。あ、またもやフラグですね。まあいまさらでしょう。

という事でこの世界の常識というものを少し、イルフィに習いました。すいませんね？説明ばかりで。これも様式美です。諦めて下さいね。

まず今いる大陸は「東の大陸」といいます。はい、分かりますよ、言いたい事は。ですがね？この世界の言語での表記では、イースティアうんたらかんたらとか言う、ちゃんとした読み方あるんですよ？

ですが…ホラ？

私はあくまで精霊魔法で会話や理解してる訳ですから、当然の如く日本語で会話してるように感じるわけです。一応文字は覚えましたよ。当然じゃないですか。ホッホッホ……。

で、この大陸を領地としている国が、「グランビア王国」というそうです。

王国ってことは王様いるんでしょうね。む…王冠かぶってヒゲ生やしてたりするんですかね？あらら、とても見たいかもしれないですね。白いタイツとか履いてたら、指差して笑ってやります。

話を続けます。中にはいくつかの街や村があちこちあって、人間以外の種族の自治区もあります。その為何ヶ所か関所があると言う事です。

それが面倒なもので、一番近い街で冒険者ギルドに登録する事になります。

つまり冒険者になればＩＤが手に入り、ある程度自由に旅が出来るのです。凶悪なモンスターを駆除する冒険者は優遇されるみたいですね。まあ国としては軍を派兵するより安価ですから当然と言えば当然ですね。まあ、いまはこんな所でいいでしょう。

□■□■□■□■□■□■□

爽やかな秋晴れの空で、少し肌寒いのが心地いいです。そろそろベッドから出ましょうかね。出ましょう…出ましょ……イルフィさん？寂しいからとかいって、寝ないでヤリまくってたんですから、そろそろ離して……あ、咥え…いやっ……らめぇ～～～～！！

二時間後

なんだか疲労感漂う私です……やっと解放されました。気を取り直し旅に出ます。

まぁ、ぶっちゃけてしまえば転位魔法使えばすぐ戻れますから、実際は寂しいとか無いのですよ。あれから私は色々魔法を研究しましたよ。それで分かったのは、私の加護は肉体能力以上に人外でした。まあそういう事ですね。

さて取り敢えず一番近くの街を目指す事にしましょうかね。じゃイルフィ、行ってきますね。なんだか艶々してるのが少々ムカつきますね。可愛いから許しますがね。惚れた弱みですかね？

□■□■□■□■□■□■□

現在私は「商業都市　ザイオン」に向かってる訳ですが、方向とか合ってますよね？え、知るかって……そりゃそうですね。ホッホッホ……。

まぁイルフィ曰く「あっち」を目指しているんですね。多分２０？はきたでしょうか？少し不安になっただけですよ。そもそも景色に一切の見覚えが無いのですから当然でしょう？

おや、街道がありますね？

まあ街道と言いましても粗末な未舗装の道ですね。こういうのを見れば、文化レベルのギャップを感じられますね。はあ、現代人は切ないですね。

おや？第一村人発見ですよ。声かけたらあっさり道案内してくれました。渡りに船ですね。

ホッホッホ…単純ですね？私が強盗だったらどうするんでしょうね？このお姉さんは。いや、明らかに私より年下でしょうから、お嬢さんですかね。

まあ我が愚息がピクリともしないので、見逃してやりましょうか……いえ、すこし初めてのおつかいではしゃいでしまいました。お恥ずかしい。

実際はおとなしく着いていってますよ。しかし景色変に代わり映えがしなくつまらないですね。

がさがさ！！

「ヒャッハー！ここは通さねえぜ！　金目のもんおいてきな！」

出ましたよ見たままそのまま紛れもない山賊ですよ。それでいてザコ臭がする山賊が三人現れました。

ちなみにヒャッハー言ってた方はモヒカンでした。これも様式美です。諦めて下さいね？

お嬢さんは「きゃーー」なんて言ってますが、まぁ戦闘描写も勿体ない雑魚なんで、こっそり頭に発火させたら逃げていきました。やはり汚物は消毒するに限りますね。そう思いませんか？お嬢さんは目を白黒させてました。私も「わぁ、燃えてる。なにそれ怖い」と言う怯えた演技してやりました。ホッホッホ……

魔法使えるとか言わないほうがいいよってイルフィに言われましたからね。まあ当然ですね。魔法を使いたいが為にエルフが狩られる世の中なのですから。わざわざ面倒の種をまく必要はありません。

とか言っている間にザイオンの門が見えてきました。中々立派な門構えです。裏を返せばそれだけの外敵がいると言う事なのですかね？まあ私には関係ありませんが。

お嬢さんとお別れした私は、目的である冒険者ギルドを目指します。私とイルフィの明るい家族計画の第一歩ですね。

ではこの辺で失礼しますね？ホッホッホ……。

登録からの～あれッ？（前書き）

だから下品ですいません

登録からの～あれッ？

やあ、山崎ですよ。やはり私はこの流れは必要かと思うんです。ですから敢えて言いましょう。私　は　山　崎　で　す　ッ！！はい、しつこいですね。では、始めましょうか。

私は今、商業都市ザイオンの門に、それはそれは勇ましく立っております。私の輝かしい人間界デビューですからね。そこ、引きこもりとか言わないで頂きたい。殺しますよ？

さて、私をここまで案内して頂いたお嬢さんですが、「山賊はギルドで賞金首になってるから、証拠になるものを持ってくべき！」言うのですよ。お金になりますからね。

だから私は考えた訳です。証拠と言ったって、顔くらいしか識別できのでは？と。

お嬢さんは、「はぁそうかもしれない」と言うもんですから、私も「そうですね」なんて笑顔で首を次々刎ねたわけです。ナタで。

そしたらお嬢さん、あからさまに私も気味悪そうに見るのですよ。失礼だと思いませんか？

それで門についたなら、「お疲れ様ですぅ」なんて営業用スマイルでさっさと中に入っちゃったのですよ。

そしたらすかさず門番の方が、「お前、怪しい…実は山賊なんじゃないの？」みたいな事を言うわけですよ。これには普段温厚な私

でも憤慨した訳です。

私はね？ムッとした勢いで「貴方、一度死んでみますか？」なんて黒いオーラ出した訳です。そうしたら隊長とか言う人が来た訳ですよ。

それで最初の状態で門の前に立ってると言う事です。呆れるでしょう？何やらギラギラした目で１０人くらいの門番に囲まれているのです。

隊長と言う人はどうみても若い女で、胸はとてもとても残念なんだけど、唇が厚ぼったくて、しっとりしてて……

何より鎧が「なにそれ…守る気無いですよね？露出狂なんですか？」と問い詰めたいくらいの露出でして、何でしょう？今すぐ飛び掛かって、荒々しく後ろからイタしたい衝動に駆られますね。

ふう、取り敢えず落ち着きましょう。この状態では埒があきませんから。

「さてお嬢さん、この無礼な態度に対しての謝罪はあるのでしょうか？」

ふふっ…決まりましたよ完全に……私は体をすこし斜めにし、足は肩幅に開きます。両手は開いて広げ手をくいっくいっとやりながら、顔は少し尊大な表情で言い放った訳です。格好よくないですか？私。

そしたら門番達が怒号と共に飛び掛かってきたのですよ。失礼に

も程がありますね。まあいいでしょう。死なない程度に懲らしめてやりましょうか。全くおバカさん達ですね。

だいたい、「怪しいやつめ！」「隊長に失礼だ！」「イケメンは氏ね！」「モゲロ」等と口々に叫んでいます？後半意味わからないですよ。そもそも私はイケメンではありません。ただの紳士です。

では、お仕置きの時間ですッ！！

「さあて、そこらに群がる蟲のような生物を、荒れ狂う暴風を集め、遥か彼方へとぶっ飛ばしてあげなさいッ！あくまで常識の範囲でッ！！」

あらあら、おバカさん達は「何こいつ、頭おかしいの？」みたいな目で見ていますね？ホッホッホ……

ヒュウウゥゥゥ……

「！？」

「な、なんだ！？」

さあ、来ました。精霊さん達、やっておしまいなさいッ！！

ドヒュアアアアアア！！！！！

『ワアアアア……』

いやあ、さすが竜巻。よく飛びましたね？……ああ、精霊さん達、張り切り過ぎましたか…ね？……見えなくなっちゃいました。まあ死んだらごめんなさい。でも自業自得ですからね？

あらあら、隊長さんぽかーんとして、「ふぇ？あれっ？人間なのに魔法？」とか言って固まってますね。まったくおバカさんの極みです。

ホッホッホ……

ホッホッホ……

ああ私、興奮のあまりすっかり忘れてました。イルフィにあれ程言われていたと言うのに。え？魔法は隠しなさいと言うアレですよ。ほら、人間は魔法を使えないらしいですから。

いやあ、どうしましょうか？困りましたね。あ、でも隊長さん固まってますから今のうちに……。

「あのう、どこ行くんですか～？」

いえね？ちょっとそこまで用事がありましてね？

「それが通用すると思いますか～？」

まあ、無理でしょうね？いっそ見なかった事になんて如何ですか？

「ごめんなさい～それは無理ですぅ～」

あらあら、困りましたねぇ。

「あのう？　お兄さんは悪い人ではないです…よね？」

「はい、私は悪い人ではないですよ。むしろ、悪い山賊を退治した良い人ですね？見ますか？首」

私は山賊達の首をぶらぶらと隊長さんに披露しました。

「ふむー。なら入っちゃっていいですよ！お兄さんは山賊を倒したようですし。」

私は「ありがとうお嬢さん」と、彼女の頭を撫で撫でしたら喜んでました。身長が小さいので、丁度いい高さに頭があったのでつい撫でてしまいました。いやあ、頭が弱い子でセーフでしたね。

さあこれで問題解決ですね！では張り切って参りましょうか。いざ、冒険者ギルドへ出発です！

と、歩みを進めた私の襟首が掴まれました。

「あ、そうそう、魔法のことをＯＨＡＮＡＳＨＩしましょ～？」と、隊長さんは笑顔で言いました。目笑ってないですよ……。

はあ困りましたね。どうやらやり過ごす事は無理みたいですね。ならば……。

「別に話してもいいですけど、今夜私の泊まる部屋でなら話しますよ。誰にでも話せる内容ではありませんからね。それが無理ならば、私は全力を持って抵抗して逃げますよ？」

さあ隊長さんはどう答えますかね？普通なら私はここで拘束されるでしょうがね。まあ最悪は隊長さんもろとも押し通るだけですがね。

「わかりましたぁ。ないしょ話ですね。　勤務が終わったら伺いますぅ」

彼女はボブヘアーをぴよぴよ揺らして手を振ってくれました。あらあら……なんて言いますかとても可愛らしいですし、厚ぼったい唇がとてもいやらしいですね。

私、今夜この娘頂くことにしました。無防備な隊長さんがいけないのですよ？ホッホッホ……。

そんなこんなで色々ありましたが、私は冒険者ギルドに来ることが出来ました。余計な手間でしたがね。まあいいでしょう。

さて、冒険者ギルドですが、まさにギルド！と言いますか、中に入ったら西部劇に出てくるパブみたいな内装で、カウンターには胸にメロンを2つぶら下げたような、凶悪過ぎる乳の素朴な田舎娘が座ってました。

取り敢えず、是非挟ませて欲しいものですね。何を？欲望と言う男の浪漫に決まっています。

「いらっしゃいませ。冒険者のかたですか？」

うん、舌たらずで可愛い声です。その唇で私の猛るマイサンを是非咥えてもらいたい。え？だから…いえ、止めましょう。

「あのー？……」

「ああ、申し訳ありません。私はまだ冒険者じゃなくてですね、登録をしたいのです。ついでに道中出くわした山賊を退治したものですからその確認もですね？」

「あ、はい了解しました。じゃあ軽く説明しますね」と、メロン娘は説明を始めました。

ギルド登録した冒険者は、他の大陸のギルドでも依頼を受けられる事。

冒険者はランク分けされており、下からE・D・C・B・A・S・SSと、なっているようです。

初期ランクは登録時に力を計測して決まるようです。計測機はエルフ謹製の魔道具だそうです。エルフを迫害している実態をしっていては少し複雑ですがね。まあ今は仕方ないでしょう。

Aランクまでは依頼を達成してポイントを貯めるか、またはギルドからの依頼の中でランク認定依頼を達成すればあがるようです。

ランク認定依頼とは、例えば長期に渡って討伐されない魔獣と言われる化け物モンスターが出現した際に、活躍してる冒険者にはギルドから直接依頼が入るのです。

まぁそういう危険な依頼を達成したら、その危険さに応じてランクアップするのです。

因みにAランク以上は、災害指定魔獣と言う凶悪な、つまりはその名前が示すように、災害じみた被害をもたらす非常に危険なモンスターを討伐したら昇格できるようです。一種の名誉職に近いようです。まあ私には関係ありませんね？ＩＤが欲しいだけですから。

報酬は依頼料の１割がギルドの取り分という事で、掲示板などに張り出される金額は既に差し引かれた金額と言う事です。

キャンセルと断念した場合はペナルティとして、依頼料の３割の罰金を払わなければならない様です。まあ当然でしょうね。

因みに依頼は一度に一個しか受けられず、自分のランク＋１ランクまでしか受けられません。身の丈にあった事をしなさい。無理はいけませんよ？と言う事でしょうね。

そんな説明を受けた私は登録の意志をつげ、ランク計測をしてもらう事にしました。

計測は変な箱を持たされ、スイッチを押されます。すると幽かな振動と共に、羊皮紙に勝手にペンが動き始め、今まで倒した魔獣の内訳が書かれました。さすが魔道具、摩訶不思議ですね？

結果はＡランクでした。

ほら、私はこちらにやってきて、でかい熊や山の獣を狩っていましたから。まあ食べるための狩りを毎日していましたしね？そしてどうやら私達が住んでいる森は、危なくて誰も近寄らないらしいですよ？私はそんな場所に放り出されたのですか……。

まあいいでしょう。今生きているのですから。

メロン娘は驚愕してますが、そんなの私には関係ありません。

詳しく聞きたがっていましたが、私が笑いながら「ベッドの中なら話してもいい」と言いましたら、頬を染めて「考えてみます…」とのことです。真に受けられても困りますよ？

まあ期待に胸と股関を膨らませましょうか。すいませんね？下品で。まあいまさらでしょう。気にしないでください。

そうして私は、晴れて冒険者の仲間入りと言う訳です。え？隊長さん？あなた、寸どめと言う言葉を知っていますか？では次回に会いましょう。ホッホッホ……

あ、そうそう。山賊三人の報酬ですが、サラリーマンの一ヶ月の給料程度でした。生命の値段にしては安いですね。私には関係ありませんがね？

黒光りからの～桃色ッ（前書き）

下品でしゅ

黒光りからの～桃色ッ

こんにちは、山崎です。いや、今は冒険者山崎ですね？ホッホッホ…ちょっと得意気になってみましたよ。

そういえば私、前回はさらりと流していましたが、私、人を殺しました。いくらやむを得なかったとは言え、一度に三人もの生命を……。

考えてみればいくら悪党とは言え、ひょっとしたら彼らは家族の為に生命を張った結果が山賊だったのかもしれません。

この世界は確かに生命が軽いです。ですが何も殺さなくても良かったかもしれません。

私は……

私は……どうしたらいいのでしょう。

私は簡単に他者の尊厳と生命を刈り取り、大した罪悪感もなく居たわけです。

あの時の光景がフラッシュバックします。

彼らは私に括り殺される瞬間、濁りきった目で私を見ていました。

私は……

わああッッッ！！

私にはそういう欝展開はありません。あれ？罪悪感なんかあるわけ無いじゃないですか？なんで全く愛着もない世界の人間を気にしなければならないのですか？

私は私の邪魔をするものは叩きつぶします。家の中に黒光りする例の虫がいたら貴方、どうします？

躊躇などせずに排除しますよね？私にとってこの世界はその程度の物です。

イルフィなど身近な人以外はどうでもいいのです。まあそういう事です。そもそもこんな異世界ですか？こんな状況に私1人で放り出されて、何故優しくなどなれますか？知りませんよ。

だいたいですね？地球みたいに人間以外は動物ですみたいな二択では無いじゃないですか？この世界。

獣はいますが、獣と人の中間みたいなのもいますし、人型ですってだけでいちいち罪悪感感じてたら生きていけないですよ。むしろ腹の中真っ黒な人間よりは、フカフカの獣人の方が価値がある。そうは思いませんか？

多分ですが、種族や見た目云々で線引きは出来ないのです。要は相手の行動で善悪を判断して、自分で決めるしかないのでしょう。その結果は当然、自分で背負うしかない訳ですし。なら私は好きにやらせてもらいます。そういう事ですよ。

少しだけ昔話をしてもよろしくですか？まあ嫌だと言っても話しますがね？

私はかつて、スペインの建築家、アントニオ・ガウディに憧れてました。きっかけは憶えていません。ただ小学生時代に強烈な憧れを憶えました。

それ以降、私は将来の夢として建築家と言う目標を持ったわけです。私は絶対に自分の頭の中にある物をを自分で建てたいと、寝る間を惜しんで勉強しましたよ。無茶をして偏差値の高い工学系の大学にも行きました。

実際に一級建築士の資格をとるのは大変なんですよ。実務経験が資格取得の試験資格にもなっていますからね。

ですが、実際はどうでしょう。大学のＯＢのコネクションで就職

した大手ゼネコン。私は日々パズルのような建物を作る――と言うより、大学出の私が現場を任されて偉そうにしている毎日です。知っていますか？日本の一流企業は、学閥が物を言うのです。くだらないでしょう？

そして気が付いたら、私は毎日毎日ビルばっかり作ってました。苦労して建てても、時間が経てばただのビルです。ただ人が通り過ぎていき、誰も気には留めません。

あの憧れていたバルセロナの青い空に突き刺さる、サグラダファミリア。あれをガウディは楽器だと言いました。吹き抜ける風が、音を奏でる巨大な管楽器です。

結局、私は一度も目の前に立つこともなく、ここに来てしまった。資格は取れましたが、私が為した事は企業のいち歯車だったと言う結果のみです。

ですから私は、この世界で、私のサグラダファミリアを建てましょう。それがどんな形かはまだ分かりません。ですが何か私がこの世界に来た意味は残したい。そう思います。

私は勇者なんて柄ではありませんし、他人が喜ぶ為に我が身を捧げる気は一切ありません。むしろ私の目的の為に蹂躙しますよ。その第一歩として商売は成功させます。現代人を舐めない方がよろしいですよ？原始人の方々？ホッホッホ……

さて、山賊等はどうでもいいでしょう。ひとまず宿屋を探さなければなりませんね。大通りの小綺麗な宿屋にしましょう。ベッドがフカフカなのは重要ですからね？え？意味はわかるでしょう？ホッホッホ……

さて、特にいまは何もする用事はありません。え？街をぶらついたり武器屋を見たりしないのか？あなた、私が武器が必要だと思いますか？殴るか精霊さん達に頼めば済む話でしょう？まあそういう事です。

そうして私は通りで一番良さそうな宿に決めました。お金に余裕はありますからね。ほら、先ほど臨時収入が入りましたから。

私は部屋に入り、造りの良いキングサイズのベッドに仰向けになりました。吸い込まれるような心地がします。

この世界に来て初めて他人に触れ合った事で、少々気疲れしたようです。申し訳ありませんが、少し眠らせて戴きますね……あふっ……。

私、昔からこのじわーっと身体中の疲れを感じる寝入りばなが好きなんですよね。ああ、私は今日も頑張りましたと実感できる瞬間なんです。

そうして小一時間も眠った頃でしょうか？誰かが部屋の扉をノックしたようです。

「こんばんわぁ～　探しましたよ～」

隊長さんでした。中に招き入れた彼女を見て、しばらく停止してしまいました。あまりに昼間の印象とは違いましたからね。ええ、とても美味しそうです。

彼女はレモンイエローのワンピースに身を包み、昼間はパサパサだった赤毛のボブヘアーをきちんと梳かしてありました。彼女は前髪が眉毛の上で真っ直ぐにカットされており、それが彼女の快活な印象をさらに良く見せています。

身長は１５０?程度しかありません。こうやって私服を見れば、ただの女の子みたいですね?隊長さん。大きな瞳とアヒル口、うん、とても可愛らしいですよ?隊長さん。

「あ～う～照れますぅ～」

あれ?私、もしかして声出てました?

「は、はいです」

あらあら、これは失敬しましたね?いやあお恥ずかしい。ホッホッホ……まあ、気にしない気にしない。一休み一休み……あふっ……ＺＺＺ…

「ね、寝ちゃダメですぅ～～！」

おやおや、短いオテテをばたばたさせて慌てていますね。これは

可愛らしい。さて、からかうのは止しますか。

そもそもこんな女性と言うよりは少女と言える隊長さんですが、よく隊長にまでなれましたね。何か特殊な力でもあるのでしょうか？まあこれも異世界だから…なのでしょうね。

「では自己紹介でもいたしましょうか。私はヤマザキと申します。歳はヒ・ミ・ツです。座右の銘は、喰う　寝る　遊ぶ　です。　よろしくお願いします」私はキリリとクールに自己紹介致しました。

「えっと、わたしはアキ・ウイユヴェールですぅ。この街の警備隊長をしてます。２０歳ですぅ　よろしくお願いします、ヤマザキさん」

ホッホッホ……

「な、何ですかぁ？」

ホッホッホ……

「ななな何ですぅ？」

「嘘はいけません嘘は。あなた、どうみても１５歳にしか見えません。さあ、全部吐いて楽におなりなさい！」

「わ、わたしは嘘は言ってませんよぅ！幼い見た目は気にしてるんですから言わないでくださいですぅ」

「……はい」

「あ～う～まったく信じていない目ですぅ～」

まあ、いいでしょう。では根掘り葉掘り聞かれる前に、魔法の事を話して聞かせましょう。９０％の嘘と１０％の真実で。誰が馬鹿正直に話しますか。私になんの得にもならないですからね？

さあ行きますよ！実は私は子供の頃に親に山に捨てられました。お腹を空かせ泣いてた私はエルフに拾われました。そのエルフは人間とエルフの寿命は違うから、いずれお前とは別れなきゃいけないと言いました。

だからいつ別れてもいいように生きる術をお前に教えると言いました。そして俺は魔法を教わったと言う訳です。ですがそれは辛い修行で、私は何度も死ぬ思いをしました。

で、今は一人前になったとお墨付きを貰った。　そして今、見物を広めるために旅をしてるんだ。

と、半分自分に酔いながら辛い身の上話（嘘）を話してたら、アキは何を勘違いしたのか泣きながら、「可哀想ですぅ…よしよし」と、ベッドに座る私の頭を抱えながら、頭を撫でてきました。

ええ、胸が顔にあたりますね。あれです、この世界にまだブラジャーとかないのですね。ん？　布地越しにコリコリした何かがありますね？

Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？

Ｙａ．　Ｉ'ｍ　ｒｅａｄｙ．

「ふぇ？　」

ゴー！ゴゴー！！

「はわわわわっ！」

私はそのまま彼女をベッドに押し倒しました。あわあわしてるアキの唇を俺の唇でふさぎ、可愛い舌と、蠱惑的な下唇を貪った。

「申し訳ありません、いきなり。ですが、今まで淋しかったんです……。　優しくしてくれてありがとうございますアキ？」

私は”何かを訴える子犬のような瞳”と言う魔眼を解放しました。

うるうる。

「はわわ…あう…はいですぅ……」くてん

勝利です。完膚無き私の完全勝利です。では遠慮はいりませんね？

私はアキのワンピースを上に押し上げ、控え目な胸を露出させます。その膨らみは、丘というくらいですが、その頂きには桜が咲いていました。

その桜を優しく咥え、軽く吸いながら、口の中で舌で転がします。瞬間、アキは電気が走ったように仰け反り、身をよじります。

囁くように、羞恥を纏わせ漏れる喘ぎに、もっと苛めてやりたくなります。

私は体を上にずらし、アキに再度口付け、今度はさっきより荒く、口腔内を犯します。

舌を、歯茎を、上顎を

唾液が混ざる音と、切なげなアキの喘ぎだけが部屋に響きます。

私は彼女のショーツを暴き、中へ――――

【自主規制が発動しました】

私の背後で衣擦れの音が聞こえます。相変わらずあわあわ言ってますね？ああ、どうなったかですか？

「アキさん、ご感想は如何でした？」

「あ、えっと、はふぅ……まだ何か挟まっている気がしますぅ」

「なるほどなるほど、どうやら初めてだったようですが、気持ち良かったですか？」

「あのっそのう…はいっ…」

だそうですよ？私も具合が良かったと言っておきましょう。ベッドでは彼女も子供ではいられなかった。そういう事です。

私達ははそのまま眠ってしまったようで、朝の鳥の声で目覚めました。

横で眠るアキの寝顔に優しくキスをして。私は黙って眺めていると、やがてアキの目蓋がピクピク震え、目があきました。

彼女はまだ覚醒してないのか、ぼーっとこちらを見ていますが、

やがて目を見開き、顔から音がするほど一瞬で真っ赤になりました。

そして慌ててシーツで目の下あたりまで隠しました。

「……あんまり見ちゃダメですぅ…」

私は野獣になりました。

ホッホッホ……

イルフィの憂鬱（前書き）

イルフィさんのおはなし

イルフィの憂鬱

◇カーサンが見守る小さな集落◇

主がいない母屋は明るい日差しが入るも静寂が包む。母屋の横には鳥や山羊が草をはみ、変わらぬ日常がそこにあった。

そこから少し奥に目をやれば、黄金色に実る麦畑がみえる。その真ん中に彼女は一人、佇んでいた。

「あーあ。行っちゃったな」

2人しかいないこの集落のもう1人の住人、イルフィは呟いた。

彼女のその完成された芸術のような美しい顔は、どことなく暗い。だとて彼女の美しさを損なう理由にはならないが。

彼女の溜息の理由は、先ほど旅立っていった愛すべきパートナーのせいだ。

イルフィは彼に出会い、そして変わった。価値観そのものが根底から覆された。いや、無理やり引っ繰り返されたが正しいのかもしれない。

それまでイルフィは、ここから遠く離れた場所にあるエルフの集落で、王の娘としてその責任を果たしていた。

好きで王の娘に生まれた訳ではないが、それでもそれが当たり前だと信じていた。だが彼女は外に違った世界があるのを何かの拍子に知ったのだ。それはある種の麻薬に近い効果をイルフィにもたらした。

エルフとしての生き方とは、種族を後世に継続していく義務が中心である。個人の考えや、思惑、それよりもエルフ全体の存続が大事にされるのだ。固体数が少なく、繁殖力もそれほど高くはないからこそ、それは当然とも言える。

イルフィはそれはきっと大事な事であるとは判っている。だが彼女はその役目は自分じゃなくてもいいのでは無いか？と、常々感じていたのだ。外の世界には違った文化があると言う麻薬を知ったから、尚更に。

そしてある日、人間達が集落を襲ってきた。エルフの英知を独占せんと。精霊に干渉出来ない人間による、エルフ狩りだ。人間達はエルフを捕らえ、魔導具を作らせ、女は慰み者にする。能力が低いエルフは奴隷として売られる。人間の美的感覚から見れば、エルフは全て美男美女である。だからいくらでも需要はあるのだ。

イルフィは思った。人間とはなんと欲深いのだろうかと。エルフの英知を手に入れた所で状況は何も変わらないと言うのに。

生活や技術が向上して一時の権勢を誇った所で、また違う誰かがそれを奪うだけだ。人間は昔からそうして戦争を繰り返していたじゃないか、と。

その虚しい欲の為に、なぜ同胞が死ななきゃいけないのか？死にたければ勝手に自分達で殺しあえば良いだけの話ではないかと。

イルフィはくだらないと吐き捨てた。だが彼女はそれと同時にこれはチャンスなんだと思った。この血にまみれた事件は、自分を運命という鎖から解き放つチャンスだと。

だから逃げた。

母が身内が呼ぶ逆方向に走ったのだ。

罪悪感は無い。ただ、解き放たれたかっただけだ。

立ちふさがる人間を切り裂き、突き刺し、射ぬいて、殺した。イルフィの周りには血の雨が降り、彼女を紅く染めた。それでも彼女は止まらない。躊躇しない。

何故ならば、その躊躇こそが鎖そのものであるからだ。なんの躊躇か？一族の責任から逃げる事の罪悪感だ。或いは情と言い換えても間違いないだろう。

だかイルフィは躊躇を引き裂き、そして走り続けた。その先にあるものは希望と信じていたからだ。

だから走った。幾日も奔り続けた。彼女が目指したのは未開の森だ。そこならエルフも居ないだろうから。

だが彼女は今、力尽きようとしていた。皮肉にもエルフが森で共存していた獣の手で。

その大型の熊が彼女の生命の灯火を消さんとしたその時、一陣の風が吹いた。

或いは暴風と言えるかもしれない。そしてその風は彼女の脅威を殲滅した。ただの一瞬で。

その暴風は人間だった。

彼は彼女の前に立ちふさがる脅威ではなく、救世主（メシア）となった。

彼は彼女が怯えて噛み付いても、傍若無人にそれをふみにじり、自分の常識では及ばない行動で応える。

まさに衝撃だった。最初は人間だと思ったが、人間がこんなに精霊に愛されている訳が無いのだ。人間に似た、何か強大な存在としか言えない何かだった。

彼女は無我夢中で彼にすがりつき、そして契った。

彼は新しい世界の扉であり、希望であると彼女は思ったのだ。

だから彼に縛られたくなった。そして彼を縛りたくなった。解放と言う名の鎖、がんじがらめになってしまいたかった。

彼に抱かれた彼女の中に生まれたのは、歓喜。

そう、彼女は知ったのだ。魂が溶け合う感覚を。

世界はそれを愛と呼ぶ。

□■□■□■□■□■□■□

私は幸せだ。

一族から離れ、はぐれたエルフなのにだ。

どうやら私はエルフから、ただの女になったようだ。

あの日彼が私の身体を貫いた時、激痛のなか見上げた彼の目は、ただ私だけを見ていた。

あの男にとって私とは、エルフの王女でもなんでもなく、ただの可愛い女でしか無いと言う。

可愛い女……

ただその一言で、私が今まで築いてきた尊厳、プライドを壊してしまった。

私は幸せだ。そこに理屈はいらなかったのだ。

一緒に集落を築きながら、彼は言った。

「そのうち二人で世界でも見てまわりましょうか？きっと素晴らしいですよ？ホッホッホ……」

彼はきっと気紛れに言っただけだろう。無論、嘘ではないと思うが。

だって彼は女好きだから、きっとあちこちで女を作るだろう。

だからきっと、二人では無いかもしれない。

でも彼は必ず世界を見せてくれるだろう。彼は私に嘘は言わないからだ。

だから、嬉しいのだ。

国があって国境があり、あちこち争いもあり、そんな世界を見歩くなんて普通は無理だ。

けど、私にはわかる。

彼はやると言ったらやるのだ。そこに困難や敵がいたら、高笑いしながら叩きつぶすだろう。

だから私は信じるだけでいいのだ。

うん、私にもいまやっと理解した。

私はただの女だ

だからダーリン？

早く帰って来てよね♪

準備からの～出発ッ

山崎ことヤマザキです。本日は素晴らしく気分がいい。何故ならアキが…ホッホッホ……。

さてアキを美味しく頂いた明くる日、私は宿屋を引き払い、アキを伴って武具店に来ました。昨日必要ありませんとか言ってましたが、少し考え直しました。

ほら、私は新天地を探しにいくのが目的なんですよ？ですから武器はいると思い直しだ訳です。

いえね？無くてもいいのですが、持っていたら冒険者っぽく見えるでしょう？ならば昨日の警備隊相手みたく、迂闊に魔法を放つ事もしなくて済みますからね？無用なトラブルは面倒ですからねえ。

と言う事で私は今、ザイオンのメインストリートをアキに連れられ歩いています。

「わたしの行き付けの武器屋さんにご案内ですぅ～」と言うアキに手を引かれていますが、私の身長にオチビさんのアキ。どうも私達は親子にしか見えませんね？まあ、爛れた親子ですがね。ホッホッホ……。

『超武器屋ザイオン本店』

あらあら、何というネーミングセンス。流石の私も驚きましたよ。

まぁ、気にしたら負けですねぇ。異世界クオリティと無理やり納得しますかね。さすがファンタジー世界って事でしょうか。

場所は分かりましたので、アキを警備隊詰所まで送って行きました。やはりデキル男はアフターケアまでしっかりとしなければなりません。

で、つきました。

隊員達が口々に「隊長、おはようっす」とか、うーん愛されてますねぇ。

「ザキさん」

「はい～？」

チュッ♪

ｏｈ…ポカホンタス……

ざわ……ざわ……

あら…凄まじい殺気が私を襲います。

何してくれるのですか？アキ……

ざわわ……ざわわ……

それはさとうきび畑です。私はとりあえず逃げました。君子危うきに近寄らずですよ？しかし、詰所にいた人達は、みな昨日の隊員でした。全員がピンピンしてましたよ。どういう身体しているのでしょう？ま、死んでないからホッとしましたけどね。

キスしてきたアキの口が笑っていたのは気のせいですよね？

「にゃはは…外堀から埋めるのですぅ」とか心の声がダダ漏れですが、それは気のせいですよね？ホッホッホ……

女の子の裏の顔は怖いですねえ等と思いながら、私はそそくさと武器屋に戻りました。

中に入りますと、超と言うだけあって流石に品揃えは素晴らしいですね。武器から防具まで様々な種類が揃っています。

まあ私は既に買うものを決めてありますから、迷うつもりもありません。

「店主、金属で出来た棍棒なんてございますか？」

「金属の棍棒ですか…それはそれはお目が高い。では、少々お待ちを……」

あるん…ですね？少し驚きました。店主はニヤリと笑うと、バックヤードに消えていきました。

何ですかこれ。怪しいＤＶＤ屋で「無修正……ある？」「……ちょっと待ってな」みたいなやり取りのようで、妖しいスメルがしますね。

何やらズキューンと来ちゃいますね。

とか悶えてましたら、店主が戻ってきました。

「お待たせしました。こちらはユグドランの棍棒です。これは世界樹と言う神聖な木から削り出された逸品です。実はある有名な職人の一点物でして、少々値が張りますが、攻撃力はそこらの剣よりありますよ。世界樹は金属より密度が濃いですから」

店主はマニアが持つ妖しいオーラで私に説明します。そして渡された棍棒は、チートな私が持っても、ズッシリとした重量感ですね。３０？はあるそうですよ。だから誰も持てずに売れなかったんじゃないでしょうかね？一体その職人とやらは何を考えていたのでしょうか？

棍棒の長さは１５０？くらいで、フォルムはマッチ棒みたいです。太くて長いですがね？

太くなってる側の先は、もう鈍器です。圧倒的なまでの鈍器です。おバカさん達の頭をぶっ飛ばすにはピッタリですね。

細いほうの先は鋭利な鋼が仕込んであり、突き刺す気まんまんです。鈍器であり暗器です。その職人はきっとまともな人間では無いでしょうね……。

取り敢えず使い勝手を確認と思い、片手でブンブン振り回していましたら、オヤジが目を白黒させていました。

「お客様…その杖は、決して片手で振り回すものではないのですが…驚きました。実はその杖は、重すぎて、今まで売れなかったのです。どうでしょう？お安くしますので、お買い上げ戴けませんか？」

やはりそうでしたか……。おかげで私が買える訳ですから構いませんがね。

「さて、いくらでしょう？」

「金貨三枚ですが…」

「安いじゃないですか？よろしい、買いましょう。大変気に入りましたよ」

私はそう言い、代金を支払いました。これからたくさん血に染めてあげますからね？ホッホッホ……。

それから私は編み上げの皮のブーツと、全身を隠せる、黒色のローブも買いました。冒険者はローブは正装とも言えるアイテムだそ

うです。返り血とかも防げますし、あまり目立ちたくない私には嬉しい限りですね。ブーツはその、私は今まで自作のワラジでしたからね。少し奮発しましたよ。

後は雑貨屋に向かい、細々とした食料や酒を買い、サービスで貰った頭陀袋につめました。保存食は旅に必須ですからね。さあこれで準備完了です。新天地を探して出発ですよ。

そうして私は南の大門へ向かい、冒険者カードを提示し、外へでました。

……何ですか？門番達の私への殺気が尋常じゃないのですが？私、何かしましたっけ？

まあいいでしょう。触らぬ神になんとやらです。私は知らぬ顔で街道へ歩みを進めました。

しばらく私は歩きながら、この素晴らしい景色を楽しんでいましたが……

サッ！クルッ

私は振り返ります。

ガサガサ……

何かいますね？

まあいいでしょう。気にしないで歩く……と見せ掛けてサッ！クルッ！

ガサガサガサガサ…

やはり何かいますね？

歩こう～歩こう～私は元気～♪からのサッ！クルッ！！

「あっ！」

ホッホッホ……引っ掛かりましたね？私の戦闘力を舐めないで頂きたい。ではなくて、アキじゃないですか？どこかへお出かけですか？

「いえ～私もお供するのですぅ」

何ですって？貴方、お仕事があるじゃないですか？

「辞めちゃいましたのです～」

いやいやいや、ダメでしょう辞めたら。だから門番のあの殺気ですか……

「街へお帰りなさい」

「イヤですぅ！」

「帰りなさい」

「イヤですぅ！！」

「なら帰えらなくていいですよ？」

「イヤですぅ！！はっ！？」

ホッホッホ……アキ、貴方はおバカさんですねえ～では私はこの辺で失礼しますね？

アラホラサッサー

「行かせね～よ？」

口調違いますよ？と言うか肩に指食い込んでますって……私、女難の相でも出てますかねえ…

そもそもアキさん、家は？親とか反対しなかったんでしょうか？

「いえ～私は孤児なので元々いないですぅ」

そうなのですか？　ま、ついてくるのは構わないですが、私は黒いですし目的の前に立ちふさがるものは実力を持って排除すると言う傲慢な人間ですよ？

「大丈夫です。ザキさんは悪い人じゃないです」

ふむぅ、では聞きますが、師匠のエルフは女で、集落で私の帰りを待ってるんですよ？彼女と毎日亀仙人の頭が乾く暇がない程に組み手してますよ？

「でも…そんなザキさんを…好きなんですぅ…」

なっ泣くなんて卑怯ですよ？分かりました。着いてきていいから泣かないでください。

「ぐすっ…置いてっちゃヤなのです…」

わかりましたから。ほら、頭ナデコナデコしてあげますよ。

そうして結局、私は押し切られ仲間が増えました…イルフィに怒られますかね？まあいいでしょう。

そうして私たちは東を目指して出発したのです。

「でもぉ～エルフのお姉様の事を黙ってたのはいけない事ですぅ。それについてはＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしましょ？」

そして私は、彼女の指先一つでダウンしました。

ホッホッホ……

準備からの～出発ッ（後書き）

新しいメンバー追加だのん

Ｇｏ　Ｅａｓｔからの～仲間ッ（前書き）

また旅の仲間が増えました

Ｇｏ　Ｅａｓｔからの～仲間ッ

【自主規制発動中】

音声のみでお楽しみ下さい。

「あらあら、アキさん？これはどうしました？随分と水分が……」

「はわっ、これは、あんっ汚いからそんな場所はぁぁ……」

「ホッホッホ……どうやらここが弱いみたいですね？こうですか？こうですか？ここをこうですか！？」

「らめでしゅザキさんらめっらめえええっ！あひゃああ……」

「ホッホッホ……まだ終わりませんよ？さあアキさん、これを見てどう思います？」

「すごく…おおき…ひゃ！？いきなり奥までらめえええ！」

「まったくおバカさんなんですから。では大サービスで御覧にいれましょう！私の最後の姿を……真の姿をね？こうかっ？こうかっ

？こうなのかっ！？」

「らめでしゅザキさんらめなのおおっ！いやっいやっらめええええええ……」

【自主規制解除】

ふう……いきなり何かと思いました？いえね？東へ向かう道すがら、私はアキと色々話していたのです。所謂、四方山話の類から身の上話の類までと言った所です。

まあこの娘も旅の仲間となった訳ですから、ある程度の情報交換は必要でしょう？なのでだらだらと話していたのですが、彼女は私と同様に孤児だったようで、そこから生まれた彼女の夢は”孤児院”を自分で経営するだそうです。

それで彼女は私の新天地と、人間よりも固有種族に味方している話をすると、目をキラキラさせて一枚噛ませてほしいと言いました。

どうやら孤児は固有種族も多いみたいですね。そんな感じで私達は改めて意気投合したと言う訳です。ホッホッホ……

え？じゃあ冒頭の流れは何かですか？そんなものランチを食べたらむらむらしたので、デザートにアキを食べた。それだけですよ？身の上話の後に身の下話と言う訳です。ホッホッホ……。

そうそうアキさん？

「はふぅはふぅ…なんですかぁ？ザキさん」

これからは私をザキ様と呼びなさい。

「はあ、分かりましたぁ。だけどなぜ様なんですかぁ？」

私が貴方をアキさんと呼び、貴方は私をザキ様と呼ぶ。これは様式美です。いいですね？アキさん。

「分かりましたぁザキ様」

ふむ、やはりしっくり来ますね。ですが、もう一人欲しいですね。ホッホッホ……。

そんな他愛もないやり取りをしていた私達の耳に、何かの悲痛な悲鳴が聞こえてきました。

きゅいきゅいーー！！！！

アキさん

「はい、ザキ様っ！」

私達は慌てて走りだし、声がした方へと急ぎました。現場はそれ程遠くは無いようです。

暫く走ると、悲鳴が聞こえた場所には数人の人間が何かを囲んでいますね。それはまだ子供の白い竜でした。トカゲにも見えますが、背中には立派な羽が生えています。竜は怯えてガタガタと震えています。

「貴方たちはいったい何をやってるんですか？可哀想に……震えて泣いているじゃないですか？すぐ解放してあげてくれませんか？」

「離すですぅ！！すぐ竜を離すですぅ！！」

私の静かな説得に、アキさんの怒声がかぶさりました。アキさんは竜を庇うように男たちの前に立ちふさがります。

「お嬢ちゃん。こりゃあ俺達の獲物だぜ？引っ込んでな！」

「おぅおぅ、横から何してくれるんだ？殺されたいのか？」

男達は私の姿が目に入らないようで、身体の小さな娘であるアキさんを見下しているようですね。

竜を見てみると随分綺麗な鱗をしています。これはギルドの討伐依頼ではなく、密猟と言うヤツですかね？まあいいでしょう。但し、私の可愛いアキさんに傷１つでも付けたら――

「い、痛いですぅ！」

やりやがりましたね？アキさん、下がりなさい。

「で、でも～…」

下がれッ

「は、はいザキ様」

私はアキさんを下がらせ、買ったばかりのユグドランの棍棒を取出しました。もう、許しません。

「なんだぁ？正義の味方のお出ましかぁ？」

「ケガしたくなけりゃ下がってな？」

「ああ、そのお嬢さんは美味しく!?ギャアアアアアアアアア」

みなまで言わせませんよ?まったく……

「絶対許さんぞ虫ケラ共ッッッッ!!じわじわとなぶり殺しにしてくれるッッッッッッッッ」

グチャッ

メキョッ

ドチャッ

ああ、これはいけませんね。怒りにまかせて棍棒を振ったら、なぶるどころか即死じゃありませんか。この棍棒は中々の攻撃力ですね。先が返り血で真っ赤なのが頂けませんが、まあいいでしょう。ホッホッホ……。

「ザキ様……」

アキさん、私が怖いですか?でも私はこの性格も、何かを成す為

の手段は妥協をしません。帰るなら今のうちですよ？

「……ザキ様のバカァ！！！せっかくわたしがやっつけようと思ったのにぃ～～！！！」

……あらあら、それは申し訳ありませんでした。でも私が怖くないのですか？

「へっ？怖くないですよぉ～ザキ様がしなければわたしが殺ってましたから♪でも～わたしが叩かれてぇそれに怒ってくれて…嬉しかったですぅ～ザキ様？チュッ♪」

あらあら、それは安心しました。なら私は今後も自重は致しません。それよりアキさん？キスのお返しをしなければなりませんね。

「はわっ！？ザキ様ぁ」

【緊急自主規制発令】

合　　体

【自主規制解除】

ふう……今回は簡易ｖｅｒでお送りしました。そういえば忘れてました。竜さん、大丈夫でしたか？

きゅいきゅい♪

安心したのか竜は私にこすりつき、感謝を示します。あらあら、可愛らしいですね？

何やら後ろから黒いオーラを感じますが、気にしたら負けだと思うので気にはしません。

私は精霊を呼び出し、竜の傷を治癒の魔法で治します。よく見たら翼の根元がパックリと……。これは痛そうですね。

ふと見れば悪党達の亡骸はアキが木に吊しました。貴方は百舌鳥ですか？

さて竜。もう捕まってはいけませんよ？私は竜が完治したのを確認し、竜の頭を一撫ですると、私達は出発しました。

「ザキ様…竜がついてきますぅ…どうしましょう？困りましたぁ」

いえ、アキさんが言う資格は無いと思いますよ？貴方と一緒じゃないですか。

はぁ、一応気が付いてはいたんですが、敢えて言わなかったんですがねぇ…

そこの竜～おうちに帰りなさい～

きゅいきゅい！きゅい～～！

何か主張してますね？…付いてきたいのですか？

きゅいきゅい♪

竜は嬉しそうに翼をバサバサしていますね。もう面倒ですね。竜、付いてきてもいいですよ？

きゅいきゅい♪

竜は私に擦り寄り、喜びを全身で表した。なんでしょう？やはり可愛らしいですね？名前はザーボ…止しましょう。さて竜よ、行きましょうか？

きゅぃ♪

ゴオオオオオ……

黒オーラは無視しましょう……

遭遇からの～発見ッ

ヤマザキです。業務連絡ですが、今後私の名前は漢字からカタカナ表記に統一致します。理由？分かりやすいからですよ。私はそんな含みを持った行動など致しませんよ。ホッホッホ……。

では今日も張り切って参りましょう。ではまず前回までのおさらいから行きましょうかね？

ではナレーションの人よろしくお願いしますよ。

～前回までのおさらい～

人類が増えすぎた人口を宇宙に移民させるようになって既に半世紀が過ぎている。

地球の周りの人工都市は人類の第二の故郷として、人々は子を産み、育て、そして死んでいった。

宇宙世紀００７９……ストーップ！！！ストーップ！！！お待ちなさい！

何をやってるのですか？ここは異世界です。宇宙は関係ありませんからね？

本当にしっかりやって戴かないと怒られるんですよ？え？いやあ、

ＮＯＳでやれ！とか言う人が絶対いますからね？頼みますよ？

～おさらいＴＡＫＥ２～

仮面〇イダー本郷猛は改造人間である！

カット！！！

なんかもう、いきなりダメじゃないですか？ヒネりも何も無いですから…そのまんまとか使えないのですよ？

ヒネり　無いネタ　ダメ　絶対。

ナレーターの人ちゃんとしてくれないと流石の私も怒りますよ？

コクコク

ボケとか無しですよ絶対？

コクコク

空気読んで下さいよ？今読むとこですよ？大事だから二回言いましたよ？

コクコク

信じたからね？　じゃ行ってみよう！

～おさらいＴＡＫＥ３～

皆さんお待ちかね！

ついにデビルガン○ムを倒したド○ン。

ですが、怒りに燃えるマスター・ア○アは、地球と人類の未来を懸け、最大最後のガン○ムファイトを、ドモンに挑みます。

機動武闘伝Ｇガン○ム「さらば師匠！　マスター・ア○ア、暁に死す！」にレディ・ゴー！

……。もはやおさらいじゃないですよね？次回予告ですよね？レディゴーじゃないでしょう？

はあ、やはりギャラをケチったのがいけませんでした。お引き取りください。ギャラは振込みますのでご心配なく。

では本編に参りましょう。レディィィゴォォォ！！！

□■□■□■□■□■□■□

さて、前回私達は子供の白い竜を仲間にしたのですが、この子、喋るんですよね？

ただ直接声を発する訳じゃなく、精霊魔法のせいなのか、頭ん中に直接語りかけてくるのですよ。

だからアキさんには「きゅいきゅい」としか聞こえない訳ですが、私には判ってしまいます。ですから返事したり頷いたりするじゃないですか？

そしたらアキさん、「仲間はずれはいけないですぅ」って言いながら黒オーラ出すんですよね……。

きゅいきゅい（お兄様、精神感応魔法でアキ姉様に祝福したらいいと思いますわ）

ほう？それはどうやるのですか？

きゅいきゅい（アキ姉様の額に手を当てて、精霊を呼んで頼めばいいと思いますわ）

なるほどなるほど、以外と簡単なんですね？しかし貴方、随分お上品な喋り方をするのですね？

きゅいきゅい（私達は竜種の上位種のホワイトドラゴンです。ですのでお父様の教育が厳しいですの）

それはそれは、大変だったのですね？

ゴオオオオ……

「ザキ様……アキは放置プレイなのですか？」

い、いえ、そんな事は無いですよ。アキさん？目を閉じてじっとしてください。

「もぅ…ザキ様ったら…まだ明るいですぅ」

さっき青カンした気がしま……いえ、いいです。じゃ行きますよ！

私は額に手を当て…精霊を集め…イメージして……祝福を……

「アキさんに、意思の疎通よ、おいでませっ！」

おやおや、アキさんの頭に青い光が集まってきましたよ。

「はわぁ……なんか暖かいですぅ……」

どうですか？竜、話してごらんなさい？

きゅいきゅい（アキ姉様、わたくしの言葉がわかりますか？）

「あれぇ、竜の声が聞こえるですぅ」

どうやら成功したようですね？ほっとしました。

（良かったですね、お兄様♪）

これでアキさんも会話に参加出来ますね？まあ、みんな仲良くやりましょうね？

「はいですぅ」

（わかりましたわ）

そんなやりとりをしていましたら、竜について判ったことがあります。竜、いえ、名前はエバと言い、竜神族の娘なのだそうです。

竜神族は成人すると集落を出て、自分の縄張りを見付けるために旅に出るらしいのです。エバは縄張りにいいかなと、地上に降りて確認したときに人間に捕まったようです。竜のくせにおバカさんですね。

エバは襲われて庇ってくれたアキを尊敬し、アキを惚れさせている私を優秀なオスと認め、番いに選んだと言います。そして、私が高笑いしながら悪党を撲殺する姿に、畏怖を覚え、私に服従するのを決めたようです。

番いになる絶対条件は、自分より強いらしいのですよ。強い、ですか？褒められたら悪い気はしませんね。ホッホッホ……。

しかし番（つが）い？と言う事は……えっ！？

ゴオオオオオ……

「エバさん？ゆっくりＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしなければいけませんね？」

（お兄様！？お兄様！？）

申し訳ありません、エバ。世の中には関わってはならない事が７つあります。その内の１つがコレなんです。ホッホッホ……ホッホッホ……

～一時間後～

（ぐすっ…お兄様ひどいです…）

何があったか聞きませんが、私とてアキには勝てる気がしないのです。悪く思わないでくださいね……

「ザキ様何か言いました？」

いっいえ…何も…

「それは良かったですぅ」

「……」

（アキ姉様に逆らったら、生命の危機を感じますわ……）

と、微笑ましいやり取りをしながら、私たちは海を目指し、東へ向かうのでした。

エバさんが空から見ましたら、あと少しで海に着くそうです。しかし、エバさんは良い拾いものでしたね。空から見れるのは行動の幅が広がりますからね。

やがて森の切れ間を抜けたら、白い砂浜に出ました。そう、海ですよ。そこは小さな三日月型の湾になっていて、海の底は玉砂利なのか完全に透き通っています。素晴らしく綺麗ですよ。

沖にはたくさんの水鳥が騒ぎ、豊富な魚がいることを教えてくれます。新鮮な魚を食べれるなんて、ここでは贅沢ですから。

私はここだと決めました。いや、ここ以外無いと思います。ここなら少し森を切り開けば、立派な塩田が出来るでしょう。そしてザイオンへの街道を作れば、輸送も安心です。

魚をとれば、干物も作れるでしょう。この世界では高価な塩を、保存食になる干物に使えたら、これは一財産に繋がります。

決めました。アキさん、エバさん？ここに新しい集落を作りますよ。

「はいっ！」

（はいですのっ！）

私達は手を取り合い、喜びあいました。そして新天地が決まったところで一度、カーサンの集落に帰り、イルフィに会いに行かなければなりませんね。新しい土地と、新たな仲間。イルフィを蔑ろには出来ません。ですから――

私は精霊の力を使い、転移扉（転移扉のある場所は、誰でも行き来出来る）を作成し、集落の敷地として、かなり広範囲に結界を張りました。

これで敷地に入ろうとする人間は、迷ったあげくに元の場所に戻るでしょう。

作業が終わり、アキさんとエバさんが獲ってきた魚を焼いて夕食を楽しみました。

子竜とはいえ3メートルを越える大きさのエバさんを枕にして、私達は寝ながら宝石箱のような空を眺めました。

とても贅沢で、幸せな夜となりました。

何故か無性にイルフィに逢いたくなった夜でした。

「ザキ様ぁ、ね？」

仕方ありませんね？ホッホッホ……。

遭遇からの～発見ッ（後書き）

色々すいません

帰郷からの～団欒ッ（前書き）

毎度のことながら下品あります。

若干説明も入ります。

帰郷からの〜団欒ッ

さむっ…喉も痛いです。砂浜に転がって寝てたら、寒くて目が覚めてしまいました。今は朝方の様ですが、まだ暗いですね。そう言えばアキさんもエバさんも居ませんね？と、思いましたらいつの間にか森の大木を伐りだした物を、巨大なキャンプファイアのように燃やしていますね。ああ、女性は冷え性な方が多いですからね？私みたいなフェミニストにはすぐ分かりますよ。ホッホッホ……。

ならば何故に私が寒くて目覚めたか？それはですね、その巨大な焚き火が遠くに見えるからなのです。まあいいでしょう。流石に寒いので、取り敢えず近くに行きますね。

あらあら、人化したエバさんは……12、3歳位にしか見えませんね？ホワイトドラゴンと言ってましたが、髪も肌も白いのですね？瞳は金色ですが、あどけない表情は少女のそれでとても可愛らしいですね？

そのエバさんを抱き締めるようにアキさんが寝ています。こちらも小柄で可愛らしいです。エバさんにお姉様なんて言われてご満悦でしたね。ですが私には美少女2人の微笑ましい抱擁にしか見えませんね？ホッホッホ……

しかし、初めてですよ……私をここまでコケにしたおバカさん達は……。

エバさんの白く細いお御足、アキさんの活発的に日焼けしたお御足……。

両方掴んで……。

そおいッッ！！

ひゅー…ぽしゃん

「きゃあ…」

きゅいー…

ふう、皆さんご安心下さい。いま悪は滅びました。ホッホッホ……。

さあ気を取り直しまして…改めてこの浜辺を見てみましたら、砂浜は広いし辺りは当然、工場なんかありませんし、水質汚染は皆無です。まさに手付かずの自然と言えるでしょうね。

日差しも割りと強いですし、これは天日塩田作るのにピッタリですね。干物も当然上手く作れるでしょうね。これは素晴らしい。理想的な場所と言えますね。

そういう訳でとりあえずプランは決まりました。さて、イルフィの待つ我が家へと帰りますか。

しかし、アキさんもエバさんも何処に行ったんですかね？もう帰るというのに。これはしっかりと躾けが必要ですね。私の部下に時間にルーズな行動は許しませんよ。

「ザキ様ぁぁぁ…」

（お兄様ぁぁぁ…）

あらあら、こんな朝から水泳とは激しいですね？風邪をひきますよ？

「ふぇぇ寒いですぅ」

（寒いですお兄様…）

ホッホッホ……帰りますから支度なさい？ホッホッホ……。

彼女達が準備を終え、私達は早速転移扉を起動しました。今後は分かりやすく”ゲート”と呼びましょう。皆さんはどんな姿を想像していています？実際は大した物ではありません。まず目立つようなオブジェクト、また漬物石程度の岩で結構です。これが起動鍵（キー）になります。そして対になるキー、これは既にカーサンの木に指定してあります。そこに干渉したのと同じ組み合わせの精霊を組み込みます。

精霊には火・水・風・地の４種類に、光と闇の計６種類がいます。今後は〇〇のエレメントと呼称致します。それぞれに名前通りの現象事象を司っています。基本的に魔法を使う場合、例えば爆発を起こしたいなら、頭の中のイメージと言霊による呼び掛け、それにより精霊が集まってその現象を起こすわけです。

ですが、集まったエレメントの内訳は爆発を起こした場合、火７風２光１と言う割合になっていました。そして何度爆発を行っても結果は同じでした。これはイルフィとの修行の最中に気が付いた事です。まあ詳しい仕組みは分かりませんが、頭の中のイメージが、私の中の知識を前提としているので、それをエレメントが読み取ったと言う結果なのでしょう。つまり質量を伴った現象とは、等価交換なのでしょうね。何故ならエレメントはそこに在る訳ですから。多くの人間は在る事に気付かないので、私やエルフが起こす現象を無から有を生み出す様に見えるのでしょう。因みにエレメントの属性による違いは、髪の毛と瞳の色の違いだけです。見た目は可愛ら

しいブライス人形の様で、髪だけが赤だったり青だったりと言う訳です。

そして転位ゲートは属性は無いのです。ならどのエレメントか？と言う話ですが、エレメント達には共通した力があり、それに加え属性の力を持っています。ですので属性に依らない現象を起こす場合、例えば念動力や今回の転位ゲートみたいな現象ですが、誤解を恐れずに言えば、極端な話はどのエレメントでも可能です。

ですが、セキュリティと申しますか、ゲートを起動するにはキーに触れ、干渉させたエレメントをイメージする必要があります。つまり単純な構成であれば、エレメントに干渉できる者は誰でも起動出来る事になります。

ですので私は敢えて複雑な構成のエレメントを組み込んだ訳です。因みにこうです。火２水０風１地４光０闇３と言う構成になります。水場で日当たりの良い場所なのに、敢えて水・光のエレメントは使用してません。私は素直な性格ですからね？ホッホッホ……。

そして、このキーに触れると……

もわわわん……

ほら、キーの上に直径３Ｍ程の７色のモヤモヤが生まれました。これで完成です。因みに使役したエレメントはキーに縛られたりはしません。起動する度に集まって来ますので、ご安心を。さて、行きますか。

「いやですぅ！なんか怖いですぅ！」

（お兄様無理です怖いですの～！）

なるほどなるほど

でしたら私は2人の細い首を掴み……

ゲートの中へそおいっ！！！！！！

「うっぎゃあああ……」

（きゅいきゅい～！）

はい、おバカさんは去りました。聞き分けが良くて助かりますね？では皆さん、カーサンの集落でお逢いしましょう。

ホッホッホ……。

もわわわん……

□■□■□■□■□■□■□

一瞬目の前が真っ白にスパークすると、視界に色が戻った時には懐かしいカーサンの集落でした。いやあ便利ですね？未だ目を回している2人の襟首を掴み、カーサンの木の太い根っこの間から出ます。

ずるずるとアキ達引き摺り、懐かしい我が家に連れていきます。私は2人をリビングのソファに寝かし、辺りを見回しました。。

「イルフィ！イルフィはいますか？」

返事がありませんね？

「むにゃ？ザキ様ぁ？」

ああ、起こしてしまいましたね？どうやらイルフィは畑にいるようなので、少し待っていて下さい。

「わたしも行きますよぅ～」

いえ、申し訳ありませんが、久しぶりの再会なので遠慮して貰え

ませんか？では、迎えに行ってきます。
「はいぃ……」

□■□■□■□■□■□■□■□

SIDE　アキ

ザキ様が嬉しそうに駆けて行きました。一瞬放置プレイですかと黒オーラ出しそうになりましたが、よく考えたらここはザキ様とイルフィ様のホームですよね。いきなりわたしたちが偉そうにしたら失礼ですよね。

（そうですね。まずはイルフィお姉様にわたくし達を住人と認めてもらう事ですわ）

あ、エバも起きたのね？まあそうですね、けどちょっと緊張しますぅ。

イルフィ様ってどんな人なんだろ…エルフって怖くないのかな…

（エルフ族は物静かですが、怒ると大変なことになるらしいですね…）

はわわっ憂鬱ですぅ…

（気が重いですわ…）

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

□■□■□■□■□■□■□

私とイルフィで作り上げた畑に向かいます。多分彼女はそこにいるでしょう。さて、彼女は怒りますかね？仲間とはいえ、寝た女の子つれ帰った訳ですし。

私は素直に謝るだけですがね。かといって、アキさん達を遠ざける気などありませんし。イルフィが逆上して暴れても好きにさせましょう。ええ、そうしましょう。イルフィとて私は離す気など無いのですから。欲張りでしょう？でも反省など毛頭ありません。私は我が儘に生きる。それだけです。ホッホッホ……。

おや、麦畑のなかにイルフィ立ってますね？またぼーっと黄昏ていますね？しかし相変わらず絵になりますね。金色の麦穂の中に立ってるイルフィ。

やはり彼女はとても美しいですね。少し眺めていましょう。その価値がある女性ですから。ホッホッホ……。

□■□■□■□■□■□■□

ＳＩＤＥ　イルフィ

私は弱くなってしまったようだ。たった１週間程しかあの男と離

れてはいないと言うのに。

私が大好きな畑仕事も、気が付いたら惚けて空を見上げてしまっている。私はいったいどうしてしまったのだろう？

エルフの里に居たとき、仲が良かったフランは人間の冒険者に惚れて里を出ていった。

その時フランは「恋はいいものよ、イルフィ」と幸せそうにいってたけど、こんなに苦しいじゃないか！馬鹿フラン！

フランの嘘つき……

ここにある見事に実った麦穂だって、あの男が「パンにしたら美味しいでしょうね？」とか言ったから植えたのに。

この集落全てがお前との記憶しかないのに！

苦しいなあ

苦しいよ、ザキ

こんなに私を弱くして、お前はいったいどこにいるんだ？

逢いたい…

逢いたいよ、ザキ

少しでいいから触れたいよ……

「ならば触れたらいいじゃないですか？ホッホッホ……」

……へっ？

この気持ち悪い笑い方！？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

□■□■□■□■□■□■□

へっ？じゃなく、触れたらいいじゃ無いですか？と言ってるんですよ？イルフィ。だいたいなんですか？悪かったですね？気持ち悪い笑い方で。ホッホッホ……。

「えっ？なんで…なんでいるの？」

なんでって……帰ってきたからに決まっているでしょう？土地が見つかったのですよ？

「うううう……ばかぁ……逢いたかったよぅ……」

あらあら、随分と可愛らしいのですね、イルフィ。ナデナデしであげますよ。イルフィはいい子ですよ。ちゃんと待っててくれて偉

いぞですよ。

「うえええ……ぐすっ…」

申し訳ありません待たせてしまって。ただいま、イルフィ。

「ぐすっ…ぐすっ…おかえりなさい、ザキ」

はい！

「…で何人？」

な、何がですか？

「だから……何人？」

お…おっしゃってる意味が全く判らないと言いますか何というか。

ホッホッホ……。

「離れてる間に手籠めにした女の数に決まってるじゃない……」

次の瞬間、私はエレメントの力を最大限借りて、上空１０メートルまで飛び上がりました。

そこから一気に急降下し、手は大地に縫いつくように、畳まれた脚は肩幅に、頭は大地に叩きつけます。

これにて完成ですっ

超飛翔精霊土下座（スーパージャンピングエレメンタル土下座）！！！！！

どうですか？イルフィ。これが私の最終形態ですッッッ！！

「…だから？」

こ、これがエターナルフォースブリザード……絶対零度の視線が私を幾重に突き刺します…シヴァも真っ青ですよ……エルフの姫は化け物ですかッ！？

「…ザキ…お前死ぬか？」

ずびばぜんでしたぁ！！ゆるぢでぐだざいイルフィ様ぁ……

「判ればいいんだ」

ごめんなさいッ私、調子に乗ってました…ぐすっ…ぐすっ…

「……」

ビクッ

「……で？」

あの…その……

「……今夜は？」

寝ないでご奉仕じまずぅ……

「そうか、励めよ？」

Ｅｘａｃｔｌｙ《当たり前でございます、我が姫》

こうして久しぶりの夫婦円満なやり取りは過ぎ行き、本日のメインイベントである本妻ＶＳ側室＋ペットの顔合わせに突入しました

先手を切ろうとしたアキ陣営でしたが、本妻の目力で黙らせられ、その後のＯＨＡＮＡＳＨＩで我が家の女の順位が確定しました。私にとって最悪な形で。

完全に目論見を外したアキ陣営は、旗色悪しと計画を変更しました。女帝イルフィにアキは忠誠を誓い、今後あの男に浮気しないように監視を立てると進言しやがりました。

女帝の「よきにはからえ。大儀であった」の御意により、私へのしめつけ政策は確定した。

……全私が泣きました。

その後の食卓では、何とか和やかな（主に女性陣）雰囲気を醸し出していました。ですがイルフィは口をきいてくれません。針のムシロ、遠山の金さんのお白洲ですよ。いっそ”成敗ッ”と一思いに私を殺して下さい。

そして食事は終わり、女帝イルフィが私の首根っ子を引き摺り、

寝室へ引き摺りこまれました。

見送るアキさんとエバさんは「お姉様、頑張って」だの（イル姉様素敵よ）だの私の味方はいませんでした。長いものには巻かれ、水は高きから低きへ流れる。そういう事なのでしょうね？その辺の処世術は異世界とて共通らしいですね。

さあ、エレメント達よ！私のお稲荷さんにお出ませ！！！！

そして、私が解放されたのは三日目の朝でした。何やら艶々したご満悦なイルフィと、やつれた私。だが、神はいませんでした。

ぐったりとした私の両脇に立つ女二人。そう、アキさんと人化したエバさんです。私はエリア５１で捕われたリトルグレイの如く、両手を引き摺られながら客間に軟禁、二日に渡り吸い取られ、さらに三日目にはイルフィが参戦、私が完全に解放されたのは集落に帰った日から、丁度１週間後の事でした。

私はアウンサン・スー・チー女史の軟禁生活の辛さを垣間見ました。

私……汚されてしまいました……

皆さん、ハーレムに憧れるのは結構ですが、１つ言わせて頂きます。

お稲荷さんに玉２つ、竿に至ってはただ一本。

そういう事です。

ホッホッホ……。

帰郷からの～団欒ッ（後書き）

イルフィが最強

そういう事です。

ホッホッホ……。

独白からの～胎動ッ

「はい、皆さんこちらに注目して下さい。貴方達がこの集落の住人になるにあたり、確認事項があります。それをこれから話しますので聞いて戴きます」

私はバンッ！と先程そこらの木を切って作ったボードを叩きます。イルフィを始め、３人が此方を見るのを確認し、私は口火を切りました。

何故にこのような話になったのか？事の起こりはこうでした。

嵐のような（爛れた）王の帰還祭り開催、ドキッ！乱交もあるよ！を何とか無事に生き抜いた私でしたが、翌朝目が醒め、黄色い太陽に悪態をつきながら私は身支度を終え、リビングに赴きました。

働き者のイルフィは既に畑に出ており居ませんでしたが、ソファには未だ客気分の抜けないアキさんとエバさんがいました。

彼女達はだらしなくソファに寝転び、茶菓子なんかを食べながら、ふわぁ～なんて欠伸を漏らしているのです。

その余りにもだらしないその姿を見た私は、一気に憤慨し、畑にいたイルフィを呼び寄せ、緊急会議を招集したって訳です。

呼び出されたイルフィや他二名は、普段のお気楽極楽な雰囲気とは違う私を怪訝そうに見つめ、一様に緊張しているようでした。

私は皆に言います。私は貴方たちと寝たからといって、この集落に置くつもりはありません、と。それはイルフィにも改めて言っておかなければならないのです。

イルフィは一体なんなの？と混乱し、アキは捨てないでと涙を溢し、エバは人化したら爆乳なのねと胸を揺らし首をかしげていた。

私は皆に敢えて説明します。このカーサンの木の集落は、私が異世界から放り出されてたどり着いた場所です。色々混乱はしましたが、なんとか私は気持ちに折り合いを付け、私は1人でどうにか生きていくつもりになりました。誰とも関わらずにです。

ですが、何の偶然か、手負いのイルフィが迷い込み状況が変わりました。最初は酷く迷惑だったのですがね？

私はイルフィにウインクし、彼女が苦笑いするのを見て、さらに話を続けます。

ですが、イルフィと生活を供にし、畑や住居を充実させていく中で、私は自分が1つ勘違いをしていた事に気が付きました。それは私が1人で生きていくなんて無理だと言う事です。

イルフィを知って、愛し合う中でそう気が付きました。そして、イルフィからこの世界にはたくさんの差別や不公平があり、弱いものは淘汰されると言う非常に現実的かつ、無常な状況があると知りました。

それで私は思いました。私には夢があります。それはこの空を切り裂くような独創的な建物をこの手で建てることです。それを私は必ず叶えます。絶対に。

ですが、障害も多いでしょう。なにせ私はこの世界では異端ですから。――はっきり言いましょう。私はこの世界の人間では無いと先程言いました。それを貴方たちが信じるかどうかは貴方たちに任せます。それは私にとって重要ではありません。

重要なのは私にはこの世界のルールに従う気は一切無いと言う事です。この大陸にも王国があります。グランビア王国でしたかね？私は彼らと同じ人間ですが、私が建てるべき建造物は彼らの王城等、過去の遺物程度にしか見えないでしょうね？

ならば彼らは私の前に必ずや立ち塞がるでしょう。私はそれを許しませんよ。種族としては同胞ですが、立ち塞がるなら私の敵です。無慈悲と言われようが、私は踏み潰します。噛み付く気も起きない程残酷に、です。

私は魔法は使えますし、ドラゴンすら凌駕する身体能力が在るようです。これは人間には過ぎたる力です。ですが何の因果かこの世界に来た際に手にしてしまいました。

私は元の世界で事故で死にました。死に際に何かの声が聞こえ私は本来死ぬべきではなかった、が手違いで死んだと言われました。そしてその声は、私に何かの力を授け、生まれ変わらせると言いました。

その存在が何かは知りません。ですが私は現実にここにいて、不

可思議な力を手にしています。ですから私はそれを有り難く受け入れる事にしました。私が私の目的を果たすためにこの力を行使します。

「ザキ様は、同じ人間を殺すのを躊躇しないのですかぁ？人間、固有種族の中にも弱者はいますぅ。ザキ様はザキ様の野望をかなえる為に弱者を蹂躙するですかぁ？」

アキさん震えて此方を見てますね？怒りでしょうか？悲しみでしょうか？ホッホッホ……。イルフィも複雑な表情ですね。エバは……ぽかんとしてますね。和みます。さて、話は途中なのですよ？皆さん。では続けましょうか。

皆さん、今のアキさんからの問いの答えはイエスでありノーでもあります。まず勘違いして欲しくないのは、どんな立派な建物を建てようが、中に人が営まなければ何の意味も無いという事です。

私が憧れた建造物を設計し、私が尊敬した建築家は、その建物をとても意味を持たせた設計を施しました。神とその使徒達を象徴した数々の塔は、私が死ぬ時でもまだ完成しておりません。それはその建物は贖罪教会であり、人々の施しで建てられている為です。ですので約１３０年経っても未完なのですよ。

しかし現在に到るまで、世界中から寄付や、施工に直接関わろうとする人間が紡ぎ続けて、漸く完成が見えてきました。大事なのはそこに関わろうとした人間が、会派宗派に留まらず、様々な人種が賛同し、実際に関わりました。

これは、これこそが平和と言う事じゃありませんか？私はそこに強い羨望と憧れを感じたのです。

その建物の名前はサグラダファミリア。私は私の作るこの世界の象徴を建てたいのです。アキさん、貴方の問いに対し、私はこの我を通す事についてはイエスと答えます。

ですが私はそれを叶えるために弱者や虐げられている固有種族を味方に付けます。言うなれば弱者の国を作り、同じ志を持った仲間とその象徴を作り上げます。そこには種族も身分も関係なく、ただ幸せを求め、互いに尊重できる者が集います。

私は私のと言うより、”私達”の敵を傍若無人に蹂躙します。塵1つ残さずにです。さて、アキさんの問いに対し、この理念ならばノーになるのでは？まあそういう事です。

私はそこで沢山の人が行き交い、笑い、憩う姿が見たいのです。私が建てた物が生活に溶け込み、何かを象徴するシンボルであって欲しいと願います。

アキさん貴方は見たでしょう？ザイオンの警備隊としていくら弱者を救おうが、世の中は変わらないことを。

イルフィは知識と好奇心を満たそうと外に出ましたね？貴方が満たしたい好奇心の先には、おぞましい現実がありますよ。人間はエルフを狩り、さらに同胞同士で共食いをしています。虐げられるは何もエルフに限った事では無いのです。

エバさんは偉大な竜神族の上位種です。ですが人間から見れば、竜はただのコレクションの対象です。貴方は身を持って知っているでしょう？

私は世界などどうでもいいです。ですが、仲間の為ならば最悪な邪神と呼ばれようと笑いながら敵を滅ぼします。全ては私の目的、国境も人種も種族すら超えた平和の象徴を築く為に。

面白いとは思いませんか？気が付いたら大陸中から異端者、弱者がいつのまにか消えてるのです。そして気が付いたら人間が手の付けられない国が、ある日突然現れる訳です。クックックッ……これを愉快と言わずしてなんと呼びましょう？

私はその国の名前も考えてあります。それは「フェリス」その意味は私の世界の言葉で「しあわせ」です。私達には福音であり、私達の敵、つまり変化を嫌い利権を失いたくは無い者には魔界と言えるでしょう。

どうです皆さん？感想は如何ですか？私は話を切り、彼女達に問い掛けました。しかし決まりましたね。ズバーン！！と言う効果音が欲しい所です。ホッホッホ……。

あれ？リアクションが薄いですね？皆さん茫然と何もない空中を見ていますね？気持ちが悪いですよ？

むう、こうなったら渾身の宴会芸の”ちょんまげ”を披露しましょう。

まずは下半身を露にし、私の立派な日本刀を抜き身にします。脇差じゃないですよ？反りも輝きも硬さも見事な大業物ですからね？

ここで注意があります。みなぎってない業物はいけません。かと

いって完全にみなぎりきっても駄目なのです。絶妙な半起ち…いえ、適度なみなぎり方が大事なのです。では、イルフィの頭上をロックオンして私のＴＮＴＮ…いえ、大業物を振りかぶり――――

「ザキ、あなた何をしているのかしら？」

これはこれはイルフィさん。皆さんが上の空でしたので私が少しお茶目を働こうかと。

「あなたは……私達がせっかく感動をしていたと言うのに……」

あらあら、そうだったんですか？それは意志の疎通に齟誤がありましたね。で、イルフィさん？なぜ貴方は私のアーティファクトを握っておいでに？イルフィさん？イルフィさん！？それ以上伸びませんよ？如意棒じゃあ無いのですから！やっ、いたっ、アッー！！！！

「私達の感動を返せ！そして一度死んでこいッ！！そおぉぉぉぉぉぉいッッッ！！」

ぜ、全国女子高校生ファンの皆さん、さよぉぉぉうならぁぁぁぁぁぁ……

ああ、皮が伸びたらどうしましょう？でも皆さん、火星は恥ではありませんよ。お互い頑張りましょう！では私はこれで失礼します。いやね？今私は飛んでるんですよ。下半身丸出しで。ああ、ザイオ

ンの街並みが見えてきました。では、失礼します。

「おいっ！下半身丸出しの変態が出たぞっ！！」

「きいあああああっ…あらご立派」

「誰か警備隊を呼べ」

「はっキサマ！？アキ隊長をかどわかした鬼畜め！？」

「うおおおッ殺せぇぇぇぇぇぇぇぇッ！！」

私、生きて帰れるでしょうか？

□■□■□■□■□■□■□

Ｓｉｄｅ　イルフィ

ザキの長い独白を聞き、私の中に生まれた思いはただ衝撃だった。

異世界と言うのは聞いていたが、はっきり言って眉唾だった。た

だ惚れた弱みね？それを気にするより、彼との生活を楽しんでいた。

彼が言う野望、それとエルフの利害は一致するだろう。そして、彼が言うような結果になれば、エルフは新しい価値観を手にし、他の種族も同様だろう。

私が彼を尊敬するのは、彼の言葉は一見理不尽に見え、相手によっては嫌悪感を催すだろう。だが、彼は一切の誇張も卑下も無い。ただ冷静に目的迄の最短距離を計算し、計画を立てる。

そして例えば誰かが大事を成そうとすれば、必ずその弊害が生じるだろう。具体的には死者や孤児が生まれる等だ。だがザキはそれを隠さない。しかも言葉を濁さずに最悪な被害をていじするのだ。自分が敵を踏み潰し、そして死人が出ると。

過去の英雄達は理解を得るため、または士気を上げるために言う。良いことばかりを。だがザキは逆に、目的は果たす価値がある。だから殺すし、殺されると。

ザキは強いのだな。そして正直なのだな。

きっとザキが持つ価値観とは、異世界の人間だから持ちうる価値観なのだろう。

ふっふっふっ…信じてやるわ？ザキ。だから私は貴方を帰さない為に尽くしましょう。こんなにも私の興味を引き付けて止まない貴方を離す物ですか。

だけどダーリン？あの笑い方は止めたほうがいいと思うの。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

□■□■□■□■□■□■□

Ｓｉｄｅ　アキ

ザキ様が言ったこと、それはわたしにとって驚きと同時に、強烈な自己嫌悪に襲われましたぁ。

わたしは孤児院出身ですぅ。わたしに両親はいましたが、お父さんは酒浸りで病弱だったお母さんを酔っては殴ると言う毎日でしたぁ。

ある日お母さんを殴るお父さんが、逆上したお母さんに刺され、そんなお母さんは泣きながらお父さんの後を追って死にました。

悲しかったけど、どこかホッとした自分がいました。

その後わたしは孤児院に送られ、怖いけど優しい院長先生と、血は繋がってない兄弟姉妹に囲まれ、なんだか家に居たより幸せな生活が出来ました。

ですが兄弟姉妹達は人間だけではなく、亜人達も沢山いました。尻尾を切られた猫人族、瞳が綺麗だと人間に目玉を繰りぬかれた精

霊族、身体が丈夫だからと試し切りの道具にされたドワーフ族……誰もみんな私と同じ人間がやった事です。

わたしはそれに憤りながら、院長先生が密かに鍛練していた拳法を修行しました。そして免許皆伝を許されたわたしは、院長…いや、師父に「外を知り、悲しみを知ってそして愛を知れ。うぬが本当の愛と哀しみを知ったとき、アキ、うぬは我が流派の奥義を知るだろう。だから行けい！我が娘、アキよ！」そう背中を押され、私は流れ流れてザイオンの警備隊長になりました。

わたしは師父の教えにはまだ到っていません。警備隊長として知る哀しみは、終わりの無い、だが抗えもしない理不尽な哀しみでした。今日誰かを救っても、また明日、同じような事が起こるのです。

そんな心が折れそうな時、わたしはザキ様にあったのです。

先ほどザキ様が言ったこと、それは師父が言ったことに通じます。わたしが日々目先の哀しみを一瞬笑顔に出来ても、恒久的な笑顔にはなりません。

なら根本から解決する為には権力に立ち向かう必要があります。ですが、立ち向かう道の途中では必ず誰かが悲しみます。

その辛く哀しい道の先に、長く続く幸せがあるのなら……。

師父、わたしはこれから修羅になります。

愛を教えてくれた人とわたしは歩みを供にします。

そして、本当の哀しみをわたしが背負い、必ず奥義に到ります。

だからザキ様ッわたしはぁ……

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

□■□■□■□■□■□■□

Ｓｉｄｅ　エバ

竜神族とは実は幅広い意味でしかなく、竜、そして竜に準ずる種族の総称なのです。その中には私たち上位種と言われる種族のように、精霊と対話し、理性的に独自の文化を形成できる知性がある種類、そしてワイバーンやランドドラゴンのように、生存本能のみで生きている種類、その２つに分けられますの。

その他には、かつて人間と交わった者の末裔、竜人族がいます。彼らは飛ぶこともブレスを吐くことも出来ませんが、人間の数倍の身体能力と高い知性を有していますの。

ですから厳密に言えば３種族と言えますが、ただ上位種の中では蔑む傾向があり、２種と言われていますの。

ただし３種族に共通する事がありまして、それはどの種族も多かれ少なかれ人間に虐げられていると言う事ですわ。

人間は怖いです。一人一人は弱く、私たちのブレス一つで蒸発します。ですが、彼らは武器を作り、人垣を作って私たちを殺します。その動機の多くは私たちの鱗や牙等を欲しがると言う理不尽な物です。

死んだ亡骸を採取するならまだしも、わざわざ欲望を満たす為に殺しに来ます。欲は怖いです。偉大な竜とて欲望に団結した人間には適わないのです。

竜神族はただ、時間にたゆたうだけの静かな存在です。なぜ人間はそっとしておいてはくれないのでしょうか？

父たるマスタードラゴンは言いました。お前は成人した。なればお前が生きる場所を見つけろと。

竜は基本的に単体で生きる物です。成人になれば親子関係も希薄になります。ですから私は私の縄張りを求めて旅に出ました。

そして、好奇心を出して降り立った場所で人間に捕まりました。ザキ様が来なければ私は死んでいたでしょう。そして私は死を覚悟していました。

ザキ様が参られた時、初めは強大な上位竜が来たのかと思いました。何故なら上位竜はその身に強大な精霊を纏わりつかせているからです。

そしてザキ様に寄り添っていた精霊達の質や量は、最上位竜で父であるマスタードラゴンよりも凄まじい圧力を放っていました。

ザキ様は自分が人間だと言います。ですが、私は信じられません。ザキ様は精霊の加護を受けていますが、それはそんな生易しい物では無いのです。

６種の精霊達は常にザキ様の身体を対流し、浄化、修復、強化を繰り返しています。イルフィお姉様は気が付いておられませんが、ザキ様は既に老いる事も病気を患う事もありません。それは身体を構成している物を、常に最適に保とうと精霊が働き掛けているからです。そして精霊達は物理的な障壁を、ザキ様の身体に薄い被膜のように展開してるのです。

この世に不老はあっても、不死なんてありません。ですが、既に不死であるザキ様を殺したければ、一瞬で全身を消滅させなければ不可能でしょう。

そしてザキ様には精霊が張っている障壁があります。それは薄く見えますが、父のブレスとて火傷で済む程の強度なんです。

結局、ザキ様をどうにか瀕死に追い込み、暫くの間行動不能には出来ても、この世にザキ様を一瞬で消し去れる存在は……いません。結果、ザキ様は実質不老不死と言えます。

私が番いに選ぶ存在は、私の性格故に強者でなければ嫌です。ならば、ザキ様以上の存在はいないでしょう。

ですから私は千年万年貴方に寄り添いましょう。私の縄張りは、貴方の傍に決めました。

ふふっでも今はお兄様でも構いません。何故なら、私にはまだ１万年は貴方と歩めるからです。

うふっ、お姉様達にはないしょですのよ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

□■□■□■□■□■□■□

やあ、ヤマザキですよ。そういえば今日はこの挨拶をしていませんでしたね？ホッホッホッ……。

集落よ！私は帰ってきたッッ！！

え？後頭部ですか？ふむ……ああ、槍が刺さってますね？何やら私を殺そうとする、不届きな者がいましたからね？きっとその方達の物でしょう。

え？ああ、その不届き者でしたら死なない程度に懲らしめました。死なない程度にね。クックックッ……。

しかし、ザイオンから歩くのは面倒でした。何やら下半身が寒…おっと、私のライトセーバーが光ったままでしたね。Ｔｈｅ　Ｆｏｒｃｅ　ＢｅＷｉｔｈ　Ｙｏｕ．え？格好悪いですか？まあ下半身が丸出しではね。ホッホッホ……。

さて、私が居ない間はどうなってたのやら。

はい、ただいま帰りましたよ。

「お帰りなさいザキ、パンツはきなさい」

「お帰りですザキ様ぁ。パンツはいてください」

「お帰りなさいませ、お兄様♪パンツをお履きになってくださいませ♪」

私は酔っ払った亭主ですか？分かりました。ここまで言われたなら私にも考えがあります。絶対に履きませんッッッッ！！

「「「履きなさいッ！」」」

……はい。

【ザキ様パンツお召しかえ中】

ホッホッホ……。皆さん私は帰ってきました。

「今までのやり取りが無かったように言わないの」

もう勘弁して下さい、イルフィ。さて、私が話すべき事は話しました。後は貴方たちがどう思うかです。私は貴方たちに強要は致しません。ですが、私の本心は貴方たちと共に歩く事です。

では、聞かせてくれますか？

「相変わらず突拍子もないことを言うわね、我が旦那様は。だけど正直そんな考え、今まで思い付く馬鹿はいたかも知れない……。でも、実現しようと行動する馬鹿はザキだけね。でもね？私はそんなザキだから貴方を愛したのよ。だから、私を見くびらないで欲しいわ。貴方はただ、命じればいいの。　黙って私についてこいってね」

そういってイルフィは、挑戦的な眼差しで私を見ました。やはり貴方は好い女です。

ではイルフィ？私の愛しい女房殿、私の夢を一緒に担いで下さい。貴方には私の夢の頂上から、素敵な景色を一番に見せましょう。

「ええ、わかったわザキ。私は貴方と伴に行く。死が二人を別つまで。もっとも？死ねねばの話だけどね？私は貴方を守るし、貴方も同じでしょう？」

はい、必ず貴方を守りますよ。貴方は今より、愛しい伴侶であり、同志です。期待してますよ？イルフィ。

おや、次はアキさんですか？

「わたしは師父達に導かれ、わたしなりに困った人を助けてきました。それは、私みたいな不幸な孤児を作りたくなかったから……だけどっ！　助けても助けても、やっぱりザキ様が言うように、現実は何も変わらなかった」

あらあら、アキさん泣いてしまいましたね。無力さを噛み締めている、その姿は美しい物です。その小さな体にたくさんの悔しさを滲ませて。私はは思わず抱き締めたい衝動にかられましたが、それではアキさんを対等に見てないと戒め、黙ってみていました。

「わたしは無力だけど、やっぱりこの悪循環をどうにかしたい…やり方はわからないけど……だけどどうにかしたいの！教えてザキ様！　何かしたいのにやり方が判らなくて…モヤモヤするよぅ……」

アキさんは耐え切れず、嗚咽を漏らしています。ああ、抱き締めたくなります。ですがまだ出来ません。

アキさん、貴方の高尚な夢はきっと困難な道でしょう。ですが、その道は私の夢の途中でもあります。貴方が対する敵は体制と言う巨大な化け物です。それは人間の全てに食い込んだ強固な鎖です。ならば、私がその鎖を断ち切りましょう。貴方は私の太刀を持ち露を払いなさい。

何より貴方の夢がそれならば、これより先は私の夢でもあるのです。アキさん、貴方もこれより先は私の同志です。期待してますよ？

「うんっ！　わたし、必ずやる！　悲しい孤児を増やさないために！　ザキ様、イルフィ様、それにエバ。わたしも頑張るから、わたしに力を貸してください！」

ふふっ、漸くいつものアキさんに戻りましたね。貴方にはその太陽のような笑顔が似合います。

イルとエバはアキを抱き締め、私はその微笑ましさに笑いました。

「わたくしは、世間がまだよくわかりません。　それは私が、そとの世界を知らないからでしょう」

後はエバさんですね？

「はいお兄様。わたくしはそれほど言葉は必要ではありません。貴方はわたくしの魂の伴侶。ならば私は貴方が世界を食らうとしても、わたくしはそれを肯定します。これはわたくしの意志であり、ザキお兄様でも否定は出来ませんの。宜しくお願いしますお兄様。わたくしは貴方の剣であり、盾ですわ」

エバさん、その剣をありがたく受け取ります。期待してますよ？エバさん。

「はいですの♪」

私は黙り、皆に頭を下げた。皆は真剣な眼差しで私を見ています。本当に頼もしく、そして可愛らしい方たちですね。ホッホッホ……。

さて、改めて異端なるものの楽園、フェリスの発足をここに宣言します。便宜上、代表は私としますが、立場はみな対等です。皆が皆の目的を手にする為の相互組織とお考え下さい。皆で意見を言い合い、方向を決め、そして動きます。よろしいですね？

皆は強く頷きます。私は3人と強く握手をし、庭に出ます。カーサンの木は変わらずそこにあり、頼もしく風にそよいでいます。

さあ、私の野望、とくと御覧に入れましょう。何せ頼もしい者達に囲まれていますからね。

私は少し笑い、そして新天地での計画を頭に思い描くのでした。横に並ぶ女性達の暖かさに身を委ねながら。

取り敢えずは皆さん、一発やりませんか？ホッホッホ……。

第一幕　完

独白からの～胎動ッ（後書き）

第一幕おしまい。と言うか、ここまでがプロローグだったりします。
ホッホッホ……。

開幕ッッ（前書き）

ここから二幕が始まります。ちなみに二幕のサブタイのッ↑コレが二個に増えました。特に意味はないですが、何となく。

あと、駆け足な感じですいません。

今後は各キャラ掘り下げ話しが増える予定です。

開幕ッッ

あれから五年の時間が流れました。私達が創ろうとしているフェリスと言う集まり、その母体となる土地がやっと形になってきたのです。え？ああ、彼女達はみんな元気だですよ。いえ、元気すぎるくらいですね……

そもそもこの地に住む住人もかなり増えましたよ？3年前ですかね？イルフィを訪ねてエルフの旅人が数人来たのです。その時エルフ達は私達のフェリスにやたらと共感した様で、あちこちのエルフに声をかけたらしいのです。

そうして、東の大陸どころか、全体陸からわらわらエルフの若者が集まってきました。いま5百人位はいますかね？何処に隠れていたのでしょう？エルフのネットワークは凄いですね。

まぁイルフィみたいに働き者ばかりですので、私としては大助かりですが、ね？

後は私の作った商会関係の人間が三百ほど。ほら、平民ばかりですからね商人は…それでヤマザキ商会、ああ、私の商会の屋号ですが、あちこちで荒稼ぎしたので妬まれてしまいましてね？物騒じゃないですか？山賊を装った冒険者が襲って来るのですよ。既存の商会に雇われて。

最初は私が出ていき、ユグドランの棍棒で頭パーンとやってましたが、私の商会の馬車は今や３０を越えてますのでいちいち相手をしてられないのですよ。

そこでフェリスに商会従業員の家族を移住させました。馬車はま

あ、凄腕の冒険者を飼ってますからどうにかなってます。

トップランクの冒険者達を抑えてしまいましたからね。まあ首輪をつけることは簡単でした。金で動く人間は金で。名誉で動く人間は私が出向き、名誉と自分の命を天秤にかけさせましたよ。皆さん最後には私に忠誠を誓ってくれました。やはり、人間は誠意を持って接すれば、必ず通じるのですよ。ホッホッホ……。

アキさんは孤児院と平行して学校作りました。ですが人手足りなくなりまして、雇ったのですよ……アキさんの師父……3兄弟なんですが……すいません、それは今度話します。はぁ……。

エバさんは、竜神族どころか猫耳犬耳なんでもござれで、仲良くなった獣系をわらわら連れてくるんですよね。

ですがその亜人の方々もやはり働き者で、私達は大助かりです。まあそんなこんなで人口は約二千ってとこでしょうかね？中々凄いでしょう？

私は商会の代表者だったんですが、人口が予想より増えちゃったもので、商会はイルフィに任せてと言うか無理やり引きおろされまして……

今は何の因果かフェリスの長老と呼ばれてます。

イルフィ曰く、「あんたが言い出しっぺなんだから、しっかり御輿に乗りなさい」ですって。

たしかに種族間でたまに諍いも起きますし、後はなんやかやと決済することも多くてですね。あまりにストレス貯まりますから、夜中に「原点回帰ですよ！」って叫びながら、全裸で森に逃げ込みましたら、イルフィやアキさんがすっ飛んできまして、あっという間に御用です。

ですから私は腹いせに今ちいさな反抗をしています。いま私は長老執務室なる大層な部屋で、偉そうな木目の執務机に座り、アキさんの報告を聞いてます。

ぷくく、私、いま下半身は丸裸なんです。上半身はビシッと決めてますよ？ですが下半身は靴下以外着用してません。

なんですかアキさんのあの真面目な表情。私、ＴＮＴＮ丸出しですよ？

しかもですね？どうやらエバさんが私がまた逃げ出さないように監視してるようでして、私のエレメントがビンビン反応してるんです。そうですね、彼女いま光のエレメントで迷彩化してますが、私の隣にいます。だから私はエバさんの方向に腰を捻り……

「〜〜〜〜っ！！」

足で挟んでやりました。彼女とは飽きるほどベッドを共にしてますが、未だに純情といいますか、快感に溺れながらその痴態に赤面すると言う器用な方なんです。何と言いますか、毛の無い綺麗な泉をびしょび……おっと失礼。とにかく初なんです。

「〜〜〜〜ぁう」

「ん！？ザキ様何か聞こえませんでしたかぁ？」

「ん〜？聞こえんなあ〜？エレメントが遊んでるのでは無いでしょうか？さあ続けて続けて」

「あ、はい。学校運営は順調ですが、児童数に対しての教師の割合が未だに少な———」

ホッホッホ……。そんな訳で、意外と私、楽しんでますよ？ぐりぐり……

「〜〜ゃぁッ」

ホッホッホ……。

□■□■□■□■□■□■□■□

では街の話なんかしてみますか。五年前、皆で夢を語りあっあと、イルフィの指導の元、アキさんに魔法を覚えさせました。エバさんは元々使えたみたいです。ホワイトドラゴンだけあって、彼女は光のエレメントを上手く使います。アキさんは風のエレメントに適性があり、身体強化を使いこなしてますね。ああ、アキさんですが、あの小柄な身体でサーベルタイガーを括り殺す程の体術、いや暗殺拳でしたかね……まあ強いです。そのうち語るのでお許しください。

そんなこんなで皆が結界を張れるようになり、交替で聖地（カーサンの集落）を守りながら、フェリスを開拓していきました。分かってない方もいらっしゃるので敢えて言いますが、私が見つけた海沿いの開拓地の事ですからね？悪しからず。

で、私が最初に図面をひいて、都市計画をたてながらの開拓をしていきました。長老邸は将来王国と渡り合う為にとびきり豪華に作りました。いえ、私が戯れに引いた図面、英国はバッキンガム宮殿を模倣したものですがね？イルフィ達エルフが悪乗りしまして、私が知らない間に基礎工事が終わってました……。広大な庭園も…ですね。

ただ、私が無理やり普段は子供達の公園に解放してますし、私は住んじゃいませんよ。私は最初の家に相変わらず住んでます。転位ゲートを執務室に繋いでますから遅刻もしないです。

その宮殿を中心に、碁盤の目に区画整理をしました。ですので、宮殿を0とし、北1東2みたいな座標が直接住所になってます。分かりやすいでしょう？

地球の北海道は札幌の中心街を想像したらいいです。名古屋市内の中心地でもいいですね。

ただ、モザイク状に巨木が生える公園が配置してあります。万が一、どこかのおバカさんと戦争になったら、どでかい軍がまともに進軍できないようにしたのです。

私達は今や、森の民です。私達自身はなにも問題ないのですから。後は商業区と職人街を配置し、居住区はざっと二万人規模を想定して造成しています。フェリス全体が1つの城塞都市国家と言う体でして、フェリスを囲む半円形の城壁は、全てエレメントで細工した木々です。幻影の言霊を仕込んでいますので、肉眼では誰も発見出来ません。

出入りは森のなかにある関所を介すれば可能ですよ。まあ、住人以外の出入りは現在許可しておりませんし、住人達はフェリス内で生活の全てを賄えますから問題ありません。

先ほどのアキさんの発言にもありましたが、学校と病院もありますし。消防や警察は各種族から代表者を三人ずつだし、自治を持ち回りでやるようにしています。治安や衛生意識は高い水準に保ちたいです。何より、住人達がここを自分達の故郷であると言う意識を強く持っています。ですから自治は積極的に取り組んでいてくれます。

行政はさっきの代表者が議員の役割を果たします。共和制に近いのかな？まだ不完全ではありますが。私はまあ、名目だけですよ。何かあればザキ様が荒ぶり我らを護って下さるみたいなイメージらしいです。私はでいだらぼっちですか？まあいいでしょう。私は箱

を用意するのが仕事ですから。

議会は各自議題を持ち寄り、毎回一触即発まで議論して、最後は必ずノーサイドと案外うまくやっているようですね。多少は種族の縄張り意識はあるようですが、私が意味ありげに笑うと皆さん我を抑えてくれます。私の笑い方、おかしいですか？ホッホッホ……。

因みにヤマザキ商会はフェリスの国有企業で、儲けがそのまま国家予算に繋がるようにしています。塩や干物、そして香辛料が主な商品ですが、今や東の大陸以外のシェアは全体の４割を占めていますからね。まあ、からくりはいずれお話しましょう。ホッホッホ……。

そもそも商会の社員はフェリスの住人ですからね。福利厚生に力を入れてる分、人件費は少なくても皆さん不満は無さそうです。それじゃあみんな頑張りますよね。王制など封建社会に福利厚生の概念はありませんから。初めは凄かったですよ？週休２日が当たり前と私は思ってましたから、そのように指示を出し、医療やその他公共サービスを提示したら拝まれましたから。

だいたいが施設や設備もある意味チートと言いますか、私の地球の知識を前提に都市計画を推進しましたからね。皆さん目を白黒させてます。今はそれも馴れて、国（まだ国を名乗ってませんが）に奉仕する義務と、国が国民の幸せの為にあると言う相互関係を理解しています。最早今までの生活には戻れないでしょうね？計画通りですよ。

面倒ですので大まかに羅列してみましょう。

◆馬車はサスペンションとゴムタイヤを導入。まだ人数は少ないですが、ドワーフ達が頑張りました。ゴムの木は山ほど生えてますから天然ゴムの入手は容易です。

◆貿易船は魔法能力者専用で、魔法を媒体に推進力を得る方式です。主に風のエレメントを使用する言わば魔法エンジン…ですかね？ですので帆はありません。そして街に張り巡らされた運河を魔法推進型ゴンドラがバス代わりに走ってます。フェリスは無駄に広いですから。

◆コークスの開発を推進。製鉄技術の向上を図るため、現在４基の高炉が試験稼働中。ですがまだまだ鉄に不純物が混じる様で、フェリスの中では使用してますが、商品化はまだ無理です。私は製鉄の知識はありませんでしたから。塩の貿易の際、製鉄が盛んな大陸から少しずつ技術者を引き抜いて現在の状態に至ってます。

◆数種類の抗生物質の開発に成功。平行して竜に乗ったエルフ隊が各大陸に散開、プラントハンティングを続けています。私はペニシリンがカビから培養出来るとしか知りませんが、エルフの学者に話したところ、目を輝かせて研究してくれました。

◆上下水道を都市部で実験的に整備しました。浄水と下水処理を試行錯誤中。これもまだまだです。

◆地下５００ｍから温泉を汲み上げ、公衆浴場を設置し住民の衛生意識を向上。これは皆さん大好評です。地のエレメントが大活躍しましたよ。臭いのはダメです。

◆汲み取り式の公衆便所を各所に設置、後述するフェリス公法にも記載されていますが、野外での用便は処罰対象になります。臭いの

はダメです。

◆暫定ではありますが、フェリス憲法を制定し、これを物事の判断基準としました。併せてフェリス刑法、フェリス商法も制定しました。争いの元は基準が無いことですから。

◆警察機関と司法機関、裁判所を設置。これは法整備と同時に着手しました。概ね好評ですね。

◆公務員の概念を導入。ヤマザキ商会も含めて、基本的にフェリスには公務員しかいません。もっとフェリスが成熟すれば民間企業も自然発生するでしょう。現状はフェリスに依存するのが一番合理的なだけです。

◆エルフの魔法技術と、ドワーフ族の工業技術、私の異界技術をあわせ、通信機器を開発。その第一段として、半径1?の相互通信機器のプロトタイプの完成。先が楽しみですね。

とまぁ、全てが完成したわけではないが、試行錯誤を続け、研究をしている

技術のほとんどが、この世界ではオーバーテクノロジーと言える為、フェリス以外には、まだダウンロードはしない。

これでだいたい現在に追い付きましたかね?結構頑張ったでし

ょう？

後は家族ですか…

イルフィは商会担当の責任者。アキさんは教育の責任者。エバは防諜の責任者。アキさんの師父さんは警察機関。師父さんの次弟は医療と衛生の責任者。師父の末弟さんは軍を率いて貰っています。アキさんの師匠筋の方々は、いずれ語ります。色々察して頂けたら幸いです。ああ、胃が痛いです……。

◆あとフェリス科学技術研究所の所長に師父さんの従兄弟の……はぁ……マッドです。名前は…勘弁して下さい。

アキさんがいた孤児院は、師父さんが私達に協力して頂ける関係で、フェリスに移してくれました。アキさんは実家が近くなりご満悦ですね。

師父さん達は、私達は私の理念に賛成だそうで、向こうから協力を申し出てくれたのです。まあ、そのエピソードもいずれ……イルフィ胃薬下さい！どうもこの話題にはエレメントが反応しません……。

ただ、アキさんが私の側室だとわかると、師父さんが、「うぬがアキに相応しいか見極める」とかいいまして、約一月に渡り組み手と言う名の折檻を受けました。おかしいです。私は最強の筈ですよね？イタッイタタタッ…胃が…すいません、後日で……。

トラウマ…ですかね？

あとはそれぞれの部下の役職者に、各種族の切れ者が集まっています。人事は種族代表に任せてます。その位はやって頂かないとですよね。

皆さんそれぞれ忙しいですが、転移扉の充実から毎日皆で食卓を囲んでいます。今のところみな幸せですね。

ただ最近フェリス結界の側に、王国の調査隊らしき人間をよく見ます。そろそろ計画を進める段階ですかねぇ……。

まぁ、皆で話し合ってみよう。それに、見たいでしょう？宇宙一強い私が暴れる様を。血の雨ですか？降らせますからご安心を。ホッホッホ……。

おや？そろそろ良い時間ですね。イルフィが飯作ってますから帰りますね。

私、こう見えて恐妻家なんです。

では皆さん、ご機嫌よう。

砂糖は甘いッッ

暇です……とても。私は書類整理を終わらせ、執務室の机でダレていました。お偉いさんに祭り上げられ、私は嫌な意味で多忙になりました。

各所からあがってくる書類の決済。住人からあがってくる陳情の吟味。ドワーフ達から上がってくる、アイデアの整理。やる事は山ほどあるのです。

ただ悲しい事に要領はいいのですよね、私。サラリーマン時代、ちまちました内勤はサクサク終わらせて、現場で職人の方々と無駄話に花を咲かせていましたしね。

今も書類関係は終わって、夕方にある代表者の寄り合いまで半日近く空いてしまった。

暇です暇です暇です暇です……。ホッホッホ、ボヤいても1人、ですね……。

「お兄様、そんなにお暇なら空の散歩にでも参りますか？」

と、黒いスーツに伊達眼鏡、長い髪をアップにした、所謂秘書スタイルのエバさんが立っていました。はい、私の趣味ですよ？悪いですか？

出来る女！と言う感じですね！

空の散歩かぁ、それもいいのですが、エバ成分足りてないので近こうよりなさい。

「なっ…そんな破廉恥な……いけませんわっ」

相変わらず小柄な、いえ、幼い、いえ、ロリ巨乳な体をもじもじさせながら、エバさんは身をよじります。

良いから来なさい。と、私は膝の上をポンポン叩きます。

「えっと…あのぅ…いちおー勤務中ですし……えっちなのはいけないと思います……」

結局座るエバさんですが、私の前にはエバさんのうなじが見えます。

うーん…物足りませんね…

エバさん？向きが違います。私を見て座ってくれませんか？

「えっ！それはそれは恥ずかしいと言うかなんというかあのう…そのぅ……えと…」

ホッホッホ……。よいではありませんか？ほうらほうら……。うーん、いい反応ですよ。

では埒があかないのでぐいっと……

「お兄様の顔が近いです……ちゅうするですか？それはまずいと言いますかそうですか…えっと、します？」

貴方は何を言ってるのですか？少し落ち着きましょうね？

と、私は頭をぐりぐり撫でます。エバさんの白髪はつるつるで気持ちがいいのですよ。

「……きゅう…」

ああ、頭から煙出てますね。なんて面白い。クンクン…ペロッ…これはっ！？焦げてます。

エバさんは出会った頃は控えめな感じの、過剰に遠慮するタイプだと思ってたんですが、どうやらそうではなくてですね。要はただの極度の照れ屋なだけなんだよ。

まぁ、それが異様に可愛いのですが、たまに見てて可哀相なときもあるんです。私に甘えたいのに、周りにイルフィやアキさんがいたら我慢するのですよ。そして壁の方でしゃがんでのの字書いていじけてるんです。

他の猫に遠慮して、最後まで餌を食べれい猫みたいですよね。なんだか苛めたくなりませんか？私だけなのでしょうか。ホッホッホ……。

いまエバさんは椅子にすわる私に、こっちむいて跨って胸にしがみついてるんです。コアラみたいにですよ。

ねえエバさん？

「ななっなんでひょう？？」

噛みましたね？

「噛んでましぇん…あっ…」

ホッホッホ、可愛いですねぇエバさんは。

「そんなことないです…可愛くないです…」

強情だなぁ。仕方在りません。ならエバさん、キスしたいので舌出して下さい？

私はエバさんの顔を両手で挟み顔を上げさせ、エバさんの目をじっと見ます。エバさんは顔を真っ赤にして、怖ず怖ずと言う通りに舌を出しました。

「ひゃい」

私はエバの薄くて小さな舌を、ゆっくりしゃぶります。

「んっ……はむっ…」

いやらしいですねぇエバさん？キスで感じちゃうんなんて。ホッホッホ……。

「ちがいましゅ…おにぃしゃまがいへないんでひゅ……」

あらあら、とろとろですねぇ…

私はエバさんの口に私は人差し指を突っ込みます。

エバさんは息を荒くして舌を絡ませてきます。いくら照れ屋だろうと、スイッチが入れば逆にこうなるものです。面白いとは思いませんか？人体。あ、彼女は竜でしたね。クックック…。

私はエバさんのジャケットを脱がし、荒々しくブラウスのボタンを外していきます。

エバさんはこれからされる行為の予感に身をよじります。その必死さが私を尚更そそり立たせると言うのに。

ブラウスの下は暴力的なまでの膨らみが隠れていました。白い肌に薄ら色付くその頂は、やたらと攻撃的に尖っています。

私はそれを触れるか触れてないか程度の力で爪で引っ掻きます。両方の先を何度も何度も…

「はぅっ……あん…ダメでしゅ…恥ずかしいよぅ」

半開きの口から涎を垂らし【ＢＥＥＰ！！！ＢＥＥＰ！！！ＢＥＥＰ！！！ＢＥＥＰ！！！警告します。これ以上の描写を禁じます。繰り返します。これ以上の描写を禁じます。速やかに自重を実行して下さい。繰り返しま……】

「はぁはぁ…おにぃ…様も…気持ちよかっ…た？」

ええ、最高でしたよ？空を飛ぶより気持ちよかったです。偉かったですよ、エバさん？

「なら嬉しいです、おにぃ様」

エバさんもいっぱい飛んだようですし、ね？

「知りません！…あぅぇおにぃ様のいじわる…」

私達は繋がったまま、小一時間くらいキスし続けました。覚えていて下さい。デキル男はアフターケアまでちゃんとするのです。ホッホッホ……。

「へぇ、仕事さぼってヤる事かは置いといて、さすがデキル男は言うことが違うわね？」

はっ！？イルフィ……

「なるほどぉエバの顔を見れば分かりますぅ。なら今度はわたしの組み手の相手をお願いしますぅ。あ、サンドバッグの間違いでしたぁ。ね？ザキ様ぁ？」

げえっ！？アキさん！？これは違うんです！ね？エバさんって居ない！

ホッホッホ……。皆さん、色んな意味でさようなら。

□■□■□■□■□■□■□

随分建物も人も増えましたね、エバさん？

（はい、皆さん頑張りましたから）

貴方も頑張りましたよ？感謝していますよ。

きゅいきゅい♪

黄昏時の空、眼下に見える私達の国。この瞬間が堪らなく好きです。エバさんの背中に乗って見下ろすこの瞬間が。

みんなそれぞれ試行錯誤し、苦労して作り上げた手作りの楽園です。

エバさんはもっと自信を持ちましょうね。

（がっ頑張ります～～～！）

頑張らなくていいです。貴方はたくさん頑張でいるのですから、ね。

（…ぐすっ、はいっ）

愛してますよ。ま、イルフィもアキさんもですから偉そうに言えませんが、ね？

（わっ私も愛してまーーーーす！お兄様ぁぁ！）

ん～？聞こえんなぁ？

（うー意地悪です……）

溜まってた疲れが少し癒された、そんな束の間の休息でした。

砂糖は甘いッッ（後書き）

はぁ……改訂前のこの話、正直ノクターンじゃないと無理でしょう……と自分で思いました。

運営さんともやり取りしましたが、直接的なワードを使わず、ストーリーの一環であるからセーフと言われました。

運営さんすげーな。

いやアウトですよ、改めてみたら……。

と言う訳でマイルドにしました。

と言うかストーリー進んでませんな。

まあ今まであまり萌え成分なかったし許してください

会議からの～憤怒ッッ（前書き）

ああ、キャラクターにあるオマージュが入ります。苦手な方は見ないほうが吉かと思います。

会議からの〜憤怒ッッ

ふわりと何やら柔らかい感触に気が付き、私は目が覚めました。その正体は私の横で片肘をついて、私の寝顔を覗いていたイルフィの白銀の髪でした。

「私の寝顔なんか見てて楽しですか？」

「ふふっ楽しいわよ？　本当は起こそうと思ったんだけどね。あんまり可愛いから、見てた」

「悪趣味ですね？女房殿は…で、なんで起こそうと？」

「ほらっ　朝一から会議があるって貴方言ってたじゃない。　ほら、ね？」

と、イルフィは壁の時計をしなやかな手つきで指示します。この優雅な指の先を辿れば……。

「午前9時、はい遅刻ですね。ホッホッホ……」

そこからの私は凄かったですよ？クローゼットへ走りながらの脱衣。そして、私用に仕立てたタキシードクロスで創られた黒の上質

なイタリアンスーツを着こみ、転送ゲートを起動します。

「あはははは！　ザキったら面白〜〜〜い」

イルフィの高笑いをＢＧＭに、青い顔をした私はゲートに消えるわけです。

ゲートを抜けた先には宮殿の長老執務室です。何もない壁に備え付けた重厚なオーク材の扉、それがこちら側に指定した出口です。もちろん向こう側はカーサンの木です。

さて、髪を整え、荒い呼吸を落ち着け、さあ行きますか。いざ会議室へ。

ちなみにこれはヤマザキ家の割りと珍しくもない朝の風景ですね。え？面白い？なるほどなるほど、殺しますよ？

□■□■□■□■□■□■□

所変わってここはフェリス宮殿、会議室です。

バン！

「はぁはぁはぁ…お待たせしましたね……」

結局宮仕えだった過去の癖か、未だ小物臭が抜けない私は慌てて会議室に飛び込みました。

「おやおや最長老殿、遅刻とは珍しい。　何か急な事件などありましたかな？むしろこう言いましょう、昨夜はお楽しみでしたね？クックック……」

ニヤニヤしながら私を愉快そうに見るのは、エルフ族の長老であるエルファンです。5年前、イルフィの呼掛けに応えたエルフ達の中に、ばらばらになったイルフィの一族達もいました。イルフィの父親にして、3つあるエルフ族の長老の1人が彼です。

言うなれば義父なのですが、茶目っ気が強いのですよ。私は彼が苦手なんです……。まあ政治的手腕は素晴らしく、頼りにはしてるんですよ？一応。

「いえいえ、大したこと事は無いですよ。ただどこかの憎たらしいエルフの爺殿の娘さんが、朝から私を担いだせいで寝坊しただけですよ？」

「クックックッ…それはそれは…御愁傷様です。そんな娘の父親は、何故かニンマリしているでしょうなぁ。クックックッ…」

楽しくて仕方がないと言う様子でエルファンは笑います。この会議室に集う様々な長老達は、毎度繰り広げられるこのやり取りを、完全に娯楽としているのが堪りませんね？

なんですかそのニヤニヤ顔は……。癇に触りますが私は最長老、ポーカーフェイスでやり過ごします。

そしてこれもまた、ここでは珍しくもない朝の風景でなのです。

「それでは始めましょうか。とりあえず、急ぎの懸案事項は……っと無いですよね？それじゃあ各長老からそれぞれ議題があれば発言して下さい」

こうして和やかな雰囲気の会議室は、私の号令でそれぞれの一族を束ねる長老達の話し合いにシフトしていくのです。

フェリスでは月の日、所謂月曜日に、昨週末までにまとめた種族内の要望や提案などを話し合う会議をします。毎日会議をするなんて時間の無駄ですからね。

議題が無ければ即解散となります。その方が効率的であるし、何より私を含め、長老達は忙しいのですよ。雑務が多いですから……。

「では最長老、私から始めさせて戴きますニャ」

ある意味分かりやすい語尾で口火を切ったのは、猫人族代表者のクルンさんです。猫人族はその名のとおり、見た目は二足歩行のヒトそのものですが、頭には猫の耳があり、身体は体毛に覆われています。当然尻尾もちゃんとありますよ。そんな猫人族の族長である彼女は、碧眼に薄い灰色の体毛です。所謂シャム猫を想像していただけたら分かりやすいですね。

私は「はいどうぞ～」と鷹揚に返事をし、ピョコピョコ動く猫耳を真剣に眺めます。見ずにおれますか？私には無理ですね。

「さ、最長老さま！？どちらを見ていらっしゃるので…」

私は机に両肘をつき、顔の前で組んだ手で思わず零れた悪趣味な笑みを隠し、こう言いました。

「ああ、問題ない。計画の遅れは数％だよ。修整は容易だ。全ては猫ミミの流れのままに……」

「クルン殿、いかり…ゲフンゲフン…長老がこうなったらしばらくは帰ってこないよ。　気にしないで続け給え」
と、エルファンは私の斜め後ろに立って言います。ナイスアシストです。で、何故ネタに反応出来るかは追及無用です。面倒ですか

らね？

「は…はぁ、余り見られると何やら恥ずかしいですニャ……。で、では続けますニャ。最近働きに出る獣人族の若い母親が多いのですニャ。それは獣人族が一度に出産する子供が多く、夫婦共働きをしないと経済的にキツいと言う理由ですニャ」

クルンさんは若干、耳を隠しながら発表を続けます。しかし私はガン見を止めません。愛でてこその猫耳。そういう事です。

「それで母親達から多数の陳情が上がっています。獣人族はその肉体的な特徴から、タフな仕事に従事する例が多数です。ですから今以上の収入を得ると言うのは中々難しいです。一般事務よりは多いですが、今以上に増える事はありませんから。ですので福利厚生の分野で、例えば託児所をもっと充実させ、費用の部分はフェリスが考慮が出来ないかと考えています」

「ふむ、なるほど。正直その部分は形だけ整えたまま手付かずでしたね……。ではクルン殿、取り敢えずはイルフィ殿とアキ殿とトーキ殿の所で合同のチームを作って煮詰めてみていただけますか？そしてそれを再度発表して頂きたい。それを叩き台にこの会議で話し合いましょう。イルフィ殿、アキ殿、トーキ殿、宜しいですか？特に財務担当イルフィ殿、会計に関しては損得抜きで便宜をはかって欲しいものです」

「「「承った（りました）」」」

「ありがとうございますニャ」

クルンは嬉しそうに尻尾をぱたぱたしている。和みますねえ。しかし福祉分野の福利厚生は後手でしたか。どうしても先に制度を整えると、そちらは後回しになってしまいます。これは現代地球も一緒ですね。反省しなければなりませんね。

「次は俺の番でいいかな？」

そういったのは研究部門を取り仕切るアミダラ氏です。彼はアキの師父氏の従兄弟にあたる人でして、とにかく研究そのものに取り憑かれた所謂、そう、マッドサイエンストですね……。常に効果の妖しい薬を私に飲ませようとします……。ですがまあ、優秀ですよ？人格は別として。

「俺の所でドワーフ達と開発していた火薬の件だが、漸く実用化にこぎつけた。と、同時にだ？無反動で携帯型の小型大砲のプロトタイプを開発した」

アミダラ氏の研究所で開発していた火薬とは、トリニトロトルエン、所謂ＴＮＴです。それを使い、ダイナマイト、指向性地雷、ミ

サイル等の開発を今行っています。火薬の知識は多少しかありませんでしたが、アミダラ氏の興味を刺激した様で、少ないヒントから実用化まで漕ぎつけました。マッドサイエンストって凄いですね？因みにアミダラ氏の口癖は、「魔法なんかクソだ。魔法で出来る事は必ず再現してやる」です。頼もしい事です。ただ、医師でもあるアミダラ氏ですが、患者を木人形（デク）と呼ぶのは止めて頂きたい。怖いですから……。

「まぁ火薬の性能の向上のおかげで、威力のある小型弾頭の開発ができたのだ。ついでに最長老殿のレポートにあった無反動砲に着手したわけだが…プロトタイプは初速が落ちるのが難点だな…だが俺は天才だぁ～なぁにすぐ解決するさ。フッフッフッ…アーハッハッハッ！！」

うわあ……会場はドン引きですね。因みに私のレポートとは、地球の知識で私が知るものをジャンル分けして纏めた物です。書いとかなければ忘れてしまいますからね。うろ覚えな物ばかりですが、ドワーフやアミダラ氏には興味をそそるようです。

「あ…ありがとうございます、アミダラ殿？取り敢えずいくつかラウオウ殿とKEN殿の部隊に配備してもらい、作戦行動に組み込んだ場合のメリットとデメリットを報告して貰えますか？」

「クックックッ…それは重畳…最長老殿よ。このラウオウ、犯罪者どもを木っ端微塵にしてくれようぞ……クックックックックックッ…」

さらに会場はドン引きです。どうにかなりませんかね？あの血族は。決して悪意は無いのですよ？アキの師父であるラウオウ殿なんか無類の子供好きですからね？

「お…お手柔らかにお願いしますよ？ラウオウ殿。くれぐれも町中を破壊だけはしないでくださいね？……」

「クックックッ…」

見なかった事にしましょう。そしてアキさん、目を逸らすのは如何な物かと。これは夜にお仕置きですね……。

「ＫＥＮ殿は如何ですか？」

「ふむ…たかが人間など指先ひとつでダウンなんだが…まぁいいだろう。　訓練に組み込んでみよう」

ふぅ…さすが××の良心、末弟ＫＥＮ殿ですね。取り敢えず、安心しました。指先１つでダウンは……聞こえませんでした。

「……早く王国を木っ端微塵にしたいものだ」

前言撤回です。この兄弟駄目です。ね、アキさん？あ、やはり目を逸らしましたね……。ああ、また胃痛が……。

「次はわたくしが発言させて戴きますわ、おにぃ…イエ、最長老殿」

防諜担当エバさんです。小柄な身長を誤魔化す凄い高さのピンヒールが健気ですね。

「かねてより編成していた竜神族、エルフ族の諜報部隊からの報告です。フェリスとグランビアの境界エリアですが、前年度に比べ２００％増しでグランビアの人間と思われる旅人に扮した軍所属の人間が増えています。その対策として、エルフの隊員による「忘却」の魔法で惑わし、グランビア北部に運び放置すると言う従来の方法をとっています。が、新しい住人の入植の際にどうしても境界エリアで目撃されてしまいます」

「ふむ…どうしても完璧には防げばしませんか。まあかなりの人数が王国から消えましたしね？これは時間の問題でしょう」

「はい。ですので事後承諾になりますが、東の大陸での入植希望者は一度大陸西側に移動、小舟に乗せて洋上に転位扉を作成し、フェリスに送り込むと言う方法を先月より実施しています」

「まあ現状、それがベストでしょうね。その辺は貴方の判断に任せますので、引き続き警戒をお願いします」

「お待ちください。むしろ本題はこの後です」

「ほう、続けてください」

「はい。　実はグランビアの手の者に精霊魔法を駆使する術者が増えています。グランビアに内偵しているエルフ隊が確認しました」

「なんですって？」

私の動揺した言葉に呼応するように、会場の雰囲気も騒ついていますね。

「それもかなりの能力者もおり、騎士団の中の特殊部隊として既に配備されています。その数は５０人強。数自体は問題になりませんが……」

「なんですか？遠慮はいりません。言いなさい」

「はい……ではエルファン殿、落ち着いて聞いてください…その部隊を率いているのは……エルファン殿の長女、イルミット様であります……」

「なんだとっ！！！　イルミットは先のエルフ狩りで命を落としたはずだ！次女のイルフェンもろともグランビア騎士団槍隊に串刺しにされ、焼かれたのを我は見た！さらに埋葬もしたのだぞ！！戯れ言を申すな！我が娘の死を愚弄すると許さんぞ！！！」

エルファン殿は憤怒の表情でエバに詰め寄ります。まあ、気持ちはわからなくもないですが、ね。

「座りなさい、エルファン殿」

「黙れ黙れ黙れぇ！」

「エルファン殿、静かに。だいたい貴方らしくもない。　報告はまだ終わっていない。そうでしょう、エバ殿？」

「はい、続きがございます」

「と言う事です。座ってくださいエルファン殿。貴方の身内の恥辱は私達の恥辱です。まずは報告を聞きましょう。話はそれからで

す」

「す…すまぬ…取り乱した。申し訳ない、エバ殿…この通りだ」

直ぐ様怒りを隠し、頭を下げるエルファン殿はさすがですね。

「気にしておりませんエルファン殿。では続けます。騎士団内部に潜入した手の者の報告では、イルミット様の人格が以前と顕らかに違うようです。確定情報ではないのですが、どうも何らかの方法で洗脳されていると言うのが有力な説です。埋葬された遺体ですが、どうやら失踪扱いになっているエルフのものかと…ご報告は以上です」

「なるほど……なんと酷い……」

エルファン殿は怒りに震え、俯き、そして震えました。洗脳ですか、ありえなくもないですね。人間のやる事ですから。

「姉さん……」

イルフィはあまりの衝撃に硬直しています。

「ふむ、エバ殿？取り敢えず不確定な情報が多すぎますね。警戒任務は現状維持、そして王宮の件は早急に情報を集めてください。3日あげましょう。それまでに形にしなさい。これは命令ととって戴いても構いません」

「御意」

「皆さん、聞いてください。そろそろきな臭くなってきたようです。各担当者の方は戦争になった場合の被害計算と、住民の避難経路や設備を確認してください。エバの報告を待って再度会議を召集します。そこで具体的な方向性を決めましょう。ラウオウ殿、ＫＥＮ殿は、今を持って戦争状態に入ったと認識して下さい。意味は分かりますね？アミダラ殿は現有兵器をすぐに稼動できる状態に調整を。出し惜しみはいりません。トーキ殿は戦下時を想定した医療のバックアップ体制を準備してください。そして別動隊を編成し、王国の非戦闘員の避難を担当していただきます。皆に言いましょう。私はこの状態を予想して準備してきました。我が異端なる同胞達の皆さん、私は悲しい戦争などしません。その替わりに、悪魔と呼ばれようとも戦争状態になれば城丸ごと一瞬にして焼き尽くします。悲鳴をあげ、祈り、懺悔する。その暇すら与えません。ですが、民は傷付けません。それははっきり宣言しましょう。皆も肝に命じて欲しいです。さて皆さん、一先ず解散です。各々が無駄なく、自分が出来る最善を尽くして下さい。以上です」

「尚、エルファン殿、イルフィ殿は残ってください。では解散」

メンバー達が退出し、会議室は私とエルフの親子だけになりました。2人とも表情がありません。当然ですが。

「婿殿……」

「ザキ……」

「大丈夫です。イルミットさんが洗脳されてようが、自分の意志で王宮に汲みしてようが関係ありません。私は必ずここに生きて連れ帰りますから。だからじたばたする必要はありません。私を信じなさい。いいですね？」

「くっ……ぅぅ」

「ううっ…姉さん」

私は親子を抱き締めました。ただそうするしか出来なかったからです。ただ、私の家族に仇なしたオトシマエ、必ずつけさせて貰いますよ？王国とやら。ホッホッホ……。

□■□■□■□■□■□■□

カーサンの集落

私はカーサンの木にもたれ、瞑想していました。月明かりが優しいです。今日は色々ありましたから、少し疲れたのです。

グランビア王国、彼らには彼らの正義はあるでしょう。ただそもそもの根源は、人間が他種族を道具としてしか見てないと言う部分なのです。

本来は対話でもするのが定石でしょう。それが外交ですから。ですが面倒なのですよ。法もまともに無いような国に対し、そのレベルから対話を積み上げると言う時間が。

ですから私は対話はしません。一方的に蹂躙します。そもそもそれは、王国が他種族に対して今までしてきた事となんら変わりません。なら自分達がされても文句は言えません。そういう事です。そう、これは私のワガママでいいのです。私が気に入らないから殺す。理由はそれで充分です。

「ザキ……」

「ザキ様……」

「お兄様……」

優しい妻たちが寄りかかってきました。私の心の痛みを癒してくれようとしてるらしいです。

「今夜は黙って側にいてください。一緒に星を眺めましょう。……お願いします」

妻たちの返事は、より一層強く私を抱き締める事でした。そんな彼女達の優しさに包まれて、私は目を閉じました。私は幸せです。

会議からの～憤怒ッッ（後書き）

旧作から例の血族を登場させました。

愛着があり切れませんでした。ごめんなさい。

アキに歴史あり（前書き）

まあ、例の兄弟の補則ですわ。

オマージュ苦手な方はごめんなさい。

アキに歴史あり

この世には、決して表に出る事は無いと言う暗殺拳があるという。それは代々一子相伝で伝えられ、決して書物には残されず、継承者のみ口伝で伝えられると言う。

継承者争いに破れた者は、その拳を封じられると言う。その恐ろしき暗殺拳の名は――北東珍拳。

それは遥か北の、そのまた東にある古き寺院を本山とし、今も脈々と受け継がれていると言う。

□■□■□■□■□■□■□

森の中外伝

～世紀末救世主伝説～

アキの拳

□■□■□■□■□■□■□■□

「ぅおおりぃゃああッッ！」

大男の硬き拳が小柄なアキを襲う。

「クッ北東ッ剛ＳＨＯＷ波ァ！！」

小柄なアキが苦し紛れに圧縮された闘気を大男に飛ばす。アキの気合いに不可視である筈の闘気が具現化し、大男に襲い掛かる、が――――

「ふはははッ！ぬるいわ！うぬの拳など、技を使う迄もないわッ喝ッッ！！」

「なっ！？そんなッ！」

アキの剛ＳＨＯＷ波は大男の烈迫の気合いの声に霧散した。アキは驚愕の表情に立ちすくみ、そして己の弱さに腰砕けて座り込んだ。

「師父…わたしは強く、なりたい……」

這いつくばり、涙を流して石の床を叩く。アキは悔しかった。これ程身体を虐め、どれ程精神を追い込もうと、師父に傷１つつける事かなわない。

昨日も今日も、アキが住まうこの孤児院に子供が連れられてくる。どうして自分は弱く、何もできない。まだ子供に過ぎない自分が恨めしかった。

「口惜しいか？アキよ」

「……はい。師父、わたしは強くなれますか？」

身体は傷付き、気力はつきかけてはいるが、目の光だけは絶えずに師父と呼ばれた男、ラウオウはアキを睨み付けるように見た。

「肉体だけは鍛えただけ強くなれよう。だが……。真の強さとは肉体強さのみに非ず。肉体に加え、折れない心を手に入れなければならない。さらには……いや、今のうぬには教えても無駄であろうよ」

「師父ッ、それでもわたしは強くなりたいッ！」

アキは熱い涙を迸らせながら、ラウオウの視線に負けない程の強さで睨みかえす。そんなアキを見下ろしながら、ラウオウはこの気の強い娘が来た日を思い出すのだった。

□■□■□■□■□■□■□

商業都市ザイオンは東の大陸の丁度東にある。そこから王都に向かうには一度街道を北へ向い、いくつかの村を経由し、大陸の北側に達した辺りで街道は西方向、つまり中に向かって折れていく。その折れ曲がった場所はさらに北へ細い道が続いている。その道を半日程行けば、寂れた石造りの寺院と、木造の大きな建物がある。

ここは通称”投げ込み寺院”と呼ばれる孤児院で、口減らしややむを得ない理由で育てられなくなった子供達がやってくる。

その子供達は人間の子に限らず、様々な亜人もいたりする。だがその孤児院の院長は黙して語りはしないが、子供は必ず引き取り、無骨ながら静かな愛情を持って育てる。

連れてこられた子供の中には、酷い虐待を受けた者も少なくなく、特に亜人の子は人間に奴隷にされたりする為、そのケースも多い。

院長はそういう子供達に、集団生活と生きていく術を根気よく教え、卑屈になりがちな心を鍛えていく。

そんなある日、孤児院に新しい子が来た。名はアキと言い、ラウオウはその小柄な少女の印象を”やたらと目だけがギラついている”と感じた。

孤児院は朝がくると年長が年少の身仕度を手伝い、あるものは食事の支度、そしてあるものは院の掃除等、皆が皆、仕事を手分けして支え合う。

そして午前はラウオウの次弟であるトーキが勉強を教え、昼を挟

んで午後からはラウオウの末弟であるＫＥＮが体力作りの指導を行う。そして夕方には寺院で精神修行をし、１日はそうして暮れていくのだ。

そんな中アキは、誰とも話さず誰とも交わらず、いつも人とは離れた場所にいた。３兄弟はアキを不審に思い注意深く見ていたのだが、とくに虐めがある訳でもなく、むしろアキが望んで人の輪から離れているようであった。

ある夜、院の子供達が寝静まった後、寺院では異様な光景が繰り広げられていた。

ＫＥＮは一本指だけで逆立ちをしたまま瞑想している。ラウオウとトーキは向かい合い、殺気を飛ばしあいながら組み手を続けている。諸肌を露にした３人は、何れも凄まじき筋肉で武装されており、昼間彼らが院内で見せる柔和な表情は消え失せ、戦う闘士のそれに変わっていた。

「いくぞッ兄さんッッ北東有情断迅拳ッ！！」

トーキは烈迫の気合を漲らせ、胸の前で合わせた掌で、ラウオウの心臓を突くように突き出した。

「ふっ甘いわッぬうんッッ！」

だがラウオウはさして防御する訳でもなく、硬直させただけの胸板でそれを弾いた。

「今だッ」

ラウオウが弾くために胸を張った。その一瞬の硬直こそがトーキの狙いであった。彼のノーモーションの蹴りがラウオウの真下から真上へ一直線に突き上げられ、それはラウオウの顎を精確に撃ち抜いた。

「ぬぅぅぅ……」

顎への攻撃は脳を揺らす。それは2mを越す巨漢ラウオウとて変わらなかった。一瞬意識が飛びそうになるが、それでもラウオウは長兄たる強烈な自尊心でそれを堪える。

その刹那、ラウオウが見たものは、舞の如くしなやかに宙を浮くトーキの姿であった。

「勝機ッッ北東天翔百裂ケーンッ！！」

燕のような素早さで宙返りをしたトーキは、下降の勢いを殺さぬままにラウオウを強襲する。トーキが繰り出す拳は凄まじく、百にも千もの残像を残すスピードでラウオウを突く、突く、突く。

「ぐぬッッッグハアッッッッ！！」

ラウオウは苦悶の表情で膝を笑わせながら、ガクガクと痙攣している。

「やったか！？どうだ兄さんッ！」

「ぐぬぬっ……ぬぅぅぅ……ヌワッハッハッハ！！腕を上げたなトーキよッ。だがッうぬの拳は軽いのだ。故に効かぬのだ」

全て耐えきったラウオウは、最後の重みが足りない愛弟を哀しげに見る。

「やはりか、私の拳は軽い……コホッ、コホッ」

「トーキ！？うぬは風邪だ。身を労るがよい」

「まったく、兄様はトーキに過保護過ぎるぞ」

「むぅ……しかし風邪は万病の素と言いではないか……我は心配で心配で……今朝など３７度もあったのだぞ！？」

「それは微熱と言うにも微妙だよ兄様」

「馬鹿を言うなＫＥＮよッ！風邪を舐めると恐ろしいのだ！南東のサーザ等は退かぬ媚びぬ省みぬとか言いながら肺炎になったのだぞッ！」

「まぁまぁ、余り兄さんを虐めるなＫＥＮよ。兄弟仲良くが一番さ。だろう？」

「そうであるな！」

「うむッ」

「「「わはははははは」」」

何やら最後で台無しだが、とにかく真夜中の修行は毎晩行われて

いるのだった。だが――――

「……アキよ、そこに居るのだろう？出て参れ」

「……はい。の、覗くつもりでは無かったですぅ……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

ラウオウの見た柱の影からアキが出てきた。伏し目がちにラウオウを見ている。

「アキよ、何故覗いていた」

「わたし、わたし……強くなりたいのですッ」

アキは搾りだすように話し始めた。アキは酒乱の父親がいつも病弱であった母を殴っていた。

小さかったアキはいつも怯え、大好きだった母が殴られるのを隠れて見ているしか出来なかった。陰から見た母の目は、大丈夫だからとアキに言っているようだった。

日に日に衰弱していた母親、ある日アキは耐え切れずに母を殴る父親の前に立ちふさがった。それに逆上した父親はアキを酷く殴った。

その時床に臥せていたはずの母親が立ち上がり、卓にあった果物ナイフを手に取り――刺した。

母親は壊れた玩具のように腰砕け、その場で茫然自失としていたが、やがてアキに”ごめんね”と告げ、力尽きたように倒れた。母親はそのまま二度と起きる事は無かったのだ。

その時アキが思った事は、無力過ぎる自分の腑甲斐なさであった。自分が強ければ母親は死ななかったのでは無かったのか？アキはそい自分を責め続けてきたのだ。

ラウオウ達北東３兄弟は、涙を溢しながら語り続けるアキを静かに見ていた。そしてアキが話しおわるとラウオウはこういった。

「アキよ、うぬは復讐がしたいのか？」

「わからない…です……ただ、こういう思いはもう嫌です……」

「ならばアキよ、北東珍拳をうぬに伝授しよう。ただし、うぬが北東の技を習得した後、うぬがただ復讐の為だけに心を曇らせていたなら、我はうぬの拳を封じねばならぬ。アキよ、うぬにその覚悟はあるか！」

ラウオウはその身に闘気を漲らせ、アキを威圧するように問うた。小さなアキは恐怖に震えた。ただでさえ巨大な院長が、二倍にも三倍にも大きく見えたからだ。

「わたしは逃げませんッわたしと同じような人を守りたいからッ！！」

奥歯をガチガチと震わせながらも、アキはラウオウを見据えて叫んだ。するとラウオウは闘気を消し、優しい笑顔を浮かべるとアキ

の頭を撫でた。

「ならばアキよ。今後は我を師父と呼ぶがいい。我はうぬを容赦なく鍛えよう。だが、同じ北東の者となるうぬは我等の妹であり娘なのだ。精進せよ」

「は、はいッ！！宜しくお願いします師父、そして兄様達ッ！！わたし、頑張りますからッ」

こうしてアキは北東の門を叩いたのだ。

□■□■□■□■□■□■□

「師父……？」

突然遠い目になったラウオウを不審に思うアキであったが。

「アキよ。うぬがここで学べる事はもうない。後は外を旅し、様々な人と触れ合うがよい。そして、愛と哀しみと言う相反する真理を知るのだ。その時お前は夢想の域にたどり着き、真なる北東の奥義を知るだろう。アキよ、ゆけいッッッ！！」

「師父……」

「アキ、君なら出来るよ。だから恐れずに行きなさい」

「トーキ兄様……」

「アキ、お前はもう、知っている。だから行くのだ。それが修羅の道だとしても……」

「ＫＥＮ兄様……。はい、アキは行きます。師父、トーキ兄様、ＫＥＮ兄様、いまばでぇ…ありがどぅございばしだぁぁ、うわあぁぁ！！」

そうして北東の者達はかたく抱擁を交わし、７年に渡ったアキの修行は幕を閉じた。

ある夜にアキは静かに院を出立し、その後運命に出会うまで旅を続けたという。

そして……。

「ザキ様ぁ、もう身体が保たないですぅ」

「あらあら、ここはそう言ってませんよ？ホッホッホ……」

少なくともアキは愛は知った様だ。

アキに歴史あり（後書き）

反省はするが、後悔はしません。基本は作者のおふざけ満載な作品ですから。

エルフ族の事情

イル・クルーツ族とは、三つあるエルフの部族の中の一つである。その中で農耕と狩りを生業とする、穏健派の部族である。

彼らは東の大陸最北部にある、リヴィエラ山脈の中腹にあるエル・ノランと呼ばれる場所に集落を作っていた。

その歴史は古く、五千年とも言われているが定かではない。

この部族の王であるエルファン・デ・イル・クルーツは、今大変困っていた。彼は寡黙であり王たる威厳に溢れ、森を民を愛しそれを静かに見守ってきた。

かつて人間族が軍を率いて攻めてきた時も、民を指示し逃げる事を人間族に意識させ、迷いの結界に追い込む事で被害を最小に食い止めたのも彼である。

エルフとは森の民と呼ばれているように、変化を嫌い、その長い寿命を静かに生きる事をよしとする。特にイル・クルーツの民はそれが顕著で、農耕民族として畑と日がな触れ合い、たまに山の幸を求め、後はパイプ草を喫みながら詩を詠んだりして過ごす。

もっとも王の最愛といえる末娘のイルフィを、騒動の際に失ってしまったのが彼の心に未だ暗い影を落としていた。騒動では長女のイルミット、次女のイルフェンを共に失い、失意のエルファンはまだ生きているであろう末娘を尚更求めていた。

まさか人間に捕まり、奴隷にでもされたのでは無いか？そう思え

ど、騒動で失った命は、彼の身内だけでは無いのだ。故に王である彼は、民の安寧の為に心を凍らせ、表面的には穏やかな表情を作るのだった。

それでも彼は思わざるを得なかった。何故ならば激情の末契り会った彼女の母親は、彼との愛の結晶をこの世に産み落とした時にこの世を去ってしまった。その母親に似て聡明であり、誰よりも優秀なイルフィを王は密かに後継者と決めていたのだから。

その寡黙で偉大な王は今悩んでいた。憂鬱の極みとも言える。

「むぅ……何故だ……」

彼はひとり、深いため息と共にごちた。彼の憂鬱、その理由とは、最近彼の集落から若者が一人、また一人と消えていくのだ。

人間にかどわかされたとかならまだ理解できよう。だが若者達は消える前に誰もがヒソヒソと、そこらで密談らしき事をしているのだ。

王はある時一番の側近であるアルゴンに命じ、若者達の密談を探らせた。

戻ってきたアルゴンはきな臭い顔をしながら報告した。その報告を聞いた王は叫びだしたい程に驚愕した。いや、憤怒、慟哭、驚喜……とにかく、様々な感情を沸き起こしたと言える。

「偉大なる王、エルファン様。この度の一件の元凶は我が王が息女、イルフィ姫であります…」

「な…なんだと！！」

寡黙で尊大な王は思わず玉座を蹴り、叫んで立ち上がった。お前は何を馬鹿な事を言うのだ、そう彼は思った。それ以前に――

「イルフィが生きていただと！？あまつさえ、かどわかしの犯人とな！そんな馬鹿なッ！」

アルゴンはここ数百年は見たことは無い、王の取り乱す様を見て慌てた。それ程にエルファンは普段から寡黙な印象を皆に与えていたのだ。

「かどわかしと言いますよりは、むしろ扇動、外の世界に新しき集落を作り、異種族が集まって自治をしているとの事。イルフィ様はその集落の王の側近……と言いますか、そのぅ、何というかその……はい」

厳格なる男アルゴンらしくない尻窄みな台詞に、王は何やら聞きたいような聞いてはいけないような不安感に駆られた。

「よい…言うがよい…」

「はぁ、イルフィ様は、その新しき集落の王の奥方だそうです……我が王？」

震えている。偉大な王、エルファン・デ・イル・クルーツは怒りに震えている。

「ひ、ひぃ、王よ！お平らにッ！」

「ぐぬぬぬぬぬっ……」

バキバキバキ……王の凄まじき歯軋りの音に、アルゴンはその見事な長き耳を塞いだ。

「どどどどういう事だ！！申せ！全て申せ！隠し立ては許さんぞぉ！！！」

王は地団駄を踏まんばかりに喚き散らした。少々辟易したアルゴンだったが、やがて、昨日若者を締めあげて聞き出した話を王に語った。

曰く、イルフィは死んではおらず、保守的な一族に嫌気をさし逃げ出した。

曰く、人間の男に純潔を捧げ魂の婚姻を契った

曰く、その男の理想である「この世の異端者達の安息の国を作る」に賛同し、一緒に働いている。

曰く、その国には種族や身分の壁はない。貴族も平民もない。竜神族とエルフが愛し合ったり、人間とドワーフが家庭を持ったり、あらゆる古い常識を否定していると言う。

「まぁ…こんなとこでしょうか……王？王！？」

偉大なる王は、震えていた。もしアルゴンの報告が本当ならば、

まるで理想郷ではないかと。それならば人間に虐げられることなく、生きる事が出来るのではないかと。

この封建的な世の中で、もしそれを実現出来たら、素晴らしい話だ、と。

可愛いイルフィを奪った男は気に入らないが…。嫌、絶対に許さん。あまつさえ魂の婚姻？それはつまりセック……セッ…ごそごそしたと言う事だ。許さんぞこの野郎――と言う父親としての感情は置いといて、王は震えていた。それは嫉妬だ。停滞を、現状維持を美徳とするエルフ族。近年は争いに疲れ、諦めにも似た思いも一族の中にあった。

そういう閉塞感を一気に解決するアイデアを成し遂げようと行動するその男に嫉妬したのだ。

「……っ！！」

「我が王？」

「アルゴン、一族のもの、悉く広場に集めよ…」

この一言でエルフの未来は分岐した。明るい終着駅方面に。

□■□■□■□■□■□■□

広場は騒ついていた。騒動で減りはしたが、約４００人近く集まっていた。しかし誰しも不安感に駆られている。何故なら先ほどから、王がこちらを見たまま一言も発しないのだから。

重苦しい雰囲気が今まさに飽和するのかと思われた瞬間、王は口を開らいた。

「我が民よ、一連の騒動のこと、我は聞いたぞ！」

ざわ…ざわ……

「若者の中で我が娘、イルフィの理念に賛同し、この集落を抜けたいものが多数いるという」

ざわ……ざわ……

王は騒つく一同をねめまわし、威圧感を纏いさらに言う。

「我は悲しい。何故若者は王たる我の元へ”イルフィの元へ下りたい”と言いにこないのか！それは罪悪感があるからか？ならば、その想いとはその程度の事よ」

王は挑戦的な表情で語る。若者に怒りと口惜しさが滲む。

「聞け、民よ！我が何故寡黙な王と言われておるか！それは退屈しておったからよ！イルフィが夫の理想、真に感服したわ！そこでだ、我は王として提案する！我を含む有職者で隊をつくり、その地に赴き見極める。我がこれはと思えば、我ら一族この地を捨て、新しき時代の一端となろうではないか！！！」

うわああああああああああああああああ！！！！！！！！！

広場が揺れた。爆発といえる感情の迸りが、新しいエルフの生き方を予感させた。エルファンが寡黙な王であったのは、何も変化を嫌っての事ではなかったのだ。それは責任故にであった。エルフにはそれほどの長い歴史がある。

偉大な先人が造り上げた歴史を、自分が壊していいものなのか？歴代の王は必ずその呪縛にも似た葛藤に囚われる。だが、自身も若かりし頃には外を旅していたものだ。ならば、自分が罪を背負えばいいのだ。そう吹っ切ったエルファンは、変化を求める躊躇を振り切ったのだった。

決して娘を奪った男をぶん殴りたかったからな訳では無いのだ。多分。

この後エルファン達はフェリスに赴き、イルフィに再会した。イルフィの前に立ったエルファンは、彼女の頬を打った。それは王としてではない。家で娘に対峙した娘を心配した父親のそれだった。

「ごめんなさい……おとう…さん…うわあああ…」

父は娘を抱きしめ、娘はただすがりついた。エルファンはヤマザキと会談し、お互いの理想を議論した。

後、二人は固い握手を交わし、フェリスのエルフ人口が増えることとなった。

余談ではあるが、会談が終わったあと、ヤマザキ夫妻による「娘さんを幸せにします。だがら娘さんを下さい」「お父さん、私は幸せよ」「おい、一発殴らせろ」のやり取りがあり、その後意気投合した義理の親子は倒れるまで飲んだと言う。

おしまい

ドワーフ族の事情

ここは南の大陸にある深い森の中の集落である。人口は１００人に満たない程ではあるが、ある特色がある。

武器や防具そして農機具等、鉄製品の製造が盛んなのだ。ここに住む住人はドワーフ族。身の丈は小柄であるが、その体躯はみっちりとした筋肉で覆われており、強靱である。

ただその武骨な見た目に反して、手先は驚くほど繊細であり、例えば彼らが製作したナイフの握りの装飾は芸術品と言われるほど美しい。

彼らは集落そのものがギルドのようなもので、製作、販売まで全てを一族でこなす。

作業は完全に分業制をしき、製鉄するもの、成型するもの、装飾を施す者などに分かれ、製品の完成度を一定に保つ事を美徳とした。

この集落を束ねる長、ルカ老人は最近頭を悩ましている。それは、武器なんか作ってないで、もっと難しい物を作りたい」と、言うものだ。それは彼らが職人であると同時に優れた研究者でもあるからだ。

今自分たちが作りそして生業とする製品は、全て先祖たちが開発したものだ。それを時代のニーズに併せ、改良し、昇華させてきたのだ。

完成した製品に自分たちは素晴らしい物を作り上げたと言う自負

は、たしかにある。だが、職人なればこそ、一から開発をしてみたいと言う欲求は拭えない。

同胞達も同じ思いを抱いているようで、ここ近年皆の顔が暗い。解決策はわからない。だがもやもやとした閉塞感に苛まれるのだ。そんな時の事だ――

「すみません、旅の商人ですが何か入り用なものはありませんか？」

やたらと言葉遣いの丁寧な男が、その背丈くらいある巨大な袋を担ぎ現れた。何か鬱陶しい感じがすると感じて、ルカ老人早々に追い払おうとしたが、言葉遣いが丁寧な男は広場の切り株に座り、次々と商品を並べはじめた。そしてその商品にドワーフ達は目が釘付けになっている。

男が取り出したのは一俵もあるかという塩、そして、二つかみ程の胡椒、そこまで出して男は突然立ち上がった。

先ほど迄のどこかふわふわした気配は消え失せ、今度は辺りをピリリとさせる気配を纏っていた。

そして男は語りだした。誰もが息を呑み、彼の言葉に耳を傾ける。そうさせる何かを男は持っていた。

「偉大なる技術の民、ドワーフの皆さん、私は東の大陸からやってきました。目的は”ある商品を買付け”る為です。まずはドワー

フの皆さん、私の親愛の証として、この塩と胡椒を受け取って下さい」

ルカ老人は驚愕する。この男は何を言っているのか。馬鹿か狂人の類なのだろうか？この塩は宝石が如く真っ白だ。こんな塩は見たことが無い。そして胡椒はどうだ。胡椒など王宮か貴族のものだ。ここにあるだけでも一財産だぞ、と。

「ドワーフの皆さん、勘違いしないで欲しい。ここにある塩は私達の集落で精製したものです。胡椒も私達の集落にて栽培したものです。塩や胡椒など、ただの調味料に過ぎない。こんなものは黄金ほどの価値などある訳がありません。だからドワーフの皆さん？遠慮なく受け取って下さい」

そういって男は胡椒をつまみ上げ、空中に放った。顔を真っ青にしたドワーフの女たちは、慌てて受け取った。

今のパフォーマンスでドワーフ達は完全に飲まれたと言っても良いだろう。だが男はさらに続ける。

「さて、私がまず貴方たちに見てほしいモノがある」

そう言うと男は次々と物を出し、実演していく。まず出したのは、鉄よりも固そうな金属の棒だ。

「これは定規と言う名前のスケールです。これは１mを精確に千等分したものです。これを規格とした図りが私達の集落には幾種類もあり、それを基準に物や街が作られたのです」

男は近場のドワーフに渡し、回し見するように言う。あちこちで驚愕の喚声があがる。それはそうだろう、技術を売りにしているドワーフだからこそ、この定規の有用性を高く理解できるのだ。

同じ規格で作られる。つまりそれは大量生産を可能とし、結果、価格が下げる事が出来るからだ。それはこの世界にとって毒でもあり薬でもある。ドワーフにしたら間違いなく薬であるが、既得権を守りたい層には確実に劇薬であろう。

瞬時にそれを理解したドワーフ達は、無意識に震えた。

「さて次に行きましょう。これを見てください」

男が取り出したのは何かきめの細かい石炭のような物質だ。

「これはコークスと言います。石炭より遥かに高温を発揮し、石炭より圧倒的に不純物が少ないです。これが意味することは貴方たちがよくわかると思いますが、如何でしょうか？」

先ほどの衝撃がさざ波に思える程のインパクトがドワーフ達に駆け巡った。

当たり前である。不純物の少ないと言うことは、今よりも格段に純度が高い製鉄が可能と言う事だ。

さらに今までは出来なかった合金も実現可能かもしれない。

その可能性の高さから、ドワーフ達はそれぞれ、頭の中に図面をひいた。

「どうやら理解して頂けたようで嬉しいですね。では次ですが……」

「ちょっと待っていただきたい！」

「貴方は？」

「ワシはこの集落をまとめる者で、名前をルカと言う……」

「聞きましょう」

「話の腰を折ってすまないが、先ほどあんたはこういった。買付けたいモノがあると。じゃが、お前がもってきた商品と言うより技術は、正直ワシらでは考えもつかない技術じゃ……」

と、ルカ老人はため息をつき、さらに続ける。

「ワシらに買付ける商品など、あろう訳が無い。　お前はワシらを笑いにわざわざ東の大陸から来たのか！？」

男は不敵な笑みを浮かべて、こういった。

「ありますよ？私が買い付けたいものはちゃんとあります。そしてそれは、いま私の目の前にあるのですが？」

ドワーフ達はキョロキョロと見回すが、一様に首を傾げた。

「もう一度言います！私が買付けたいものは目の前にあります。それは貴方たちです。技術の民ドワーフの皆さん！」

「ワーハッハッハッ！！愉快！愉快じゃ人間の男よ！ワシら職人の腕を買いたいとな！そう、そうなんじゃ、ワシらは退屈しとったんじゃ。どうかな皆の衆、我らドワーフ、そっくりまるごとこの人間に買われてみようではないか！？」

次の瞬間、広場は熱狂に包まれた。ドワーフ達は解放の余韻に酔い痴れた。もうただ機械的な作業はしなくとも良いのだと。この妖しい男は、ドワーフの本質を理解してくれてるのだ、と。

この後大量のドワーフ達が南の大陸から消えた。音もなく。

程なく東の大陸の隠れた都市で、静かな産業革命が起こるがそれはまた別の話だ。

疑念からの～暗躍ッッ

グランビア王国グランローズ城玉座の間。その端には王都を見下ろすバルコニーがある。そこには身の丈１８０?を越え、痩身であるがしなやかな筋肉に包まれた紳士然とした男がいた。彼のさらりと後ろに流した見事な金髪、抜けるような青さの碧眼は、彼を一見甘いマスクに見せるが、身体から静かにあふれ出る覇気が、彼が只者ではないと言う印象を与えている。

彼は整ったその顔の眉間に皺を寄せ、城下町を眺めている。そこには月明かりに照らされ、広大な城下町が浮かんでいた。その街並を眺め男は一つ、溜息をついた。

彼の名前はエドワード・ボールドウィン・オブ・グランビア、この国の王であった。今年４５歳になるが、未だそのあふれ出る若々しさは衰えてはいない。

彼は若かりし頃、騎士団を率い数々の功績を上げている。しかし彼の二つ名は”暴君”である。徹底した合理的思考、そして何かを達成するためにはどんな犠牲をも厭わない冷徹さ。それをより端的に表現した言葉が”暴君”なのだ。

彼の父はその温厚な性格から、民の信望厚く、国民全てから愛されていた。しかし王族派と貴族派の対立において消極的とも言える政策から、王宮の財政は火の車だった。彼の性格がそうさせたのだが、王としては優しすぎたと言える。

エドワードはそんな父を軽蔑し、早々に引退をせまると、騎士団の圧力をバックに有力貴族を次々と粛清し、その家族すらも縛り首

にして見せしめとした。

次にエドワードは空いた領地を直轄地とし、小作人と言う名の奴隷に、半ば強制労働を強いた。

生き残った諸侯に強いる税率も高く、次々と貴族達から力を奪っていった。そして王宮に溜め込まれた財はほとんどが軍備に注ぎ込まれ、西の大陸から造船の技術者を招聘し、たくさんの戦艦を製作した。

彼には計画がある。それは技術大国であり様々な鉱山を所有する南の大陸に、大軍をもって攻め入る事だ。彼にとってなんの資源もない東の大陸には愛着も郷土愛もない。

南の大陸を占領して本拠地をそちらに移し、そこで力を蓄えて、さらに北、西と侵略するのだ。

全て手中に納めて真の暴君になる。それが彼の計画の全てである。

現在の騎士団は、以前捕えたエルフを締め上げ吐かせた魔法の仕組みにより、七割が魔法を使える。――とは言っても、エレメントに干渉は依然出来ない。それを解消する魔導具を開発したのだ。捕えたエルフは魔導具造りにも長けており、クリスタルに無理やりエレメントを宿す事で擬似的に魔法を使えるのだ。

因みにその作成に携わったエルフは皆、死んだ。抵抗するエレメントに無理やり干渉したせいで、精神が持たずに廃人となったからだ。エドワードにとって、役に立たないエルフはゴミ以下でしかない。そして廃人となったエルフは、下級兵士の慰み者として与えられ、散々と犯された挙句に首を撥ねられたのだ。

平民から徴兵した軍勢は総勢４万人に届き、そろそろ仕上がる。後は船と食料が想定数に届けば、準備は全て整う。だが最近、彼の計画が狂いはじめている。

まず船の技術者が大量に消えた。次に王宮傘下の国営企業全般に、利益が格段に落ちた。さらに穀物の価格が高騰しており、手が出せない。偶然にしてはあまりにも出来すぎている。

不思議な事は他にもあり、各地からエルフ族、ドワーフ族、獣人が大量に消えたと言う。

グランビアの貿易船が、見たこともないような形の船が有り得ない程の高速で航行しているのを何度も目撃した。

王国東の森は街も村も無い密林なのだが、多数の人影が目撃されたという報告も上がってきている。

「……私の計画を邪魔立てする勢力があると言うのか？だが一部の人間しか知らぬはずだ。相場や流通から読んだと言うのか？それにしては解せぬ……だが不気味でもある……」

月明かりだけの暗がりの中、エドワードの顔が醜く歪む。エドワードの苦悩は尽きない。

「お父様？」

そっと呼び掛けたのはエドワードが息女、アリエスである。父と同じ見事な金色の髪、宝石のような碧眼の瞳、そして高い身長を受け継いだ。鼻筋はスッと通り薄く結ばれた唇、切れ長の目がより一層彼女の気品を高くする。

今年１４歳になるアリエスに対してエドワードは、出来るだけ純粋培養で育てた。王家の娘とは所詮政略結婚の材料であるとエドワードは思っているのだ。

ならば余計な知識や思想など邪魔なだけだ。せいぜい煌びやかに、社交界の蝶であればいいのだ。後は蜜に群がる羽蟲のように、有力者に気に入られれば良いと言うのが、エドワードの考えである。

そんな思いを隠しエドワードは、アリエスの前では良き父親を演じていた。

だがアリエスは生まれつき、感の鋭い娘だった。父親の全てはわからないが、ただ彼の瞳の奥に見え隠れする、なにやら不気味な感情は薄々察していた。

時折自分を見ている父の視線が、度々自分を突き抜け何か違うものを見ているような感じがするのである。その時のアリエスは父親に対し、凍るような感情を抱く。

だが父親を不審に思う感情を悟られるわけにはいかないのだ。何故なら父は娘とて邪魔になれば容赦はしないだろうからだ。ならば演じてやろうではないか、道化の姫を、と言うのがアリエスの本音

であった。

「どうしたんだ？アリエスよ」

微かに笑みを浮かべ、娘を抱き寄せる。

「夜風は体に毒ですわ。そろそろ中にお入りになってください」

アリエスは父を見上げて言う。可愛らしく理想的な姫の笑顔で。

「すまんな、アリエス。そう言えば明日の遠乗りだが、私はいけなくなった。替わりにジョーンズに頼んでおいた。すまんが明日は一人で行ってくれるか？」

「……構いませんわ、お父様。　残念ですが明日は楽しんで参ります」

アリエスはすまなそうに言う。　本音は息苦しさから解放されてほっとしていたのだが。

「ではアリエス、私も今日は休む。お前も眠りなさい」

「わかりました。おやすみなさい、お父様」

茶葉は終わった。アリエスが出ていった扉をエドワードはしばらく眺めていた。その顔に表情は、ない。

「パーシルはいるか？」

「はっ……」

玉座の後方から漆黒のローブで顔を隠した男が現れる。幽かに見えるその顔は、老人のようであり若者ようにも見える。

右手に抱く髑髏を模したまがまがしい杖が、彼の不気味さを際立てる。

「パーシル、我が国の東の森、不気味だ。…探れ」

「……御意」

「それと、エルフの女はどうなった」

「完全に仕上がりました」

「ふむ…ご苦労。行け」

パーシルと呼ばれた男は音もなく闇に溶けた。エドワードは冷笑を浮かべ、さらりと自慢のブロンドを撫でた。

「私の邪魔だては許さぬ…」

誰ともなくエドワードは呟き、そして出ていった。

後は静寂があるだけだった。

□■□■□■□■□■□■□

フェリスの最長老執務室では、既に深夜であると言うのに小さな明かりが灯っていた。

黒檀の一枚板で作られた見事なテーブルに足を乗せ、この部屋の主であるヤマザキは一人、酒を飲んでいるのだ。

この酒は、ヤマザキレポートから吸い上げた知識で、エルファン達が造り上げた醸造酒であった。まだ試作段階ではあるが、中々の芳醇な薫りがヤマザキの鼻腔を心地よくくすぐった。

「……エバさんですか？」

「はいお兄様。どうやらはしゃぎ過ぎのお子様が、多数迷い込んだようですわ？」

ふとヤマザキが気配を感じた壁から、音も無くエバが現れた。

「せっかくの私の優雅な時間を邪魔するとは、子供とは言え、お仕置きが必要ですね？ホッホッホ……、行きますよ？エバさん」

「御意ですわ」

そして執務室からは、明かりが消えた。

□■□■□■□■□■□■□

鬱蒼とした森の中、月明かりも届かないこの場所は漆黒の闇夜のようである。そしてその中をいくつかの息遣いが聞こえ、かさかさと微かに足音がする。

「……そろそろ例のエリアに入る。気を抜くな」

『……はっ』

リーダーらしき男の声に、何人かの男が呼応した。彼らはグランビア王国騎士団、その斥候部隊の人間である。

現在、第三小隊と呼ばれる彼らは、普段装備しているプレートメイルではなく、みすぼらしい猟師の姿をしている。その総勢は五人。彼らはある任務を帯びてここに居るのだ。

それはこの森の中で目撃されたたくさんの人間が消失した場所を探る為だ。

実は何度も人を送って来たのだが、全て音信不通になっている。死体すら見つからない事から、何ものかに誘拐されたと考えるのが妥当である。

そこで七つある斥候部隊の三番隊に命令が下ったのだ。彼らは一番のエリートであり、斥候でありながら高い戦闘力を有していた。

「しかし、なんの物音もしない。些か不気味だな」

リーダーの声に隊員達は無言で頷く。作戦行動中に私語は命取りである。だが、小動物の気配すら感じない森の闇に、歴戦の猛者たるリーダーも嫌な予感がしたのだ。

「やあ、こんばんは」

三番隊の約１０ｍ先に、何か白いものが降ってきた。隊員達は一斉に身構えた。流石にエリート部隊である。そこに躊躇は微塵も無

かった。

「貴様は誰だ。ここで何していた」

リーダーが抑えた声で問いただす。

彼らの前に降ってきたのは、白い細身のパンツにやはり白いカッターシャツを無造作に着こなした男、ヤマザキであった。

「挨拶をしているのに。全く、王国の人間は礼儀を知らないのですか？ホッホッホ……」

「貴様は何を言っている？私達はただの猟師だぞ」

「揃った足並み、最小限に抑えられた足音、そして咄嗟の身のこなし、そんな猟師は見たことは無いですが、まあいいでしょう。私はただ、おいたが過ぎた礼儀知らずの子供にお仕置きをしに来ただけですよ？ホッホッホ……」

愉快そうに笑いながら、ヤマザキは立っている。リーダーは感じた。よく分からないが、この男は危険だと。リーダーは密かにハンドサインを隊員に送り、警戒状態から殺戮行動への移行を指示した。障害になりそうなものは、なる前に消せ、それが三番隊のモットーであり、この隊の生存率の高さの裏付けでもあった。

隊員の弛緩していた筋肉が緊張状態になったその時———

「めぇめぇ黒羊さん、羊毛はありますか？

はいはい、あります。三つのふくろにいっぱい

一つはご主人様に、一つは奥方に、そしてもう一つは小道の向こうに住んでいる男の子に……」

突然歌うように話しはじめたヤマザキに、隊員は機先を刺された。

「何を訳の分からない事をッ！」

「あらあら、私はおバカさん達に童謡を歌ってあげたのですよ。三つの袋があっても、王様と貴族に取られて一つしか残らない。そういう意味です。楽しいでしょう？ああ、そうそう。———死ね」

暗闇の中、トマトが潰れたような音がした。

「ああ、服が汚れてしまいました。エバさん、帰ったらお風呂に入りましょうね？ホッホッホ……」

そして誰も居なくなった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

疑念からの～暗躍ッッ（後書き）

あれ、一人称のはずが何故……。

失踪からの～邂逅ッッ

「なにぃ！ザキがいないとはどういう事だ！！」

イルフィは慌てていた。何故なら彼の執務室に、彼自身から頼まれていた書類を届けにきたのだからだ。だがその頼んだ本人がいない。イルフィが怒るのも頷けよう。

たまたま宮殿に居合わせたアキに聞いても知らないという。エバは任務でいない。そもそも彼女の部下は基本的に姿を見せない。だから当てにならない。

清掃婦の猫耳も犬耳も見てないという。

「おかしい…朝は普通に出勤したはずだ…まさか！？……誘拐なんて…」

イルフィはそう叫び、公邸を飛び出していった。宮殿に働くものは夜叉の如き彼女を、目を合わせたら殺られると一斉に目を逸らしたのだった。触らぬエルフに祟りなし。

～警察隊詰所～

ハッ！ハッ！　ハーッ！

ハッ！ハッ！　ハーッ！

「まだまだ気合いが足りぬわッ。拳に闘気を込めよ！！貴様ら、正拳を千本追加だ！」

『了解しました拳王長官殿！！』

ヤマザキの行方を探しに警察隊詰所にやってきたイルフィだったが、あまりの光景に絶句した。

「暑苦しいわ…」

イルフィの肩に疲れがのしかかった。何という暑苦しさだろう。立ち昇る汗で陽炎がゆらゆらとしている。そのむせ返るような男臭さにイルフィは目眩がした。

「おお、イルフィ殿か。今日も麗しいな。して、こんな場所にいかようか？」

「ありがとうございますラウオウ殿。実は最長老様が公邸から消えたのだ。まさかとは思うが、誘拐の恐れもあるし…」

「ウワッハッハッハ、イルフィ殿とあろう者が面妖な。ヤマザキ殿は我が弟ケンザブロウと何やら打ち合わせとか言っておったわ。いってみるがよい」

「はぁ…安心しましたわ。ありがとうございますラウオウ殿。では早速向ってみますわ」

イルフィはそそくさと詰所を飛び出していった。あれ以上あそこにいれば、間違い無く汗の臭いにやられる。男祭は勘弁して欲しかったのだ。

～フェリス軍基地～

北東3兄弟が末弟、ＫＥＮはフェリス軍基地の空倉庫にいた。瞑想するＫＥＮはまさに夢想の境地にいた。

「ケンザブロウさん？」

イルフィは扉から顔だけ覗かせて声をかけた。中に入るのを躊躇させる気持ち悪さがここにはある。この兄弟はダメだ。彼女は先ほどそれを確信した。

「……」

「ＫＥＮ殿」

「……」

「ＫＥＮ殿ッ！」

イルフィの呼掛けにぴくりとも反応を示さないＫＥＮ。だがよく見たら薄目を開け、何かを求めるようにイルフィを見ている。

「ケーーーンッ！」

「やあ、イルフィ殿。本日はどうなされた？」

本当に面倒臭い。イルフィはそう強く思った。表情には出さないが。

「ああ…失礼しました。最長老様がこちらに来たと聞きまして」

「なるほど。確かに先程までたしかにここにいた。だが、無反動砲を嬉々として試し打ちしていたが、突如”飽きたから託児所で猫耳モフる”と言い残して消えたのだ」

「はぁ…了解しましたわ。託児所ですね…」

若干魂が抜けかかりながら、イルフィはふらふらと居住区エリアに向かう。ヤマザキは時折、獣人が保母を勤める託児所に”視察”の名目で押し掛けるのだ。ふかふかの猫娘を愛でるために。

～居住区内託児所～

「あのぅ…最長老様はこちらにいますか？」

イルフィはもう勘弁して欲しいとうんざりしながら託児所を覗いた。

「最長老のおじさんはアキお姉ちゃんをいぢくるんだ～！って言って出ていったよ！」

可愛らしい猫娘達の邪気のない答えに、イルフィはとうとう崩れ落ちた。

「……ふりだしへ戻るってマスに止まった気持ちね……ははは……」

「いる様だいじょうぶ～？」

「いいの…じゃあね、みんな……」

完全に魂の抜け出したイルフィは宮殿へ向かった。よろよろと病人のように。

～フェリス大公公邸～

宮殿に戻ったイルフィは、そろそろランチでもと思案していたアキを見つけた。

「ア～～～～キ～～～～～～！！　ザキはどこ～～～～～～！！！」

イルフィはアキに走り寄ると、襟首を掴んで激しく揺すりながら持ち上げた。所謂ネックハンギングツリーと言うプロレス技のようだ。小柄なアキの足が空中に浮いている。

「ひぎぃぃ…イル姉様ぁ……しぬぅ…気道がしまっ…ぐえっ」

「うるさいッ私はあのバカ探してフェリス一周したの！！言いなさいアキッッあいつはどこ行ったの？キリキリ吐け！今すぐ吐けッ！」

イルフィは毘沙門天が如き憤怒の表情で、アキの首からこめかみグリグリ攻撃に代え問い詰めた。

「らめぇッ頭われちゃうからららめぇッ！言いますから放してぇ……ふぅふぅ。あのぅ…たっ大変言いづらいのでしゅが……」

イルフィは仕方なくアキを放した。

「　あ　　に　　よ　」

「あぅっ…えっと…イル姉様が来たらこう言えと……」

「だ　か　ら　な　に　！」
視線で人が殺せるなら、イルフィは確実にいま殺しているだろう。そんな目をいま彼女はしている。

「えっと…イル、私はちょっと外に遊びにいきますね。探しても無駄ですよ。アバヨッ！だそうで…ひぃぃぃぃ」

ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ　ゴ…

アキは見た。地鳴りのような音と共にイルフィからあふれ出る何かを。

「イ、イル姉様が、さ、殺意の波動に目覚めたですぅ……に、逃げなきゃ……」

アキは思う。今のイル姉様に迂闊な事を言えば、北東珍拳の使い手である自分とて命が危ない、と。

「もういや！も～～～うイヤ！！あんなバカ死んじゃえ！！あたし帰る！おうち帰る～～～～！！ヤマザキのウンコ垂れ～～！！！」

イルフィは泣きながら帰っていった。アキは寿命が縮む思いをしたが、逆に貴重なイルフィのキャラ崩壊を見れて、内心はちょっと得した気分だったのは内緒である。今日もフェリスは平和だったと

言うことなのだろう。イルフィ以外は……。イルフィに幸あれ。

□■□■□■□■□■□■□

所変わってここはグランビア王国の王都グランビアである。人が賑わうメインストリートにヤマザキはいた。

呑気に商店や屋台を物色しているようだが、実はそれは正確ではない。彼は王都の人々を直接見たかったのだ。

華やかな街並だが、圧政の下敷きになった民衆の表情を自分の目で確認したかったのだ。ヤマザキはいずれグランビアを滅ぼすつもりでいた。しかし民衆は巻き込みたくは無い。

ヤマザキは戦争を仕掛けるつもりでいたが、まともに合い四つで組む気はさらさらない。ヤマザキは最大限の現代知識を応用する。そして一気に城ごと瓦礫の山にし、一晩で更地にするつもりである。

要は城と配下の諸侯の領地を標的とした一方的なジェノサイド（虐殺）である。戦争ともなればグランビア側だけでなく当然フェリスにも被害がでる。ならば、圧倒的な戦力で物理的に城を更地にすればいい。それがヤマザキの結論だった。

戦闘が長引けば必然的に弱者が疲弊する。だから強襲作戦を用い、一気にカタをつける必要があるのだ。

綺麗事であり、青臭い理想論かもしれないが、ヤマザキはそれを可能にするのが自分であるし、また、そうしなければ意味がないと思っていた。

国を滅ぼすには、なにも全て焼き尽くす必要は無いのである。そう、頭をつぶせば良い。しかもこの国は独裁政治であるし、影響力のある貴族は王であるエドワード自身で粛清した。

ならばたたく場所は少なく、そして判りやすい。だからヤマザキは単身で潜入して、民衆の現状を把握しようとしているのだ。

そして殲滅作戦を遂行する前に、出来るだけ民衆を避難させる工作をするつもりなのである。

そのためには扇動者や、民を誘導できる有力者などの協力者は必須と言える。ならばと、目星を付けるためにヤマザキは街をくまなく見て歩く。

いつもの様に張り付いた笑顔を浮かべる彼には、その思惑は窺い知れないが。

「やあ。こちらの果実をいただけますか？」

ヤマザキはある果実店に足を止めた。

「あらいらっしゃい。見ない顔だね？可愛らしい顔してるから3

銅貨にまけとくよ！」

恰幅のいい女性店主は、快闊に笑いながら軽口を飛ばす。

「これはこれはありがとうございます。美人の奥方？時に奥方、随分とこの商店街は寂れていますがどうしたのですか？」

林檎のような果物を袖で磨き、ヤマザキはしゃくしゃくと頬張る。

「や、やだよ美人だなんて！照れるじゃないか。まったく、からかうんじゃないよ！……商店街が寂れているのは物が無いからさ。何もかもみーんなお国がもってっちゃうのさ！あたしら乾上がっちまうよ」

そういって女店主は忌々しそうに吐き捨てた。

「それはそれは大変ですね。まあ、近いうちにどうにかなるでしょう。心配なさらずにね？マダム。ご馳走様です。では私はこの辺で」

「あ、ちょっとあんた！……行っちゃったよ。近いうちに？何のはなしだろうねぇ」

首をかしげる女店主に背をむけ、ヤマザキは一通り見極めたとフェリスに向かう。一応収穫もあった。後は現在、王宮の潜入任務についているエバ隊と協議して、具体的な作戦を立案すればいい。

そしてヤマザキは王都から消えた。

□■□■□■□■□■□■□

ヤマザキはフェリスに戻らず、王都の外れの森にある湖に寄り道した。何故ならば突如、悪寒に襲われたからだ。何やら今宮殿に帰ったら身が危ない。ヤマザキはそう思った。

どうもこのまま宮殿に帰り、書類に囲まれるのは嫌だったと言うのもあるだろうが。そうしてヤマザキは湖の畔の木陰で昼寝に興じる事にしたのだ。

□■□■□■□■□■□■□

「もし？もし？…大丈夫ですか？　お体の加減がお悪いのですか？」

ヤマザキは突然揺り起こされ目をあけた。

「……おや、眠ってしまったようですね。起こして頂きありがとうございます。綺麗なお嬢さん？」

ヤマザキは寝呆け眼で目の前の少女を見つめた。

「なっ…何を突然！　ぶぶぶ無礼ですよ！　せっかく私が心配したと言うのに…き、綺麗だなんて破廉恥ですっ！」

「それはそれは失礼しました。変な意味では無いのですがねぇ。まあいいでしょう。私はヤマザキと申します。貴方、お名前は？」

「貴方……まあいいです。私はアリエスと申します。それよりこんな場所で何をしているのですか？　見たところ貴族の方…とは思えませんし……」

アリエスと名乗った少女は困惑気味に言う。と言うのもこの湖は王家の保養地でもあり、平民が出入りは許されていないのだから。彼女の困惑は当然と言えるだろう。そしてアリエスの目が細くなる。警戒の色が濃い。

「私ですか？私は貴方が見ままの昼寝ですよ？王都に商売にいった帰りに涼しげな湖を見つけたから寝ていただけです。お分かりか？お嬢さん」

「っ！！子供扱いは止してください。全く…無礼ですよ！」

アリエスは「私、とても怒っています！」と言わんばかりの様子だ。膨らませた頬が隠しきれない幼児性を滲じんでいたりするのだが。

「まぁそんな怒りなさんな、お姫様。可愛い顔が台無しですよ？」

「なぜそれを！まさか刺客！」

「そんなわけ無いでしょう……先客は私。寝てたのも私。起こしたのはお姫様。さて、お邪魔虫はどちらでしょうか？」

ヤマザキは相変わらず寝転んだままニヤニヤと笑いながら言う。城であれば不敬罪間違いなしである。

「はぁ、わかりました…お邪魔虫はわたくし。貴方は刺客ではない。これでよろしいですか！？」

「ダメです。それじゃ許してあげません。私のガラスのハートはズタズタなんです」

にやりと悪戯っぽい笑みを浮かべたヤマザキに、アリエスの顔に血が上る。意外と短気なようだ。

「なっ…お詫びに差し上げるものなど今は持ち合わせておりませんわ！」

「なぁに簡単な事です。お金はいりませんからね。貴方はちょっとこうして、そうそのままです」

「ひあっ…」

ヤマザキはアリエスを木陰に座らせ、その太股に頭を乗せた。所謂ひざまくらである。

「しばらくじっとしてて下さいね。お姫様のひざまくらに勝る品など無いでしょうから。私は満足です。ホッホッホ……」

と、笑ったままヤマザキは目を閉じた。

「ふふっ…かないませんわ？ヤマザキ様には。いいでしょう、我が膝をお詫びの品としましょう。有り難く思いなさい」

「はは～有り難き幸せでございまする～♪」

「あははっ…不思議なお方」

思わず笑みをこぼしたアリエス。もう堅さは無い。

「それがいいでしょう。貴方はは笑っていた方が可愛いのですから」

ヤマザキは薄目を開けて、アリエスに呟く。

「なっ…なにをいきなり…」

「最初貴方は眉間に皺を寄せていました。いくら王族とは言え、貴方くらいの年頃の娘がする表情じゃありません。きっと普段は気持ちを隠して生きているのでしょうね」

「あっ貴方に何がわかると言うのですか！」

アリエスは思わず声を荒げた。ヤマザキに見透かされたようで、それが図星だったからだ。

「さぁ？私に詳しい事など分かりませんよ。ただ貴方が辛そうにしてるのはわかります。顔にそう、書いてありますからね」

「貴方に…貴方に…気やすく言われたく…ない…ぅぅ…」

アリエスは言葉の最中に堪え切れず、ぽたぽたと涙を零す。だが泣き声はあげない。それはアリエスの中の小さなプライドだからだ。

誰にも弱みは見せない。見せたくない。見せたら自分を守れないから。王宮には味方は一人としていない。本音で語り合える友もいない。

なればこそ彼女は小さな心に鍵をかけ、本音は封じる。それがア

リエスの必死に身につけた唯一の防衛手段だったのだから。

だがヤマザキはあっさり鍵を破り中に踏み込んだ。彼の気ままそうな物言いが、悔しく、羨ましかった。

自分が一生出来ない気儘な生き方。それをこの男が持っていそうで、嫉妬した。

「泣くのは気持ちいいでしょう？」

ヤマザキは彼女の涙を指で掬い、そして優しく笑った。

「……はい」

「笑う事も多分、同じだけ気持ちがいいですよ」

「はい…私は心から笑った事が無いので判りませんが……」

「ふふふっ…ならひとつ予言をしましょう。近いうちに貴方は心から笑えるようになるでしょう。必ずね？」

「そ、それは、どういう意味ですか？からかわな「冗談でも戯れ言でもありません。ならば賭けをしましょう。半年以内に私の予言が実現しなかったら、何でも貴方の言うとおりになりましょう。例えこの命を所望したとしても」

相変わらず微笑んだまま、ヤマザキは柔らかく言う。途方も無い予言とやらを。

「じゃあ私が負けたらどうしますの？」

アリエスは何やら不思議な気持ちになってきた。いいじゃない、例え戯れ言でも。そう思った。どうせ駄目で元々。そもそも自分には失うものなど無いではないか？そう思ったら何やら楽しくなってきたアリエスである。

「そうですね？私が勝ったら貴方をもらいましょう。貴方の頭の先から、足の先まで私のものです。私は生命を掛けるのですから構わないでしょう？」

「ふふふ…いいでしょう。見事わたくしをさらってごらんなさい、ヤマザキ」

「おまかせあれ、お姫様。わたくしめが、悪い悪魔に幽閉された貴女を救ってみせましょう！」

ヤマザキはおどけて舞台役者のような大袈裟な礼をする。

「……出来る事なら、お待ちしてます…必ず」

「御意……ですがその前に手付けをもらいましょう」

「…手付け??」

チュッ

ヤマザキはアリエスの唇に軽く口付けた。

「なっ…なにを…はぅぅ……せっ、接吻…」

「ホッホッホ、確かに手付けを戴きましたよ?お姫様。では、いずれ会いましょう。ヤマザキの名、忘れぬ事です」

ヤマザキは転移魔法で姿を消した。

「ハンタさま……アリエスはお待ちしてます…わたくしを助けて……」

アリエスは静かに泣いた。やがてキッと表情を引き締め、その場を後にした。その表情はいつもより、少しだけ凛としていた。ありえはしない、仄かな希望を胸に……

この二人の偶然の邂逅は、後にエドワード王にとっては最悪な邂逅となった。

幕は開いたのだ。物語は始まり、静かに主役を待つ。あるものには喜劇そしてあるものには悲劇。ただ間違い無い事は、主役の１人はヤマザキだと言う事である。

□■□■□■□■□■□■□

～集落ヤマザキの自宅～

「もう許してください」

「だ　　ま　　れ」

ヤマザキの正座は夜通し続いた……憐れだが自業自得と言わざるを得ない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8825y/

むしゃくしゃしたから森の中から成り上がってみた

2011年12月11日01時03分発行